2001 2 Feb.



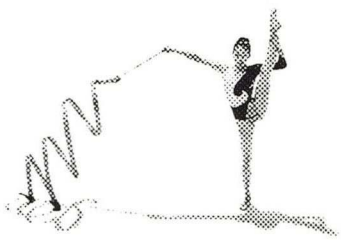
Architecture and Society

建築と社会

特集　21世紀の建築設計教育

日本建築協会

勇気をくれる空気。



あ、ここにも高砂の空気

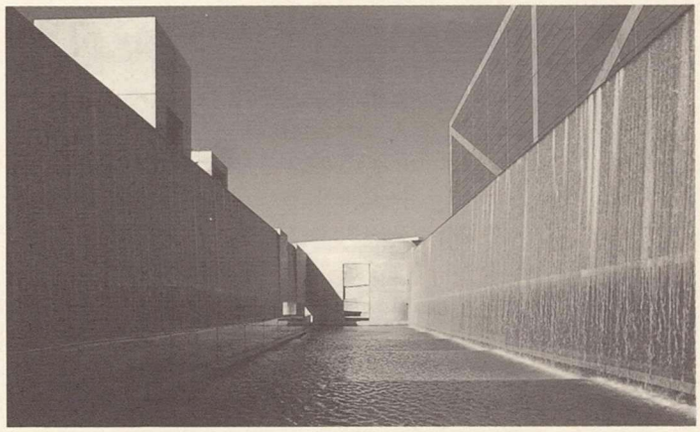
大空間
空調技術

たった一度の数秒間、数分間。そのために何年も費やす選手たち。そんな彼らがすべてをかける瞬間、会場の空気はピンと張りつめます。その空気の中に、暑さや寒さ、湿気、ホコリなどがあって選手たちの集中力がそがれないように。私たちは体育館の様な大空間へも、オーダーメイドの空調システムを提供。高品質な空気をお届けし、記録と勝利に挑む選手たちの勇気をあと押しします。

人・空気・未来
高砂熱学工業
本社 〒101-8321 東京都千代田区神田駿河台4-2-8

大阪府立 狭山池博物館見学会

日　時　2001年 3 月 6 日(火)
13:30―16:30
講　師　河野敬太郎
大阪府富田林土木事務所
狭山池ダム建設工区長
小山田宏一
大阪府土木部ダム砂防課資料館G主査
水谷孝明
安藤忠雄建築研究所
集　合　現地／大阪狭山市池尻中3-630
＊南海高野線「狭山遊園前」より徒歩約15分
定　員　60人 ＊申込多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 2,000円
＊税込
申　込　2 月27日(火)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名:狭山池博物館見学会
②氏名
③個人会員・団体会員・一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を 2 月28日(水)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会
事業委員会見学会小委員会
担当主査：松本　剛／大阪府建築都市部

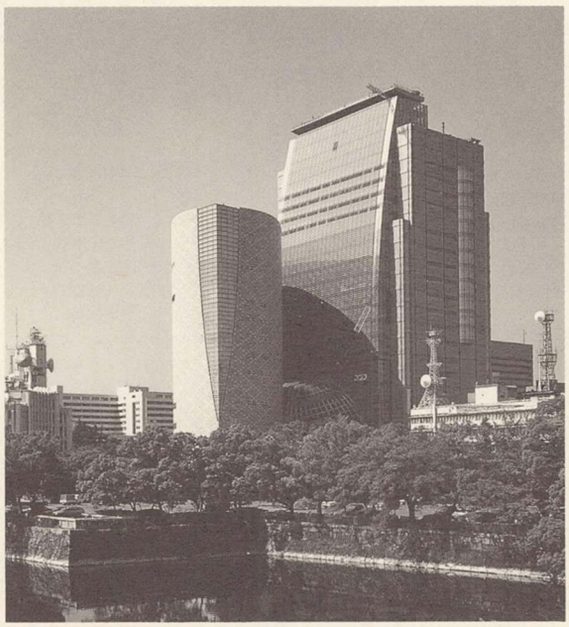


狭山池は、七世紀初頭に誕生した日本最古のダム形式のため池です。古事記や日本書紀にも築造の記録が見られ、その後、奈良・鎌倉・江戸・昭和等の各時代に、幾度かの歴史的修築を経て今日に至っています。
今回、平成の大改修を契機に、各時代の土木技術遺産を紹介し、狭山池ダムのもつ歴史的意義を後世に伝えるとともに、日本の土地開発の歴史のさまざまな情報を発信するために、本博物館を建設いたしました。
設計にあたっては、周辺環境を含めて建築を考えて堤からゆるやかに連続し、地中に埋め込むように建築を配し、露出する外壁部分は周囲の景観と馴染ませるために石積の壁とし、周辺環境から突出せず、狭山池と一体となった施設としています。内部は、狭山池の誕生から1400年間に及ぶ改修と土木技術の発展の歴史をたどることができるように配慮しました。

●建築概要
所在地　大阪狭山市池尻中3-630
建築主　大阪府土木部ダム砂防課
設　計　安藤忠雄建築研究所
監　理　板垣建築事務所
安藤忠雄建築研究所
施　工　藤木・井上JV
敷地面積　15,412.00㎡
建築面積　3,773.53㎡
延床面積　4,948.47㎡
構造規模　RC・一部SRC、3F
工　期　1997年 6 月～1999年 6 月(建築本体)
オープン　2001年 3 月末（予定）

NHK大阪新放送会館 大阪市立博物館 ・考古資料センター 見学会

本プロジェクトは、大阪市の「難波宮跡と大阪城公園の連続一体化構想」の一環として計画されたもので、21世紀の情報発信基地として、現NHK大阪放送会館が旧体育館跡地に移転し、歴史系総合博物館としての(仮称)大阪市立博物館・考古資料センターと一体の複合施設として建設される。



当地では、大阪の歴史的ルーツとされている難波宮の貴重な遺構が確認されている。遺構の保存と活用を図りつつ複合施設が一体的にかつ有機的な相乗効果を発揮でき、また大阪の過去と未来を結ぶ文化のシンボルとなる建物を目指している。
建物の構成においては、NHK棟を垂直の曲面及び水平の曲面がゆるやかにセットバックして空へ伸びゆく姿形とし、博物館棟は水平の曲面による紡錘形とし公共施設として印象に残るシンボリックな姿形としながら、周辺の歴史的施設と強い関係性のある配置としている。そして全体的には、水の都・大阪にふさわしい「風をはらんだ帆船」をイメージさせるものとなっている。

●建築概要
所在地　大阪市中央区大手前4-6-35
用　途　放送局、劇場、博物館
建築主　日本放送協会、大阪市
設計監理　NHK技術局・大阪市都市整備局・日本設計・NTTファシリティーズ・シーザーペリアンドアソシエーツジャパンＪＶ
施　工　大林・竹中・戸田・三井・安藤JV
敷地面積　12,999.93㎡
建築面積　7,415.20㎡
延床面積　89,823.98㎡
NHK47,518.03㎡、博物館23,649.06㎡
共有18,656.89㎡
構造規模　SRC・S、B3・18F・P2
最高高さ　NHK棟134.965m、博物館棟83.34m
工　期　1997年12月～2001年 4 月

日　時　2001年 3 月28日(水)
13:30―16:30
講　師　種村俊昭／NNC設計JV
平澤　要／大手前JV総括所長
集　合　現地
大阪市中央区大手前4-1-59
＊地下鉄「谷町４丁目」駅より徒歩約５分
定　員　100人 ＊申込多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 2,000円
＊税込
申　込　3 月21日(水)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名:NHK+博物館見学会
②氏名
③個人会員・団体会員・一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を 3 月22日(木)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-6348-0633
FAX.06-6348-0634
〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会
事業委員会見学会小委員会
担当主査：坂本良高／大林組

大阪市環境事業局 舞洲工場見学

大阪湾の臨海部、人工島の「舞洲」に建設されているごみ焼却工場は、900トン／日の処理能力をもつ、西日本最大級の施設です。
建設地である舞洲は環境共生型のまちづくりを目指しており、本施設においても様々な試みを導入し、環境との共存を目指して計画されています。そのため、公害防止設備の設置はもちろん、エネルギー回収面でも最新技術を導入し、焼却余熱を利用した高効率の発電を行うなどエネルギーの有効利用を積極的に図っています。

また環境への配慮は、建物緑化を積極的に行うとともに、建物のデザイン面でも考慮され、外観デザインは、環境保護建築プロジェクトの巨匠フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー氏の手による自然との共生をテーマにしたユニークな外観となっています。
フンデルトヴァッサー氏は、オーストリア出身の画家で、環境アーチストとして世界的に著名な方で、建築作品はヨーロッパを中心に数多くあり、大阪市内でも「キッズプラザ大阪」内に作品が実現しています。



●建築概要
所在地　大阪市此花区北港白津1-1
発注者　大阪市環境事業局
設計監理　大阪市都市整備局
　昭和設計
　フンデルトヴァッサー（外観デザイン）
施　工　竹中・大成・錢高JV
敷地面積　約33,000㎡
建築面積　約16,800㎡
延床面積　約56,000㎡
構造規模　（工場棟）SRC・RC・S、B2・7F・P2
　（煙　突）RC・S、GL+120m・φ12.4m
工　期　1997年3月～2001年4月（予定）

日　時　2001年 3 月27日(火)
　14:00―16:00
講　師　平賀　良／大阪市環境事業局施設部技術主幹
　渋谷康雄／大阪市都市整備局営繕部設計課長
　内本清重／大阪市都市整備局技術監兼営繕部工事課長
集　合　現地（舞洲／市バス「此花大橋西詰」停すぐ）
　大阪市此花区北港白津1-1
　＊JR「桜島」（環状線「西九条」で乗換）駅前より市バス利用が便利です。
定　員　50人 ＊申込多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 2,000円 ＊税込
申　込　3月19日(月)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　①催し名:舞洲工場見学会
　②氏名
　③個人会員・団体会員・一般の別
　④職場・学校名
　⑤参加証郵送先
　⑥連絡先電話番号
　をお知らせ願います。
　＊参加証を3月21日(水)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　TEL.06-6348-0633
　FAX.06-6348-0634
　〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会
　事業委員会見学会小委員会
　担当主査：熊野健司／大阪市都市整備局

出版委員会企画
第24回<プロのノウハウ>講座

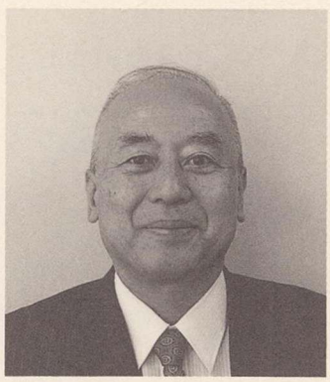
建築基準法の性能規定を読みこなすコツ

日　時　2001年 3 月16日(金)
　18:00―20:00
会　場　日本建築協会サロン
　＊大阪駅前第3ビル21階
講　師　高木任之氏
　芝浦工業大学講師
定　員　30人
受講料　会員3,000円、一般4,000円 ※税込
テキスト　<プロのノウハウ>『建築基準法の性能規定を読みこなすコツ』
　テキスト代　特価2,400円 ※税込
　＊当日ご持参の方は不要。
申　込　本会事業課へハガキかFAXかまたは電話でお申し込み下さい。
　①催し名（「プロのノウハウ講座24」）
　②氏名
　③個人or団体会員、一般の別
　④職場名or学校名
　⑤受講票の送付先・電話番号
　をお知らせ下さい。
　先着順で受講票を送付します。
申込先　〒530-0001
　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　大阪駅前第3ビル21階
　㈳日本建築協会事業課
　TEL.06-6348-0633
　FAX.06-6348-0634

昭和25年の施行以来の大改正といわれました平成10年の建築基準法の一部を改正する法律のうち、2年間の準備期間を経て、いよいよ平成12年6月1日より、いわゆる「性能規定」に関する部分が施行されました。難解と評判の「性能規定」について、『建築基準法の性能規定を読みこなすコツ』の著者であります高木任之氏を講師にお招きし、直接お話を伺う貴重な機会を得ました。氏は、難解な建築基準法を分かりやすく解説されるその道の第一人者です。今回の講座におきましては、1.不燃・準不燃・難燃材料、2.耐火・準耐火・防火構造、3.耐火・準耐火建築物、4.避難規定、5.防火設備、6.一般構造、7.構造強度規定、8.設備規定の各項目における性能規定に関する条文解説を中心に、この法律の持つ本来の意義といった本質をついた議論や、本では表現できなかった裏話？などなど様々なお話が伺えるものとご期待ください。
日頃、忙しく建築実務をこなしておられる皆様方に「一服の知的刺激清涼剤」として、奮ってご参加いただければ幸いです。　出版委員　岡田邦弘（大林組建築設計部）



企　画　㈳日本建築協会
著　者　高木任之
発行所　㈱学芸出版社
発行日　2000年11月20日
体　裁　四六判288頁
定　価　2,500円+税



高木任之氏（たかぎ　ただゆき）
●昭和30年：北海道大学建築工学科卒業
●主な勤務歴：建設省住宅局建築指導課課長補佐、自治省消防庁予防課課長補佐、千葉県都市部建築指導課長、建設省都市局都市再開発課課建設専門官、同計画局宅地開発課建設専門官、宅地開発公団事業部長、住宅・都市整備局公団都市開発事業部第一部長を経て退官、㈶性能保証住宅登録機構専務理事、㈳日本木造住宅産業協会専務理事、東洋大学建築学科講師（都市計画・建築法規）を歴任、現在、芝浦工業大学講師
●主な著書：『新版　建築基準法を読みこなすコツ』『都市計画法を読みこなすコツ』『建築関連法規を読みこなすコツ』『建築基準法の難解条文を読みこなすコツ』『改正建築基準法ーテーマ別総合解説』（以上、学芸出版社）ほか多数

平成12年度 建築工事実務講習会

主催 ㈳日本建築協会

■趣旨と内容

- 官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の有能な技術者を養成する目的をもって、講習会を開催します。
- とくに取りつきにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき講義します。
- また、都市環境の変化に伴う法令・規準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
- 「積算業務」では建築数量積算基準にのっとり、また「仮設見積」ではS造・地下１階・地上13階建事務所ビルをとり上げ、わかりやすく解説します。

■申込要領

下記受講申込書の受講希望科目を線で囲み（両科目とも受講される場合は、両方を線で囲んで下さい）、必要事項をご記入の上、受講料を添えて本会事業課までお申し込み下さい。（受講料は銀行振込・郵便振替でも可。但し、その場合お払込みいただく前に、必ず受講申込書を郵便かFAXでお送りください。）引換えに受講券をお送りいたします。

※定員に達し次第締切ります。

■申込先

㈳日本建築協会

〒530-0001 大阪市北区梅田1-1-3-2100
（大阪駅前第３ビル21階）

TEL.（06）6348-0633 FAX.（06）6348-0634

- 受付時間　毎日、午前９時半～午後５時半。但し、土・日・祝日を除く。
- 詳細は、事務局事業課へお問い合わせください。

■科目・講師

施工計画

- 仮設・地下工事　関川　詞之氏
  大成建設㈱関西支店建築部工事計画室次長
- 上部工事・工程　佐貫　　久氏
  神戸大学大学院自然科学研究科後期博士課程

施工計画はその良否が、いかに能率よく、品質を確保し、安全で、経済的に本体工事を施工するかの鍵をにぎっています。仮設から仕上げ、設備にいたる工事全般について、適切な施工計画をいかに立案するか、その要点をわかりやすく説明します。

＊

と　き　平成13年3月7日(水)
　　午前9時～午後5時
ところ　大阪府建築健保会館･6階ホール
　　（大阪市中央区和泉町2-1-11）
定　員　100名
受講料　10,000円（テキスト代、消費税を含む）

仮設見積・積算

- 仮設見積　金澤　稔氏
  ㈱大林組本店建築生産技術部副部長
- 積算業務　高熊　満氏
  ㈱竹中工務店大阪本店見積部見積担当副部長

仮設工事費は全体工事費に対して大きな比率を占めているにもかかわらず、単に床面積当たりとか請負金比率といった概算で見積りされている場合が多いのが現状です。ここでは、施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。また、コスト算出の基盤は正しい数量積算にあります。正確な数量の算出が厳しい環境にも即応したコスト計画は、生産過程の基礎でもあり、社会的にもますます重要視されてきています。

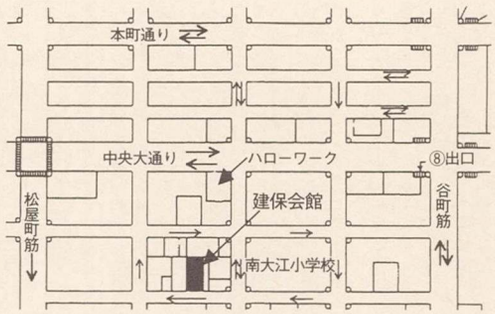
ここでは、建築技術者として必要な積算基準に沿った実務及びチェックポイントの知識が身につくようにわかりやすく解説します。

＊

と　き　平成13年3月14日(水)
　　午前9時～午後5時
ところ　大阪府建築健保会館･6階ホール
　　（大阪市中央区和泉町2-1-11）
定　員　100名
受講料　10,000円（テキスト代、消費税を含む）

■受講料振込口座番号

- 取引銀行
  住友銀行高麗橋支店
  （普通No.860034）
  三和銀行瓦町支店
  （普通No.210054）
  大和銀行北浜支店
  （普通No.272234）
- 郵便振替
  00910-9-39975



大阪府建築健保会館付近見取図

キ リ ト リ 線

平成12年度建築工事実務講習会 受講申込書

No.＿＿＿＿

社団法人　日本建築協会　御中

平成13年　　月　　日

郵便番号	受講者氏名	年齢	受講希望科目 ※両科目とも受講される場合は、両方を線で囲んで下さい。	
所在地			施工計画	仮設見積・積算
事業所名（または氏名）			施工計画	仮設見積・積算
担当責任者			施工計画	仮設見積・積算
電話番号			施工計画	仮設見積・積算
受講料支払方法　●事務局へ持参　●現金送金　●銀行振込　●郵便振替　いずれかに○印を付して下さい。				

※受講申込書が足りない場合は、複写して下さい。

読者と織りなす

たて糸よこ糸

「建築と社会」では、読者の声を誌面づくりに役立てるために、皆様の意見と、編集担当者の声を掲載していきます。

■歩道を暴走する巫女さん

先日、内藤廣さんと対談する機会を会社の同僚と得、上京した。内藤さんの“(最近の)若い建築家は刹那的でしょ”という言葉が妙に記憶に残った。

翌日、裏原宿と外苑前のプロジェクトを見学した。そこで気になったのが、“延焼線内での乙防(今や古い呼び方ですが)サッシ”。裏原宿では網入ガラスと透明ガラスがコーキング納まり、外苑前では網入ガラスは使われてないように見受けられた。(少なくとも隣地側至近距離から見える範囲では)もしかしたら法22条地域かと思ったが、隣家は乙防サッシを使っていたので、そうではなさそう。

確かに、見た目はある意味新鮮に映る。しかし、影響力のある人の建築がこんなことでいいのだろうか。例えば住宅用乙防サッシが木造のみ可などという不可解な点も現実にはあるが、建築が本来受け入れるべき法的な条件を無視した表現は感心できないし、それよりも“デザインの強度”自体に疑問を感じた。

ロンドンでは自転車は歩道を走ることが完全に禁じられている。彼らが車道を走り危険な目をして得られるものは、「スピード」。それは日本でも原則同じはず。日本の名物、“歩道を全力疾走するママチャリおばさん”は自転車の車道走行の原則(法律)やその背景など知る由もないのでしょう。が、そんな原則を教わる必要もなく、誰でも自転車を買えてしまう日本という国。

“義務と責任”そして“リスクと利益(建築の場合は美しさ)”を考えなくても良い社会。そんなおかしな社会構造が反映された結果がこれなのかぁ、と思いながら二つの物件を後にした。

(編集委員　M·I)

■構築と蓄積

最近、「波瀾万丈のナポレオン」という本を読んだ。“我が輩の辞書に不可能という文字はない”という有名なナポレオンの言葉があるが、その真意について書かれた一節があった。

“「不可能なし」という彼の信念は、勝利の結果ではなく、「原因」であった”と…。つまり、偉業を実現したことを誇って、「我に不可能なし」と言ったのではなく、「人間に不可能なし」と確信していたというのだ。そうナポレオンに確信させたものが、実は、生涯貫き通した“読書”であったという。彼は読書が好きで、戦争に行くにも専用の移動図書館を持って行って、毎日何冊かの本を読んでいた。世界諸国の歴史や地理、法律、天文学、地質学、気象学、財政論、人口論…etc。

読書によって、自分をより良い自分に形成していったナポレオン。今、建築基準法の大改定が行われ、性能設計の在り方について議論が交わされているが、専門書や参考書など関係図書を読みあさりながら、その趣旨を明確に理解し、一建築家としてよりよい社会資本の構築、蓄積のために努力していきたいと考えている今日このごろである。

(編集委員　R·S)

切り取り線

「建築と社会」読者アンケート

「建築と社会」では、読者の方々のご意見を参考に、充実した誌面づくりをめざしております。今月号で、とくによいと思われた作品、記事、その他についてのご意見をFAXでご送付下さい。
なお、このご意見は、読者と選ぶ第2回『建築と社会賞』の1次選考に反映されます。

□とくによいと思われた作品

よいと思われた理由

□とくによいと思われた記事

よいと思われた理由

□その他、本誌についてのご意見や、取り上げてほしい内容などがありましたらご記入下さい。

2001年2月号

送付先：
㈳日本建築協会
「建築と社会」

FAX 06-6348-0634

お名前

□ご意見は、“たて糸よこ糸”欄に取り上げさせていただくこともありますが、その場合はイニシャルのみを掲載させていただきます。

勤務先　　TEL

建築と社会 2 2001

ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第82集／通巻947号

今月の表紙

デザイン／笹村欽也
今垣内千恵
建築写真／河合止揚

●大阪ガスビル

設計／安井武雄建築事務所
施工／大林組
竣工／1932年4月
所在地／大阪市中央区平野町

●御堂筋側の表情は今も変わらず、美しい。平野町側は少し改修されているが、ほぼ当時のままの表情を残している。町並みへの配慮か、御堂筋側から徐々にスケールをおとし、基壇部のデザインが、西面へと流れていく。どの面も押さえた表現の中にきらりと光る個性を放つ。大阪を代表する名建築である。
（笹村欽也）

■特集予告

3月号／東海支部会員作品
岐阜・大垣における
IT産業振興の狙いと試み
4月号／IT社会におけるきずな

編集委員会（平成12年度）

■副会長
井上　豊
葉袋　公明
■編集理事
内田　直樹
小島　雄
佐野　吉彦
竹中　統一
畠山　祐治
広原　盛明
松村　慶三
◎宮田　照久
山田　修
■特集小委員会
□計画分科会
★計画系
伊縫　憲幸
梅田　善愛
梅村　宏尚
小浦　久子
※鈴木　克彦
田中　直人
紅谷　昇平
松田奈緒子
横関　真紀
吉村　英祐
★建築計画系
江副　敏史
菅野　忠司
小林　優子
佐藤不二男
桜井　則雄
※笹村　欽也
塚本　史郎
所　千夏
野田　隆史
服部　光宏
吉村　淳二
★インテリア・住宅系
石川　佳子
石谷　彰敏
加藤　力
北浦かほる
小梶　吉隆
佐藤　勝紀
田中　浩介
高野　直樹
※西田　和子
ペリー史子
□構造分科会
岩永　速典
※大氏　正嗣
金田　興熙
河野　隆史
木下　隆嗣
岸本　一蔵
佐治　明志
園田　隆一
田中　剛
田辺　太一
陶器　浩一
松村　和夫
□設備分科会
梶井　宏修
河津　隆之
近藤　国夫
※近藤　正一
田ノ畑好幸
西岡　道雄
野口　太郎
桝井　貴廣
村上幸三郎
谷津　和久
山根　敏和
□施工材料分科会
※植田　実
小椎八重猛
竹中　秀文
太刀川丈爾
十倉　毅
能美　敏男
増田　信久
□法令分科会
伊勢　照男
衣笠　春幸
黒木　省二
※椎名　辰之
中島　和也
西　輝行
■作品作風小委員会
△赤木　隆
淺尾　宏
朝倉　一晃
居内　章夫
井上　雅祐
川上比奈子
倉渕奈千子
寺岡　宏治
中村　文紀
前川　治彦
増田　敬彦
増田　俊哉
山田　俊紀
吉田　健二
■会員企画小委員会
稲木　裕子
大谷由紀子
河崎　敦子
△高岡　伸一
高田　光雄
高橋　麗子
辰巳　清一
塚口　明洋
辻川ひとみ
福田　瑞穂
■広告企画小委員会
小幡　義明
加納伸太郎
小山　昭
斉藤　治久
田淵　博昭
△武田　修示
千葉　耕作
平松　勉
福西　延招
前田　衛
渡邊　浩文

◎委員長 △副委員長 ※幹事

印　刷　2001年1月25日
発　行　2001年2月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本データネット株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕

CONTENTS

特集● **21世紀の建築設計教育**

[総論] 建築設計教育はどう変わるか―マス教育への対応を考える―●鈴木成文 18

[アンケート・1] 大学での取り組みについて

（国立）
大阪大学工学部建築工学科●柏原士郎 20
京都大学工学部建築学科●宗本順三 21
京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科●西村征一郎 22
神戸大学工学部建設学科（建築系）●狩野忠正 23
奈良女子大学生活環境学部人間環境学科（住環境学講座）●吉村篤一 24
和歌山大学システム工学部環境システム学科●本多友常 25

（公立）
大阪市立大学工学部建築学科●杉山茂一 26
京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科●本多昭一 27
滋賀県立大学環境科学部環境計画学科●内井昭蔵 28

（私立）
大阪芸術大学芸術学部建築学科●久保清一 29
大阪工業大学工学部建築学科●辻　正矩 30
大阪産業大学工学部環境デザイン学科●竹鶴祥夫 31
関西大学工学部建築学科●荒木兵一郎 32
近畿大学理工学部建築学科●小島　孜 33
神戸芸術工科大学芸術工学部環境デザイン学科●齋木崇人 34
摂南大学工学部建築学科●田中直人 35

[アンケート・2] 企業アンケートにみる大学の建築設計教育の課題●鈴木克彦 36

（設計事務所）
アーバンエース／浅井謙建築研究所／市浦都市開発建築コンサルタンツ／浦辺設計／エヌ・ティ・ティファシリティーズ／小河建築設計事務所／小西設計／坂倉建築研究所／昭和設計／大建設計／東畑建築事務所／徳岡昌克建築設計事務所／内藤建築事務所／日建設計／日本設計／安井建築設計事務所

（総合建設業）
大林組／奥村組／鹿島建設／鴻池組／清水建設／錢高組／大成建設／竹中工務店／戸田建設／藤木工務店／松村組

（住宅メーカー）
エス・バイ・エル／積水化学工業／積水ハウス／大和ハウス工業／ミサワホーム／三井ホーム

（その他）
ジェイアール西日本旅客鉄道

[アンケート・3] 卒業生へのアンケート 40
市嶋久嗣／歌　一洋／岡田聿之／岡本弘之／柏木浩一／川村眞次／遠松展弘／増地秀夫／吉羽裕子

会告 大阪府立狭山池博物館見学会．NHK大阪新放送会館・大阪市立博物館・考古資料センター見学会．大阪市環境事業局舞洲工場見学．〈プロのノウハウ〉講座㉙建築基準法の性能規定を読みこなすコツ．平成12年度建築工事実務講習会．読者と織りなす“たて糸よこ糸” 1

九州の作品
はこざき公園内科 6
宮崎市民プラザ 8
ホークスタウンモール 10
桜島フェリーターミナル新築工事 12

gallery マテリアルの可能性（久武正明）●淺尾　宏 14

建築の眼 住み続けられた風景（2）●吉田高子　住民参加からパートナーシップへ●時田　繁
建築家の自邸●黒田長裕　建物と人間の近似性（2）●曾根健二 16

REPORT モロッコでの協力隊活動―フェズは美しい―●槙村吉高 45

REPORT 可能態という問題群●末包伸吾 46

素材と技術が生みだすデザイン 「鉄」●森田　隆×大氏正嗣 48

法令コーナー 交通バリアフリー法●木村満治 50

構造の頁 ユニバーサル・スタジオ・ジャパン™の構造エンジニアリング●村上陸太 52

設備の頁 大便器のバリアフリー化への対応●太田吉喜 54

施工材料の頁 屋外・屋内仕様レーザー墨出し器●尾崎浩雅 55

information 大阪市の「建築物に付属する緑化施設表彰」「大阪市都市環境アメニティ表彰」．タキロン国際デザインコンペ入賞．環境共生住宅10周年を記念して、堀口捨己展―ギャルリー・タイセイで―．阿部展也展～シュルレアリスムから幾何学的抽象へ～．“ミュージアムグッズ人気コンテスト” 56

月間の動き 平成12年12月分 58



外観北面

はこざき公園内科

作品 作風
九州の作品

設計監理　陽設計事務所・大林組九州支店
施　　工　大林組九州支店

□安らぎの治療空間

患者さんの視点に立った、腎臓透析専門病院として、平成８年にスタートし、院長の社会的使命感の基、今回のII期工事をもって、入院施設をもった地域医療の核が完成した。

建築的テーマは、２万坪の公園と川に接する立地条件を活かし、患者さんにとって、長時間の治療によって生じる圧迫感を、解放できる施設を実現する事である。

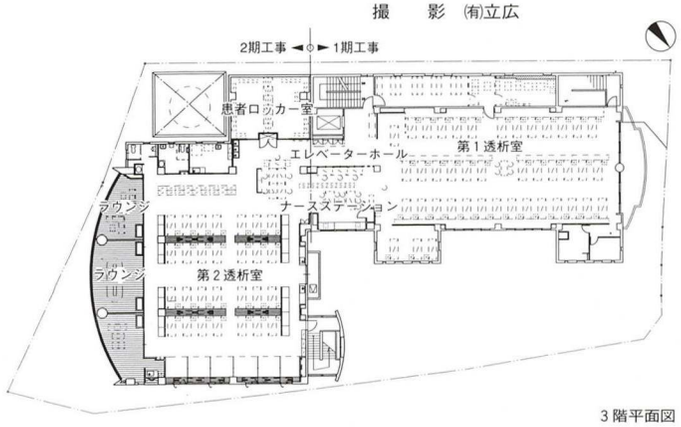
第１透析室は、ドーム天井により、無柱空間、間接照明を確保し、第２透析室では、PRC梁により、高い天井高さと、自然採光の広々とした空間を提供した。

ラウンジと透析室の境界には、水耕栽培による自然植栽を設け、透析前後の患者にとって、くつろぎのスペースとなるよう配慮された。

空調設備も個々の体調に合せコントロールできるなど、より患者さん視点に立った充実した施設となった。

（平野善美／大林組九州支店）

所 在 地　福岡市東区原田４丁目
敷地面積　1,791㎡
建築面積　1,126㎡
延床面積　2,927㎡
構造規模　RC、3F
工　　期　1999年９月～2000年６月
最 寄 駅　JR鹿児島本線・箱崎駅
撮　　影　㈲立広



３階平面図



外観南面

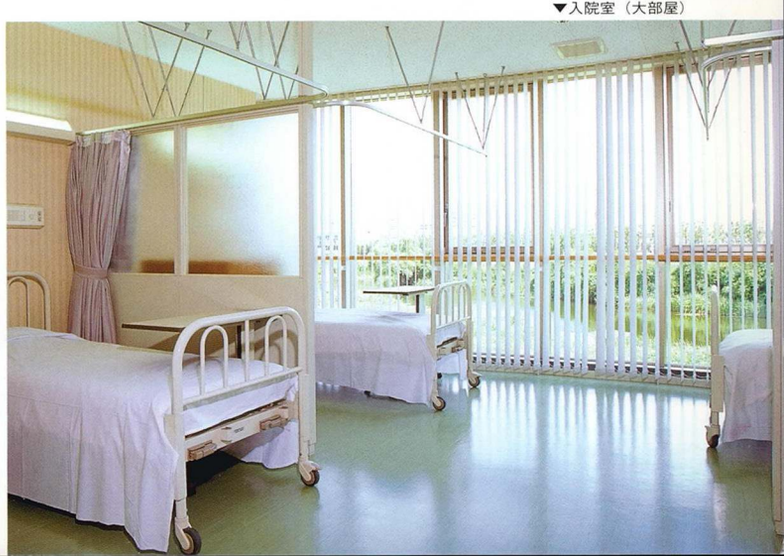


第１透析室
▼ラウンジ



第２透析室
▼入院室（大部屋）







橘公園側　外観



県道側　外観

作品
作風
九州の作品

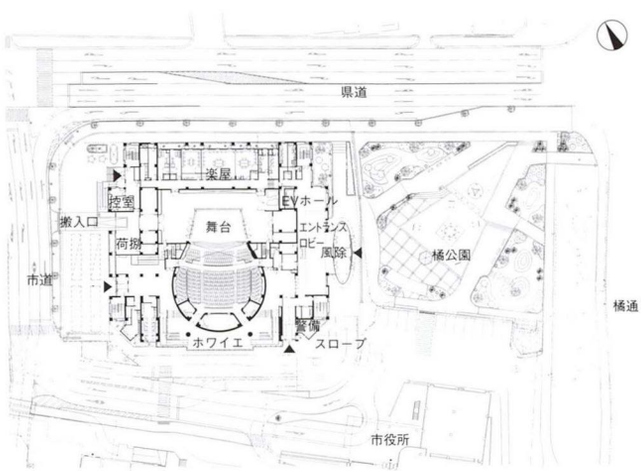
設計監理　宮崎市住宅建築課
　　日建設計・コラム設計JV

施　　工　鴻池組・加賀城建設・三舟建設JV

宮崎市民プラザ

敷地は、宮崎市の玄関口、大淀川橘橋北詰の市役所ブロック内の一角で、橘通りに面した公園を前庭とする恵まれた場所に立地している。当プラザは永年親しまれた旧市民会館の老朽化に伴い、その跡地に建設された市民中心の文化交流福祉活動の拠点施設である。
音楽から演劇まで多機能な500人のホールを中心に、展示ギャラリー・大小会議室・スタジオ・交流サロン・各団体事務室・福祉関連・ボランティア活動等の諸室で構成されている。
ホールはサイド連続の二層バルコニー形式とし、残響時間はコンサート形式で80%着席時1.4秒、演劇講演形式で80%着席時1.1秒、NC値は20以下で、多様な利用目的に応じられる性能と共に、内装は木質系で構成し、暖かく親しみのある空間とした。敷地の制約条件とホールのバリアフリー化を図ることからホールは1階に、展示ギャラリーは綿密な遮音・防振対策の上でホールの直上に配置した。
市内の中心部で周囲への景観が最も重要であることから、ホール舞台周囲の各階に諸室を配置し、壁面による周囲への圧迫感を避けると共に、ガラス窓を主体とした開放された佇まいとしている。
外装は花崗岩張り柱梁フレームと、フレーム組込ガラスブロック、最上階バルコニーの構成により、彫りの深いフレームの力強さと、ガラスの柔らかさを併せ持つ、親しみある外観とした。

（南島文雄／日建設計）

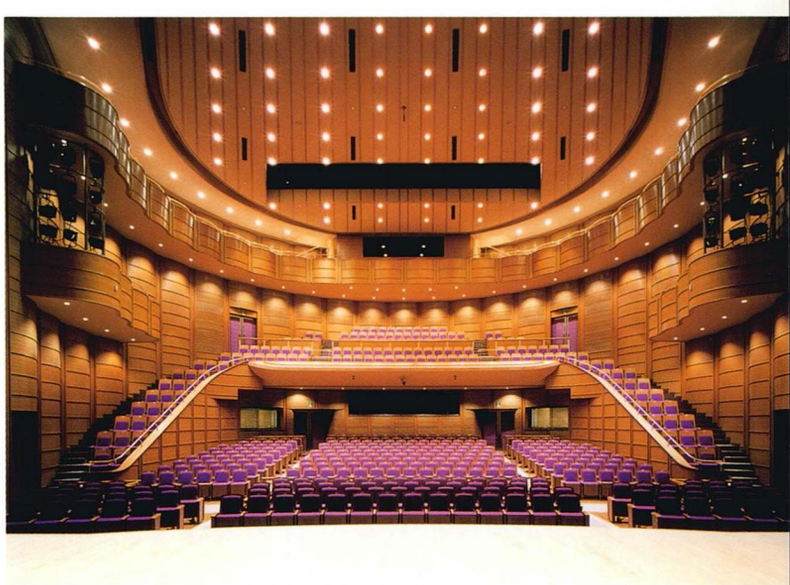


1階平面図：1：2000

所在地　宮崎市橘通西1-1-1
敷地面積　14,223㎡
建築面積　3,189㎡
延床面積　12,467㎡
構造規模　SRC、一部RC、一部S、5F
工　　期　1998年3月～2000年5月
最寄駅　JR日豊本線・宮崎駅
撮　　影　エスエス九州・寺崎健



1Fエントランスロビー



オルブライトホール
▼4Fロビー





正面

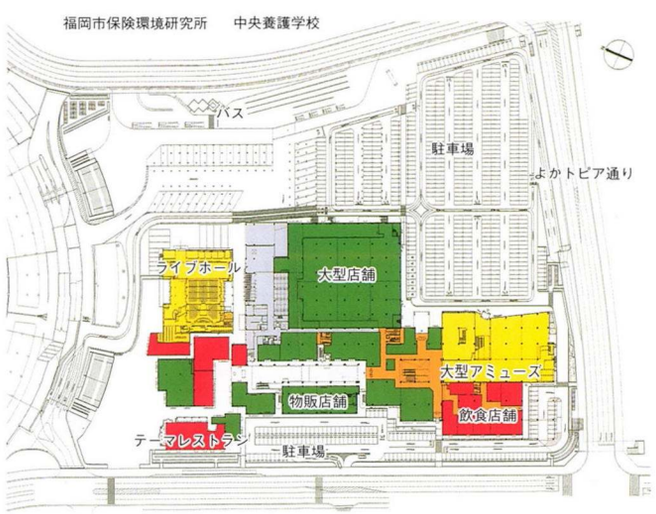


モール昼景

ホークスタウンモール

設計監理　竹中工務店九州支店

施　　工　竹中・前田・イチケン共同企業体



1階平面図：1：4200

「ホークスタウンモール」は先にオープンしていた福岡ドームとシーホークホテル＆リゾートに続きホークスタウンの３番目の施設として福岡市地行浜に建てられた。ここを訪れる利用客へ一層の魅力あるエンターテイメントを提供する複合商業施設を目指している。
外観は様々な色使いと分割されたヨーロッパ風街並みで「変化に富んだ自然発生的なオープンモール」を構成、巨大なドーム球場とホテルへ続く通りを楽しくショッピングができるよう演出している。
施設はそのオープンモールを中心に2001人収容のオールスタンディングライブホール、10スクリーン・2412人収容のシネコン、ボウリング場・バッティングセンターを備えたアミューズメント、その他テーマレストランや大型物販店など計52店舗のテナントが２層に配置されている。
今回の建築デザインでは、テナントの様々な業種とボリュームを内外部で多彩に表現することで、リゾート及びエンターテイメントという「ホークスタウン」の全体イメージの強化に貢献することをねらった。

（中島邦晴／竹中工務店）



シネマロビー



モール

▼モール夜景



所 在 地　福岡市中央区地行浜2-2-1
敷地面積　169,159㎡
建築面積　 19,320㎡
延床面積　 37,500㎡
構造規模　SRC、S、4F
工　　期　1998年12月～2000年４月
最 寄 駅　福岡市地下鉄唐人町駅より徒歩10分
撮　　影　イトープロフォート

正面全景

▼エントランス棟アプローチ

作品
作風
九州の作品

設計監理　鹿児島県土木部建築課
　　東条設計
施　　工　植村・吉満特定建設工事共同企業体

桜島フェリーターミナル新築工事

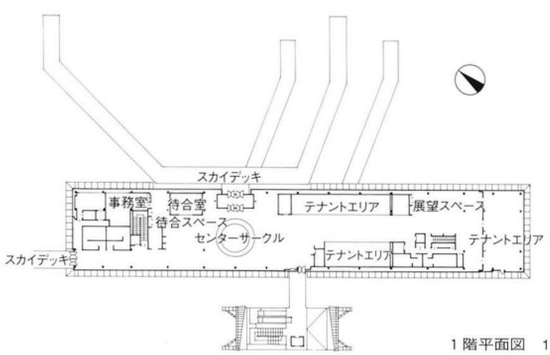
建築の使命は、まず何よりも人間の生活を豊かにすることであり建築はその時代を映す鏡であると同時に未来を展望できる鏡でもある。新桜島フェリーターミナルの設計にあたって留意した点もこの基本認識であった。古くから南方文化圏の出入口として発展してきた鹿児島本港区。江戸時代から永く今日に伝えられる埠頭の石積みの護岸。その眼前には膨大なエネルギーを蓄えたまま天に向かって屹立する桜島。錦江湾の青い空と海。しかも建設地は21世紀に向かうウォーターフロントの最先端地区である。海洋に開かれたかつての薩摩の交流の歴史は今日もなお脈々と受け継がれている。
この歴史と近未来。開発計画と南国の自然ー。これらが相互に緊張し対立しながら、しかも呼応しながら矛盾律のまま統一されていく。施設はそういうアンビヴァレンツな鏡をイメージした。
そのキーワードを３語に集約した。

浮ー未来への発展の象徴を南国らしい力強さ・躍動感をもって表現する。

透ー周辺の環境をおだやかに映し出しながら透かして見せる事で長大なボリュームを持つこの施設の威圧感を軽減する。

重ー営々と築かれた歴史を踏まえ、１階部分の外壁は石目調の仕上げで表現する。

常に開放され、年間を通して不特定多数に使用される施設であるため、その動線は明快を第一義にした。中央部の乗降動線を挟んだ待合所スペース、両サイドに階段やエレベーターを設け、周囲に展望の役割を持たすだけの単純な構成にした。架構は２階のターミナル部分を二つの大きなコアで支える構造とし、約45mあるコア間を斜交格子梁で連結することでその長大なスパンを支持し、施設全体を浮かすことで船への乗降車の動線をスムーズにすると共に浮遊感のある開放的な空間を創出した。　（東條正博／東条設計）



１階平面図　１：1800

所 在 地　鹿児島市本港新町
敷地面積　20,760㎡
建築面積　 2,939㎡
延床面積　 2,949㎡
構造規模　RC（一部S）、2F
工　　期　1996年10月～1997年12月
最 寄 駅　JR鹿児島本線・鹿児島駅
撮　　影　アイオイプロフォート


敷地全景


エントランス棟


ターミナル棟への通路

gallery

マテリアルの可能性

設計

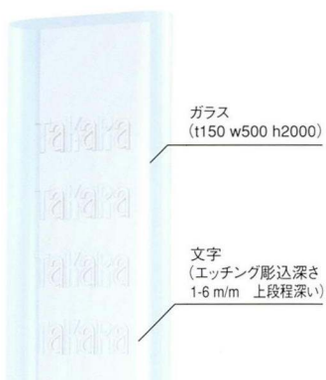
久武正明

コンピューター時代にあっても、建築が変わりえないのは、その「もの」としての側面である。「もの」から発する、その場にたち現れる「気配」は、コンピューターでは再現しにくい。素材の肌触り・香り・響きなどが一体となって、その空間を漂う。この「触感」的なものが、建築のひとつの可能性を示していると思われる。

左の写真は、京都にある酒造メーカーの本社ビルの「サイン」である。お酒の原料である「水」のイメージから、透明素材であるガラスを使用している。15cmの厚みをもつガラスの固まりは、水のボリュームを想起させる。文字はガラスに彫りこまれ、天井からの照明でそのエッジが光る。

右の写真は、西宮にある女子中・高校の教室の出入口の扉である。廊下と教室の間で光のやりとりを可能にするため、アクリル板を吊っている。25mmの板厚の小口をそのまま見せることで、「もの」としての存在感を出すことを意図している。

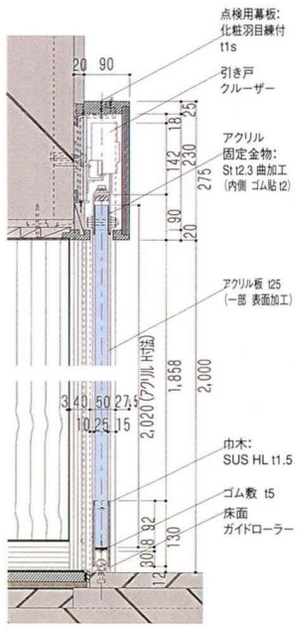




ひさたけまさあき
久武正明
1966　愛知県生まれ
1991　東京大学工学部建築学科卒業
　　(大野秀俊研究室)
1991　竹中工務店設計部
2000　「四条烏丸FTスクエア」
　　京都景観・まちづくり賞［優秀賞］
2000　「武庫川女子大学
　　附属中学校・高等学校セミナー棟」
　　JCDデザイン賞2000［入選］

撮　　影―竹中工務店(左頁)、松村芳治(右頁)
企画編集―淺尾　宏（作品作風小委員会）


S 304


点検用幕板:
化粧羽目縁付
t1s
引き戸
クルーザー
アクリル
固定金物:
St t2.3 曲加工
(内側 ゴム貼 t2)
アクリル板 t25
(一部 表面加工)
巾木:
SUS HL t1.5
ゴム敷 t5
床面
ガイドローラー
20
90
25
18
142
230
275
90
20
1,858
2,000
2,020(アクリル H寸法)
340
50
27.5
10
25
15
30
18
92
130
12



住み続けられた風景（2）

吉田　高子

久しぶりに羽曳野市島泉の重要文化財吉村家住宅を訪れた。車の交通量の多い混雑した道路から少し入ると、江戸時代から続く静かな狭い道に出た。この道に面して今も吉村家の門が開いている。長屋門の屋根は目下茅葺替え工事中であった。足場の上で見る芽葺き作業は、長さ２m・太さ６㎜程の葦を束ねて敷き並べ、屋根下地の竹に縄で結わえ付け、叩きながら形状を整え、重ね葺くもので、誠に手の込んだものである。

江戸時代初期の建築とされる主屋の屋根は既に芽葺き替えを終わり、清々しい佇まいを持っていた。障子紙の張り替え、畳の敷替えと同様、茅や桧皮という植物を屋根葺き材料とし葺き替えを繰り返すことによって、その建築は新しさを取り戻すという日本建築の良さを改めて知る思いがした。

こうして広大な土間を持つ主屋と、数奇屋意匠の溢れた座敷を持つ建物は、昭和28年復原修理されるまで約300年もの間住み続けられてきたのである。現在、住まいは別に移し、主屋・座敷は多様な用途に使われることが多いらしいが、長屋門の葺き替えが終わると、江戸時代河内国の大庄屋であった時のように、豊かな農村集落とその支配の象徴として古道を彩るであろう。

近畿大学理工学部建築学科教授

住民参加からパートナーシップへ

時田　繁

公共の建築が工事着手前に周辺住民に説明会を開催して、やっと建築計画に関する最低限の情報を提供する形態では時代遅れとなり、最近の新聞情報では、設計者と住民が施設の計画段階からワークショップ形式により濃密な対話を交わしながら、まちづくりを考え、プロジェクトの基本計画をまとめていく事例の紹介が目立つようになっている。また、行政の側も情報公開を謳い、市民と連携したまちづくりを推進する立場として、早い段階から情報を提供して、まちづくりや公共建築に住民が参加できるよう積極的に取り組むようになっている。確かに、参加と言う言葉が多く謳われるようになってきたが、参加させてあげているという気持ちが当局側にないか、あるいは最初から落としどころが決められての意見公募ではないかとの意見があるのも事実である。

予算も面積も財政当局のしばりがある中で、全くのアマチュアである一般市民からは多様なニーズが出てくることが想定され、意見を出した側はそれが計画にどれだけ盛り込まれるのかに関心が高いという図式の中で、設計者、使用者、発注機関であるプロと一般市民であるアマが本当にパートナーシップを維持していけるのか、難しい問題であるが、それを解いていくことが求められている。

建設省近畿地方建設局営繕部長

建築家の自邸

黒田　長裕

建築家の自邸というものは、とかく議論にあがることが多い。過去何回も特集号が組まれ、自分もかなりの冊数を所有している。普段の設計で実現できない内容を現実化しようという意欲が前面に出て、斬新で歴史的な名作が多いのも理解できるところである。また、コスト等他の要因との葛藤もあり、雑誌の説明文とともに見るとますます興味が尽きない。各言う自分も建築家の自邸という程大層なものではないが、数年前に土地を購入し設計を開始した訳であるが、以降仕事の関係で土地を離れているので、数年に渡り案を作成したり、模型を制作し続けている次第である。その間子供の成長もあり、自分の考え方の変化もあり、一向に収束する気配も無く、家族から見るとそれを楽しんでいる風もあるそうである。自分の実家は80年以上も前に、ある建築家に依頼して祖父が四国に建てた木造平屋であるが、最近になって祖父と建築家が当時何を考えて設計したかが、特に夏に快適な広い縁側に座って考えていると、しみじみと理解できるようになってきた。その家は、屋根裏の大空間に一部増築可能な設計がなされているが、まだ実現はしていない。自邸についてもいつ実現するものかわからないが、自分の息子が将来、その考えの一端でも理解してもらえることがあればこんなに興味深いことはないと思い、何とか痕跡を残そうと日々手を動かしている次第である。

（株）エヌ・ティ・ティファシリティーズ関西事業本部都市建築設計部長

建物と人間の近似性（2）

曽根　健二

人間と建築物の類似点を探す上で、最も解りやすいのが構造物と骨格と筋肉ではないかと考えられる。最も、私は建築の専門家でも無いし、まして医者でもない、従って、その知識の中身は軽薄であり、想像の域を出ないがその点は先輩諸氏にご容赦を願い、空想の世界として、この話しを続けたいと思う。さて、建築物を地震や、内部の重量から支えている物体は構造体であることは衆知の事実である。この構造体は、通常圧縮力を受け持つ部分と、張力を受け持つ部分に分けられ、圧縮力はコンクリート、張力を受け持つのは鉄筋や鉄骨であると認識していたが、最近では材料や工法の発達が著しく双方の機能を単一の素材で賄う方法もあるやに聞いている。さて、人間では、その機能はどの部分が受け持っているのであろうか？たぶん、それは骨と筋肉ではないかと想像する。圧縮耐力は骨が対応し、張力には筋肉が対応している。圧縮力を受け持つ骨はカルシュウムを主体とした様々な素材から作られており、非常に軽くて丈夫な部材であるが、その中身は固く密度の高い表面部分と、多くの空間とで構成され、力学的にみて最も効率的な構造をしており、現在話題を提供している炭素分子における第３番目の構造体であるサーカーボール構造体に非常に良く似ている。将来、このような構造体や素材が開発されたら、300階建てのビルも建設できるかなと考えたら未来都市もあながち夢では無いような気がする。

㈱きんでん技術本部理事・副本部長

「特集」21世紀の建築設計教育

■建築設計教育はどう変わるか
―マス教育への対応を考える―
……鈴木成文・神戸芸術工科大学学長

■アンケート●大学での取り組みについて
■アンケート●企業アンケートにみる大学の建築設計教育の課題
……鈴木克彦・編集委員

■アンケート●卒業生から大学へのメッセージ

企画：合同分科会

■アンケート依頼先
●卒業生から
大学へのメッセージ

・市嶋　久嗣／大林組
　大阪大学構築工学科卒業
・歌　　一洋／歌一洋建築研究所
　近畿大学建築学科卒業
・岡田　聿之／東畑建築事務所
　大阪市立大学建築学科卒業
・岡本　弘之／安井建築設計事務所
　京都工芸繊維大学造形工学科修了
・柏木　浩一／竹中工務店
　神戸大学建築学科卒業
・川村　眞次／関西都市整備センター
　大阪工業大学建築学科卒業
・遠松　展弘／日建設計
　京都大学建築学科修了
・増地　秀夫／積水ハウス
　大阪芸術大学デザイン学科卒業
・吉羽　裕子／アイ・エフ建築設計研究所
　京都府立大学住居学科卒業

（五十音順・敬称略）

■アンケート依頼先
●企業が求める
大学の建築設計教育

（設計事務所）
・アーバンエース
・浅井謙建築研究所
・市浦都市開発建築コンサルタンツ
・浦辺設計
・エヌ・ティ・ティファシリテイーズ
・小河建築設計事務所
・小西設計
・坂倉建築研究所
・昭和設計
・大建設計
・東畑建築事務所
・徳岡昌克建築設計事務所
・内藤建築事務所
・日建設計
・日本設計
・安井建築設計事務所

（総合建設業）
・大林組
・奥村組
・鹿島
・鴻池組
・清水建設
・錢高組
・大成建設
・竹中工務店
・戸田建設
・藤木工務店
・松村組

（住宅メーカー）
・エス・バイ・エル
・積水化学工業
・積水ハウス
・大和ハウス工業
・ミサワホーム
・三井ホーム

（その他）
・西日本旅客鉄道

（各五十音順・敬称略）

■アンケート依頼先
●大学での取り組み
について

（国立）
・大阪大学工学部
　建築工学科　柏原　士郎
・京都大学工学部
　建築学科　宗本　順三
・京都工芸繊維大学工芸学部
　造形工学科　西村征一郎
・神戸大学工学部
　建設学科（建築系）　狩野　忠正
・奈良女子大学生活環境学部
　人間環境学科
　（住環境学講座）　吉村　篤一
・和歌山大学システム工学部
　環境システム学科　本多　友常

（公立）
・大阪市立大学工学部
　建築学科　杉山　茂一
・京都府立大学人間環境学部
　環境デザイン学科　本多　昭一
・滋賀県立大学環境科学部
　環境計画学科　内井　昭蔵

（私立）
・大阪芸術大学芸術学部
　建築学科　久保　清一
・大阪工業大学工学部
　建築学科　辻　　正矩
・大阪産業大学工学部
　環境デザイン学科　竹嶋　祥夫
・関西大学工学部
　建築学科　荒木兵一郎
・近畿大学理工学部
　建築学科　小島　　孜
・神戸芸術工科大学芸術工学部
　環境デザイン学科　齊木　崇人
・摂南大学工学部
　建築学科　田中　直人

（各五十音順・敬称略）

建築設計教育はどう変わるか

── マス教育への対応を考える ──

鈴木成文

21世紀の建築設計教育の展望が私への原稿要請であった。しかし世紀が変ったからといって社会が急に変るわけではあるまいし、そこに何か区切りがあるわけでもない。事態は連続的である。教育の問題を考えるならば、今日の教育がどういう問題を抱えているか、そしてこれをどう変えて行くべきか、ということに尽きると思う。

建築教育に限らず今日の日本の教育の大きな問題は、その恐るべきマス化と画一化である。個性を無視して一つの型にはめ込もうとする。その端的な顕れが大学入試である。

今日、小学校教育はかなり改革された。いわゆる個性化教育が着実に根を下ろし、これに対応して昔ながらの片廊下型を破る斬新な学校建築も各地に出現している。しかし中学・高校へと進むにつれ次第に受験勉強へと傾いて、大学入試合格のみが目的化する。

受験勉強は一種のゲームである。問題には必ずたった一つの正解があり、それを早く見つけ出すことが受験戦争に勝つことだ、その正解探しが勉学だ、と思い込んでしまう。あたかも住宅地開発で、自然地形を無視して強引にブルドーザーで平坦にならして宅地をつくるのに似ている。これは真の学問からは程遠い。

世の中で遭遇する問題には必ずしも唯一の正解があるわけではなく、解決の方法はいく通りもあり得る。人は、自分で考え、自分の答を見出さなければならない。その解決には、必ず思想や価値観や個性が反映する。デザインも正にそういうものである。「正解は一つ」という思考から学生を早く抜け出させることが肝要である。

□

大学生の学力低下が騒がれている。確かに高校卒の半数もが大学へ進むようになったのだから、従来の意味での大学進学に相応しい学力のある者のみでないことは当然であろう。だが、学力は入試を強化すれば身につくものではあるまい。根本は勉学の悦びと楽しさを身につけ、考える能力を養うことだ。正解探しでなく、自らの思考を育てること、個性を磨くことが大切なのだ。

個性というと、自分勝手に考え好きなことをすることだと誤って考える者もある。とくに小中高校で学級崩壊が騒がれている昨今では、教師の統制的な締めつけに抗して自由に振舞うことにも一理があると考える者も無いわけではない。しかしそれは違う。個性とは世の月並な思考や傾向に対して自らの独自性をはっきり位置づけて主張するものであるべきだ。独自性を磨くためには、社会一般の思考との対置を考えなければなるまい。

私は常々新入生に対して、本を読みなさいと強調している。必ずしも建築専門の本とは限らず、小説でも、歴史でも、科学でも、自分の好きなものを見つけて沢山読むことを勧める。人類の蓄積した文化を少しでも多く身につけることが、建築にとり組む為の基礎になり、この中に自分の個性・独自性を位置づけることができる。これは建築に限らず、およそ文化に携わる者には等しく要求されることであろう。

□

21世紀は、とか、将来は、というとすぐ足元の状況を忘れて遠い先の変化のことだけを論じたがる。確かにその変化は大きい。ざっと挙げてみても、情報化、都市化、国際化、少子化・高齢化、経済動向の変化、行政上の変革等々、数えあげればきりがない。

中でも情報化は、今日変化の渦中にある。CADによる図面のデジタル化のみでなく、3D−CADによって設計の仕方そのものが大きな変化を遂げつつあり、更にはインターネットの活用により情報の多様化と映像化は素晴らしい勢いで進んでいる。その得られる成果が魅力的であるだけに、建築設計が実体から離れてバーチャルの世界の制作へと移行して、建築に何らかの歪みをもたらすのではないかとの憂慮も故なしとしない。

都市化は、今日の日本のみならず低開発諸国をも含めた地球規模の問題である。都市を考えることが建築設計教育の中心課題ともなっているが、その都市そのものが西欧社会とわれわれアジア社会とは大きく異なるのだということが、近年漸く認識されつつある。

国際化は建築士の資格問題として数年前から大いに騒がれ、建築界の主要問題の一つとなっており、教育年限

の問題とからんで建築教育に直接の影響をもつ。とくにアメリカの攻勢はすさまじいが、この問題も、西欧的建築家像を無条件にモデルにして良いかどうかは疑問のあるところである。アジアにはアジア的な建築家像があるだろう。それはこの地帯において、都市・農村をどう組み立てるべきかという理念と深く関わる。都市像・地域像と建築家像とは密接に関係する。

家族形態と家族像の変化、社会経済的な変化、政治・行政上の変化、これらはどれ一つをとっても全て建築設計教育との関わりは深刻である。

だがこれらの変化をただ予測してみても何の足しにもなるまい。むしろ我々が何を望み何を変えて行こうとするか、その意志ないしは計画こそが重要なのである。

□

現代の教育の問題として画一化指向から逃れるべきことを第一に掲げたが、これは言うは易しいが実行にはさまざまな困難がつきまとう。その第一は大量教育への対応である。学生一人ひとりの個性を尊重しその得意とする能力を育てるには、個人個人をよく識って導くことが不可欠である。どうしてもこれは教員と学生の一対一の親密な関係を必要とし、マス教育のシステム化には馴染まない。

今日の建築教育を見るに、この親密な個人指導の実現を妨げているいくつかの状況がある。具体的に挙げれば、学生個人個人に製図台・製図板が与えられない。設計の講評会で全員一人ひとりの講評ができない。全員の卒業論文指導ができない、等々である。

個人専用の製図板が大学のスタジオになければ、設計プロセスを親しく指導することは困難であろうし、学生は自宅やアパートで作業することになってしまう。これが本来の姿でないことは明らかである。近年はCADの活用によってパソコンも設計の必需品になりつつあるが、これをも個人用に備えることは今日の大学ではほとんど不可能に近い。せいぜい身近に置いて共用することになろうが、今後に亙る頭の痛い問題ではある。

作品講評会については、比較的学生数の多くない国立大学でも十分に行っていない例があると聞いて驚いた。講評は単なる採点評価とは異なり、学生が自らの作品を図面や模型だけでなく言葉で表現する機会であると同時に、複数の教員や建築家の異なる意見や主張を聞く機会であり、学生相互に他人の作を見て刺戟し合う場でもある。更には講評会を通じて学生たちの学習の意欲を高め集団的学習の気運を醸成することができる。

一方卒業論文は、教員と学生の一対一の討論の場であり、教員の蓄積や資質を学生に直接に伝える最適の場であり、実験や調査あるいは文章執筆を通じて鍛えあう場でもある。学生数の多さの故にこれが廃止されあるいは卒業設計との択一となっている大学が多いが、建築設計の理念形成の根幹ともいうべき論文の衰退は寂しい。

□

さてこのように教育のマス化に伴う建築設計教育の隘路を述べたが、これを打開する道はあるのだろうか。それには何も特別な妙案があるわけではないが、要は画一的均質教育から脱して、学生個人個人の独自の能力を尊重し、その持てる才能を見出して夫々の方向に伸ばすよう育てることである。その為には教員と学生の親密な関係の指導が不可欠であり、マス大量教育とは正に背反する。

だが考えてみると、今日の日本の大学の建築教育で年間１万人もの建築専門家を育てる必要があるのだろうかという疑問に行きつくだろう。本当に必要なのはせいぜいその半分か、あるいは５分の１かも知れない。そう考えれば、大学の性格によっても異なるだろうが、乱暴な話だが、大量の学生のうちの半分か２割を親しく育てればいいことになる。大学で設計教育を担当した方ならば納得できるだろうが、設計の実習において本当に才能を発揮するのは全学生のうちの１割か２割である。

ではその他の８割の学生にはどう対処するか。それは何も捨ておくというのではない。建築設計教育というのは、設計専門家を育てるだけの機能ではなく、建築全般、都市全般、社会全般を考えるにはまことに相応しい教育である。建築に限らずあらゆるモノつくり、コトつくりの理念と手法を学ぶに最適の場である。

このことを認識するならば、その他の８割も悦んで設計学習に勤しむような雰囲気づくりこそが重要である。よい学習環境、よい集団気分を醸成すれば、建築設計の学習ほど楽しいものはない。しかもそれは単に技術技能の修練にとどまらず、社会と地球と人類文化を考える為の最良の場となるであろう。

建築設計教育の今後のあるべき姿は、マス教育のシステム化を指向するのでなく、むしろ反対に学生個人個人の個性を親しく育てる環境と、そして学生が悦んで設計に勤しむ環境づくりに向かうべきである。

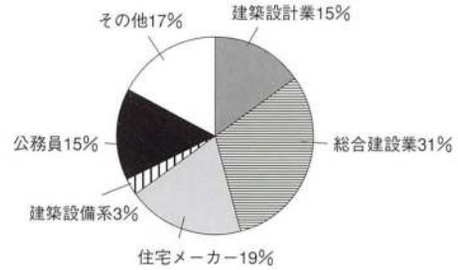
（すずき　しげふみ／神戸芸術工科大学学長）

大阪大学工学部建築工学科

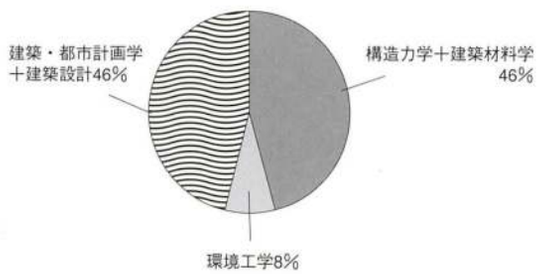
柏原士郎

□学科学生の最近の就職先業種構成

※学部生の大部分（75%）が大学院進学のため、学部生＋大学院生の就職先を掲載



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

自分の考えていることを図面に的確に表現する基礎的技術の養成を、まず設計教育の基本目標と考えています。しかし、ここで最も重要なことは、「自分の考えていること」で、「よい建築とは何か」「どのようにすればよい建築が可能か」といったことを、学生諸君に考えてもらわねばなりません。そのためにも多くの講義科目を設計教育にいかに結び付けるかが大切です。計画系教官と構造系教官や卒業生の協力を得て「建築デザインと構造計画」（朝倉書店）を著し、デザインが建築学を構成する諸分野を総合するものであることを伝えるべく努めています。このことを効果あらしめるためには、課題内容と講評が重要です。課題は具体的な敷地を設定し、周辺環境を含め地域特性を読むことを重視しています。講評は、学生が図面や模型により自分の考えていることを他人に伝える最も良い機会です。口頭によるプレゼンテイションの訓練も兼ね設計教育の重要な場と考えています。デザイン教育では、造形性も当然重要な視点ですが、模型を「鳥瞰的」に見せる魅力と同時に、アイレベルで「虫瞰的」に見、考えることの必要性も伝えたい。設計教育を通して、倫理性も含め、多様な価値観があることを学びとってほしい。意匠設計者（いわゆる建築家）の社会的需要が多くないことを考えると、将来、多様な分野において活躍できる、企画、計画、設計、施工やマネジメントなどに正しい価値観と判断能力を持った人材の養成が必要だと考えます。この他、学部４年および大学院の計画系学生には建築学会の設計競技や様々なコンペに積極的に挑戦することを薦めています。学外の評価を受けることも設計教育の重要な要素と考えています。学部学生が学会コンペに最優秀賞を獲得した実績が後輩の励みにもつながるものと期待しています。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

自ら進んで物事に取り組み、創り出す能力を育成する創成型科目として「建築総合デザイン」を初期教育（２年次前期）に導入しています。週270分のまとまった時間を当て、建築物を設計する際に必要となる基礎知識、コンピュータによる情報処理技術の修得と少人数教育による構造・環境・計画の発想・創造に力点を置いたスタディです。

□最近の建築系学生についての印象

物事の評価をあまりしたくない、あるいは独自の評価基準を持たない傾向があるように思えます。「情報」を得るための雑誌や本は読んでいるようですが、「知識」のための本はあまり読まないようです。しかし、人間は不可解なもの、意外な能力を発揮することもあり、新々人類のこれまでの常識にとらわれない潜在力に期待したいものです。

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

建築界における仕事の内容が設計から発注、施工さらに商取引まで、コンピュータを媒介としてますますバーチャル化し、建築技術者は、細分化された仕事を分担せざるをえない傾向にあります。このような状況では、学生時代こそ、「建築とは何か」といった根源的な問いを考え、自らの眼で見、自らの手で描き、物を造る機会を数多く持つべきです。身体感覚を通して建築を総合的に把握する能力の育成に建築教育の重点を置くべきです。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

大学の基本的な役割は真理の追究です。建築界の発展に寄与すべきことは当然ですが、何が正しいか、何が間違っているかを考える中立的な立場にあります。要は、社会に対して大学は、アクセル機能と同時にチェック機能、ブレーキ機能も持つべきだということです。



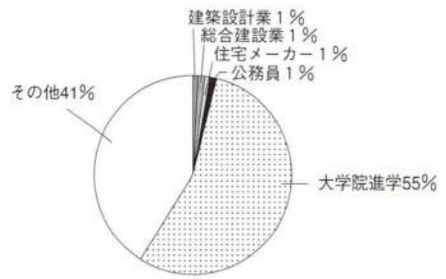
大阪大学工学部キャンパス風景

（かしはら　しろう／大阪大学教授）

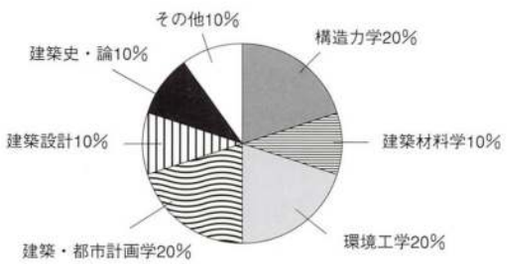
京都大学工学部建築学科

宗本順三

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

専門科目で学習した知識や技術を総合化する方法の演習として設計教育を位置付けている。つまり、計画系科目、構造系科目、環境系科目で学習した知識を人間生活の場としての空間に総合化する教育を行うところに特徴がある。そのために、建築学で学ぶ知識を創造的に総合化できる能力を育成することを教育目標としている。したがって、設計教育には関連する全教官が参加して各教官がそれぞれの専門的立場から指導し、学生には基礎的な空間構成能力を育成する設計課題から複合的な都市の建築まで様々な課題を履修させるようにしている。さらに、最終学年でゼミ以外に半期にわたって特定の教官の元で専門的な課題を学ぶスタジオコース（選択）も設けている。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

・大学院の重点化を行って、新しい分野に対応するために建築情報システム学講座、人間生活環境工学講座を新設し、新たに教官配置を行った。さらに防災研究所の建築関連分野と連携して、協力講座として大学院での教育を強化した。
・入学試験において多様選抜方式を採用し、面接、実技等を行った。
・一回生からの少人数教育（ミニゼミ）を取り入れた。

□最近の建築系学生についての印象

数学、物理等の基礎学力の低下が見られる一方で、視覚的な表現力等は向上している。情報を処理し扱う技術や方法は巧くなっているが、情報に依存する度合いが高く、自己のオリジナリティを出す能力が全体的に落ちてきている。学年が進行するに従って、国語能力が思考や論理力に影響するが、これらの能力も全体的に低下傾向が見られ、空間や建築デザインの思考に粘りが無くなってきているような印象である。

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

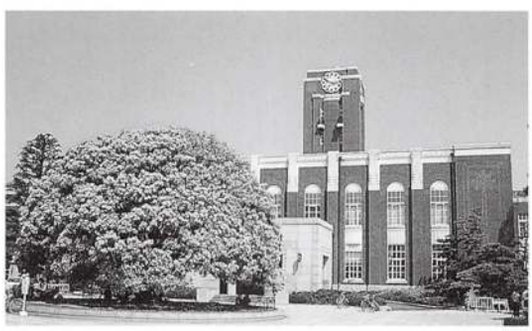
従来日本の大学の建築教育は基礎的な知識に重点が置かれて、卒業時点では実務に役立つレベルにまで知識や技能が殆ど達していない。これらに対して企業や設計事務所などの建築産業が数年間の期間をかけて実践的かつ実体的な実務教育を受け持ってきた。しかし、近年、建設産業の学生を採用し教育する余力は一部の住宅産業を除いて急激に減少してきており、採用人数の急激な減少と採用後の実践教育の場が急激に無くなってきている。その結果、建築分野の後継者の育成、つまり建築を支える技術者やデザイナーの育成に大きな余白が生じようとしている。さらに近い将来、現役の技術者の高齢化により、建築産業の人的衰退化が急激に進むものとみられる。

今後の大学の対応としては、国際化に備えた技術者育成の国際的な認証に対応するカリキュラムの構築に加え、大学と社会の間で技術者を育成する役割分担の新たな枠組みの構築が必要である。さらに既に社会である程度実務を経験した人材のより高度な研究欲求への対応や再教育に対する開かれた大学の仕組みの構築も必要である。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

建築学は建物を造ることを通して、人間生活の様々な分野に貢献してきている。その及ぶ範囲は、単に建築を造るだけでなく構築環境全体にかかわってきており、人間生活環境の安全性や快適性、さらに地球規模の環境負荷の軽減等果たすべき役割は多大である。大学はこれらの分野に貢献できる人材を教育して社会に送りだすとともに、研究分野において指導的役割や社会の利害対立における中立的役割など、社会で大学が貢献すべき課題は多大である。これらの課題に充分に大学が対応出来るためには、大学自身が社会とともに新たな知を構築し発信できることが必要である。

（むねもと　じゅんぞう／京都大学教授）

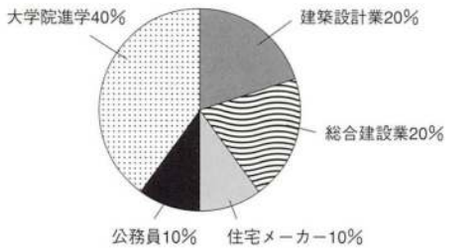


京都大学本館

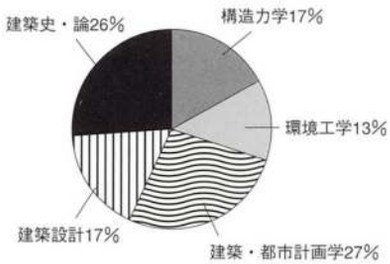
京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科

西村征一郎

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

京都工芸繊維大学の建築コースでは、従来の伝統的な教育方法の踏襲の意義を確認し、さらなる発展の可能性を模索している。伝統的な建築設計実習に関連する特徴は、入学試験に「図面」を課し、1回生から「基礎実習」を取り入れており、現在も継承している。

その課題内容は、絵画や立体、グラフィック等に加え、建築基礎として「模写（実際に観察できる建物対象）」、「スケッチ（京都市内の歴史的建造物や近・現代建築で自分が感動するもの対象）」、「簡単な空間設計（例えば“自分の巣”）」等である。さらに2回生以降、年間約6課題が、それぞれのテーマをもち、出題される。実習の基本体制は、10人以下の少人数のゼミ方式を採り、個人の自由な発想と専門領域の異なる教官を含む他者の評価の相剋に期待する。表現・伝達の方法は、基本的に身体で設計を会得する意味で、できるだけ多くのスケッチ、図面を画き、模型を造ることにある。とりわけ、学生個人にとって“魅力がある”と感じる対象を「スケッチ」によって写しとる行為は、建築の発想を逆方向から辿り、体で理解する方法であると確信している。同様に、「模写」によって図面から設計意図を読み取ることが可能だと考えている。これは電子機器によるコピー文化の時代であるからこそ、写経のように、一字一字、祈りを込めて写しとる行為に例えられるような意義があるとも言えよう。

一方、1899年学科開設以来、武田五一の建築教育思想がめんめんと継承されてきた。それは、1926年“建築家になるなら哲学を”の教えのもと京都高等工芸学校（京都工芸繊維大学の前身）を卒業、ドイツ哲学を学んだ後、建築家として大成した白井晟一を引き合いに出すまでもなく、建築教育は、単なる建築技術や知識の学習にあるのではない。それは「知」に裏づけられた「感性」、「人間性」や「美」の習得に黙々とひたすら努力する“執念”の態度を学んでいくことではないか。この「知」と「情」の融合を目指す態度こそ、国際性と地域性、公共と個人等々の諸問題をかかえる21世紀の世界が求める建築設計教育の基本理念のベースに欠かすことができないと思われる。

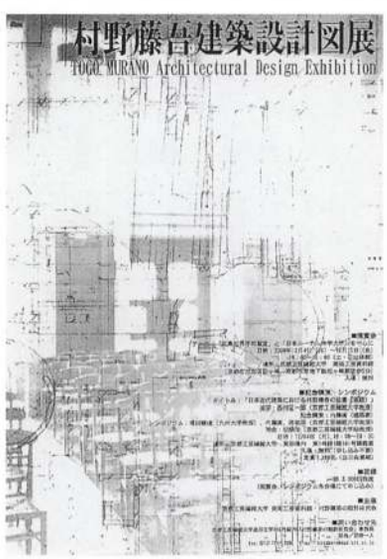
□新しい大学教育への学科としての取り組み

さらに、今後、地球上に生存する生命系全体に視点をおき、その大きな時間的、空間的流れの中で、それらが共生してきた背景となる各種の環境情報の変遷を解析し、人間のコミュニティのあり方にも及ぶエコロジカルな環境システムの持続を目標とする建築（環境）設計教育が望まれる。特に、我が国をはじめ、発展途上のアジアの国々の都市環境の著しい欧米化は、地域の人々の文化的アイデンティティの欠落を招きかねず、地域環境や建築倫理等の関心の欠如にもつながりかねない。以上から、京都という個性に満ち、自然や生命と共に諸々の分野と協調できる、地域に特化した教育を目指し、京都の先達が築きあげた歴史的環境の再認識からサステナブルな新たな建築設計教育を構築していきたい。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

従来、都市・建築・住居等、社会資本とされる構造物は、工学の対象分野にあり、地球環境や生態学的視点を含んだ教育には到っていない。しかし、環境問題についてのグローバルな認識は、今や建築界はもとより、いかなる分野に拘わらず不可欠である。そこで、特に大学院課程では、社会で活躍中の建築系の人々に対し、「継続教育」の一環として、風土が培った地域の理解と共に、生命環境の保全、維持を目標にサステナブルでユニバーサルな視点を持つ建築設計教育を展開していきたい。

（にしむら　せいいちろう／京都工芸繊維大学教授）

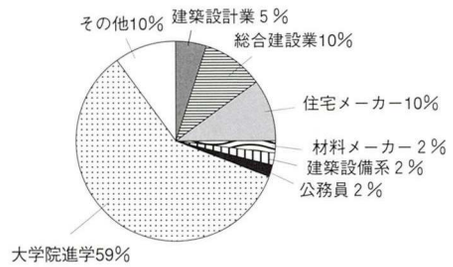


京都工芸繊維大学で開催された村野藤吾建築設計図展のポスター

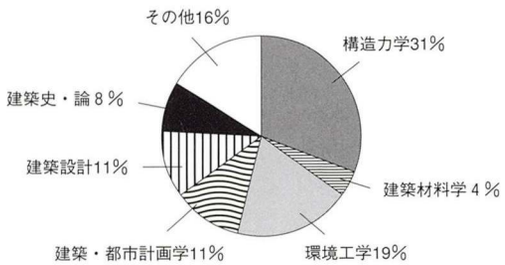
神戸大学工学部建設学科（建築系）

狩野忠正

□学科（建築系）学生の最近の就職先業種構成



□学科（建築系教室）に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科（建築系教室）の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

教育目標の基本は大学のカラーを鮮明に打ち出そうとするものである。目標は次の３つを考えている。

①国際競争力をつけること、これは神戸が国際都市として成立した歴史を受けつぐものである。②環境を考慮した先端技術の習得。地球環境問題への解決方法を考えることにある。③歴史、哲学、倫理を備えた人間形成。特に震災経験による思考と行動は力強く作用すると思われる。

それぞれの目標に対する方針は次の通りである。

①設計競技、論文発表の機会を多く設け、外部への目を開くこと。②研究プロジェクトへの積極的な取り組み。社会的ニーズへの理解を高める。③震災をテーマとする課題への対応を行うこと。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

1997年より「建築系教室を考える会」を開催し、大学の研究、教育のあるべき姿を検討してきた。さらに2000年、文部省、諮問機関より出された「提言、これからの国立大学の在り方」をふまえて、検討を進めてきた。建築設計教育は、この中で重要な位置をしめるものである。これに対する考え方は二つある。第一は、一年次から10人程度の少人数で特別演習を行おうとするものである。一年は大人数での概論授業が多く、教官と学生のコミュニケーションが希薄となり、ややもすれば建築への興味が失われがちである。特別演習は、担当教官の専門領域を通じて、学生に対し建築への興味を早期にもたせることを目的とするものである。第二は外部講師による設計指導、オープンジュリーをさらに活発に行おうとするものである。外部からの思想や刺激を大学内へ導入することにより、問題意識を抱かせ、設計力を高める。

□最近の建築系学生についての印象

学生の思考と行動は、単純明快である。社会でいわれているほど悲観はしていない。結構社会を見ているのが現代の学生である。時代が学生の性格をつくりだしているのだ。特にコンピューターを道具とした対応力は、敏捷そのものである。心配があるとすればコンピューターが持つ、ブラックボックスの領域についてである。ここには、善悪両方の作用があるからである。

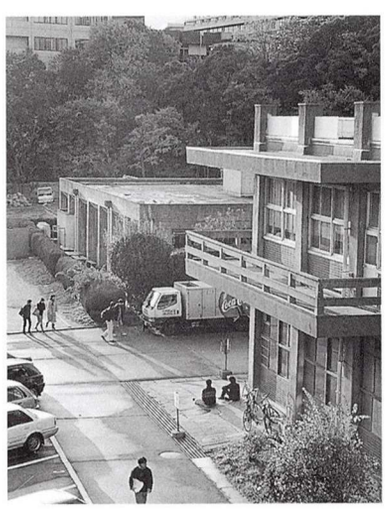
□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

国際的に通用する文化的素養をそなえた人材育成と設計環境の整備である。

そのためにまず、我が国の文化を知ることである。そして、交換留学により、外部の文化を知ることにある。日本と外国の文化の差異の理解して確かな建築への対応ができるのである。次に考えられることは、設計教育環境を変革する必要がある。コンピューターを設置し、資料室を併設した少人数グループで使用できる、スタジオ形式の導入ということになる。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

二つの方向を考えたい。一つは、基礎研究である。企業ではできない部分を研究することにある。大学の本来の役目はそこにある。そのためには大学が保有してきた技術力を高めることにある。そして時代が要求する先端技術の研究ということになる。それは、環境、エネルギー、構法、素材などの研究にする。二つ目は、異分野交流によるプロジェクトの創出である。この点を強力に作用させるためには、開かれた大学にする必要がある。外部から人材を招き入れ共同研究を行うことにある。異質なものと異質なものがぶつかりあって、次世代の建築が生みだされる。そこに今までの建築にない「建築」が創造されているのである。「建築」とは、大自然にふさわしい建築を、大自然に返す行為に他ならないからである。



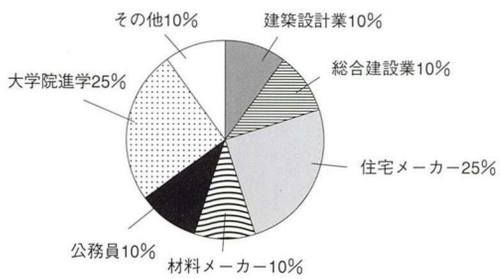
神戸大学工学部キャンパス

（かのう　ただまさ／神戸大学教授）

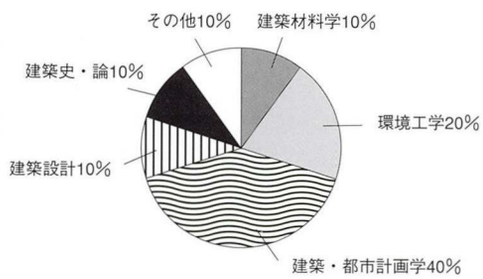
奈良女子大学生活環境学部人間環境学科(住環境学講座)

吉村篤一

□学科（住環境学講座）学生の最近の就職先業種構成



□学科（住環境学講座）に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

本学は住環境学講座という名称の特徴を生かす意味もあり、住宅及び居住関連施設、街路・公園などの屋外生活施設、保育所・商店などの近隣生活施設、その他自然環境で構成される住環境と人間生活との相互関係を究めるとともに、時代の要請をくみ取りながら、広範な住生活ニーズを充足する、よりよい住環境の構想・計画・管理・改善のあり方を追究・実践している。そして、住宅産業、建設業、設計事務所などの企画・設計・研究開発部門、及び中等教育における生活教育部門、国・自治体の住環境行政、建築行政、あるいは福祉行政部門、公的事業・民間企業などの都市整備関連部門や住環境管理部門、また大学・短大・その他の研究機関など多様な分野で活躍できるような人材養成を目標としている。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

本講座では幅広い教養と専門的知識・技術の習得により、より良い住環境を計画・創造できるよう、以下のような取り組みを行っている。

①在来生合宿研修を実施し、建築の見学及び設計者を招いての講演会や討論会を通して建築空間の体験をしたり、設計の趣旨などを学べるようにしている。

②FD活動の一環として、配付資料の工夫、提示資料の工夫（ビデオ、スライド、OHPなどの視聴覚教材等）、住宅の見学など、種々の取組みを行っている。

③設計演習では一つの課題を複数の教官で担当し、異なった視点からの考察ができるようにしている。

④学生の募集に関して、多様な学生が入学できるよう、編入生、転学科・転専攻生、帰国子女、社会人、研究生、科目等履修生などの学生を受け入れている。

⑤シラバスの活用により、学生に対して授業全体の見通しと自習のための情報が得られるようにしている。

□最近の建築系学生についての印象

本学についていえば、上記のような学科（講座）の特徴があるからかもしれないが、図面を描いたりスケッチをしたりするのが好きでたまらないといった学生が少ない。どちらかといえば淡泊で冷静であり、熱烈な建築ファン、あるいはクリエイティブな思考を得意とする学生が少ない。

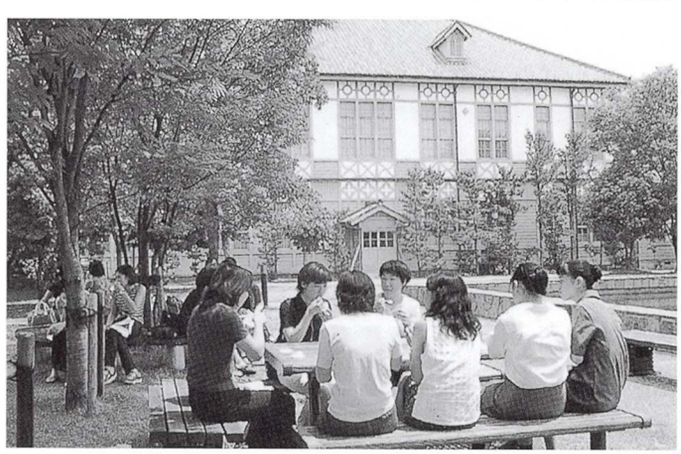
□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

実務教育やCAD・CGなどの教育は、時代の要請もあり最低限必要ではあるが、本質的な問題ではない。私たちを取り巻く社会環境がいかに変わろうとも、建築空間や住環境の本質は何なのか認識できるよう、またすぐに役立つ技術の修得もさることながら、人間が生活するための空間や環境等の原点を見据えた教育を行うことが大切であると考えている。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

社会は今後、少子高齢化、高度情報化、男女の共同参画、家族形態の多様化、地域社会の変化が一層進展するとともに、地球環境保護意識の高揚に伴って、人々の生活が大きく変化していくと思われる。それによって生じる新たな住生活ニーズや社会が求める人材の動向を的確に把握し、それに対応した教育・研究を推進して、社会の要請に応えるとともに、それぞれの専門分野でその本質を見極めたうえで、リード役になれるような人材を養成すること。

（よしむら　とくいち／奈良女子大学教授）

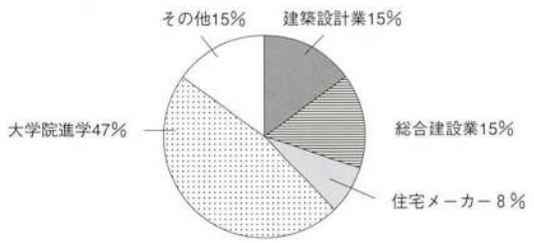


奈良女子大学キャンパス風景

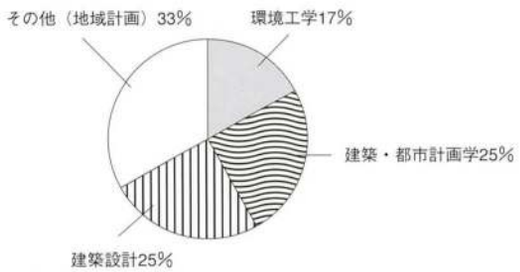
和歌山大学システム工学部環境システム学科

本多友常

□学科（設計ゼミ）学生の最近の就職先業種構成



□学科（環境計画系）に所属する常勤教官（助手以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

学部レベルでは、1～2年で緑・水・空間等の環境要素を個別に学習し、3年以上でそれらを統合・総合化する技術を習得する。したがって、1～2年生は実験・実習が、3～4年生では演習を重視している。演習等には共同作業を組み込み、グループの合意形成過程を重視している。

建築教育においては、建築の専門家としての養成だけにこだわることなく、建築の理解を一般人として深めることにも重点をおいている。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

地域環境を主対象とし、環境を総合的に把握した上で、問題抽出－課題設定－課題解決のためのソフト・ハード・システム設計－評価という問題解決のための全分野をマネジメントできる人材を養成するため、広範囲の環境に関する授業内容を設けている。

学生の自主性や創造性を喚起する為、学生の自発による知的、創造的、システム思考的な活動や努力を評価することを目的として、自主演習を単位認定している。これはどのような課題であっても、指導教員が認定することにより実現可能であり、学外活動などを積極的に行うことができるようにしている。

大学院修士課程においては、分野横断的・複合領域における教育研究の目標に向けて、システム工学専攻という単一専攻に統合しており、新しい技術や視点を求める社会環境の早い変化にも即応できる遊撃的な研究教育体制を敷いている。

□最近の建築系学生についての印象

各課題への取り組みにはそれぞれの個性に合わせた努力を払っており、適度な社会性を保ちつつ能力を伸ばしている。将来の就職の不透明さが重くのしかかっており、漠然とした不安や悩みを抱えざるをえない状況におかれてはいるが、写真のような作品活動を積極的に行う学生もおり、たのもしさも併せ持っている。

一方、設計あるいは建築に対するこだわりを非常識なほど熱狂的にもつ学生が少なくなっている。また各人が定まった目標をもつことが難しくなっており、主張をぶつけ合う議論が、ほとんど見られない。

□建築教育を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

性急な技術者育成をめざすことよりは、広い視野と、見識をもたせることが重要であり、将来的には4年間教育にインターンシップ、あるいは大学院教育も含めて、巾広い教育環境を整えていく必要がある。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

産官学が共に一体となって活動出来るよう、大学側が中心的役割を果せるよう努力していかなくてはならない。

特に大学が民間から学ぶべきことも多く、風通しの良い相互交流を事あるごとに目指す必要がある。また企業活動とは異なる視点からの大学側からの働きかけも忘れてはならない。

（ほんだ　ともつね／和歌山大学教授）

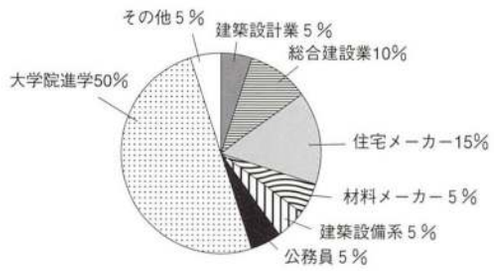


紀州材を使った作品

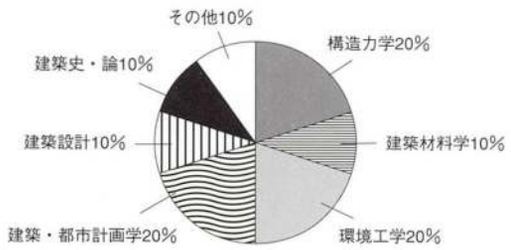
大阪市立大学工学部建築学科

杉山茂一

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

本学科は、総合大学における建築教育を特徴として、基礎力と創造力を養う４年一貫の教育課程を編成し、多方面の分野で活躍する人材育成を目指している。そのなかで、建築設計演習は建築学のコア科目として位置づけている。建築設計演習では従来、各種ビルディング・タイプの設計課題を課して、思考の幅を拡げ、一通りの設計技術を習得する訓練をしてきた。

しかし近年は、掘り下げる思考の訓練を重視して、例えば、コンテクストの豊富な敷地を与えて設計内容は自由とするというように、テーマ性に重きを置いた設計課題に移行しつつある。また、時代の動きに照らして、既存建物の改築による再利用なども設計課題に組み入れている。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

１学年30人の少人数教育を特徴とする本学科では、他学科にみられるようなコース制による専門教育は採らず、建築総合教育を実践している。専門分化が進む社会環境にあっても、いやそれだからこそ、この教育理念は踏襲すべきものと考えている。教育課程においては、平成11年度に環境都市工学科が新設されたのを機に、建築、環境都市、土木の３学科で連環カリキュラムを編成して、教育内容の幅を拡げている。平成14年度には大学院の再編を予定しており、これを機に６年一貫を基本とした教育課程編成への移行を検討している。そのなかで、計画系の分野では、大学院教育のなかに積極的に設計教育を盛り込むことを検討中である。

□最近の建築系学生についての印象

社会性とコミュニケーション能力の低下。建築界にどのような業種、職種があるのかを高学年になっても把握しておらず、自分で適切な判断を下せないままに就職活動に手間取るケースが多い。就職活動も教育の一環と割り切ってアドバイスしても、これを聴けない学生も少なくない。こういう状況のなかで近年は、設計演習におけるエスキスや講評会がコミュニケーション能力を養う訓練として大変重要になっているように思われる。実際に、エスキスでの応答がしっかりしている学生は、設計の巧い下手とは関係なく、就職もすんなり決まるケースが多い。

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

本学科は、建築構造学、建築防災、建築環境工学、建築計画、建築デザインの５分野で構成され、環境都市工学科の都市計画、地域環境計画分野とも連携しながら教育研究を遂行している。こぢんまりした世帯だが、相互にコミュニケーションがとりやすいというよさもある。５分野で社会環境の変化に対応する諸課題に対応するのは困難であるが、だからといって新しい分野をつくればよいというものではない。相互に連携をとり、それぞれの専門領域を社会の動きにあわせてシフトしつつ、全体のまとまりと方向性を模索していくのが妥当と考える。本学科の方向性にかかわるキーワードは、環境都市工学科との連携によるサステイナブル・デザインと考えている。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

社会が成熟した今日では、大学が委託研究を受けたり、実際のプロジェクトをまとめたりする機会は減っているが、別のかたちで実社会との接点をもつようにしないと、大学は閉塞化してしまう。様々なかたちで、とくに大学院レベルでの実社会との交流を増やしていきたい。近年、本建築学専攻に社会人ドクターが数人在籍しているが、教員や学生によい刺激になっている。社会人ドクターの受け入れについてはまだ不備な点が多く、個人の意欲に頼っているのが現状である。体制を整え、更に大学の魅力を増すべく努力していきたい。

（すぎやま　しげかず／大阪市立大学教授）

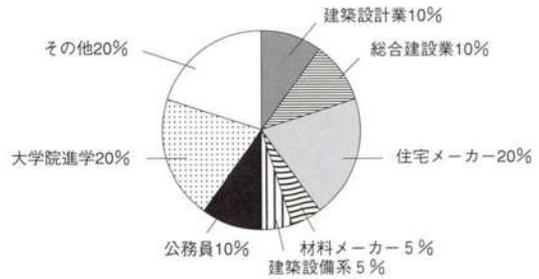


大阪市立大学での教育風景

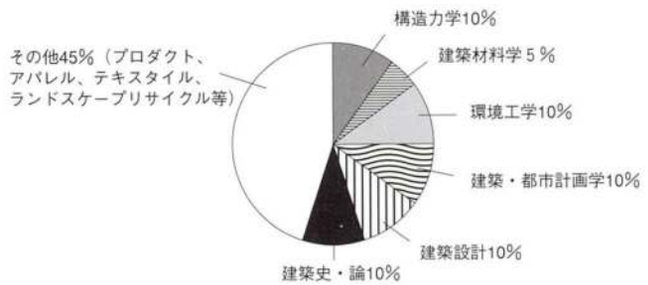
京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科

本多昭一

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

本学科（環境デザイン学科）は、生活環境のあり方や、人と環境にやさしいライフスタイル・生産システムのあり方が鋭く問われている今日、この課題に対応して、生活空間の視点に立った住環境の科学と生活の質の向上をめざすデザイン学にもとづく教育研究を行うことを目標としている。具体的には、都市（地域）・建築・インテリア・生活用品・衣服など様々な領域での問題点を発見し、その解決方法をデザインする能力の教育である。したがって学科としては建築に特化していないが、質問に対応して建築に絞って言えば、課題の条件に対応してデザインする能力とともに現実の中から課題を発見・把握する能力を育てたいと考えている。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

少人数、演習（対話）型教育を重視している。定員自体が少ない（住環境学専攻25人、生活デザイン専攻15人）が、１回生の授業の１部はさらに分割して５～６人ごとに行っている。設計（デザイン）演習は１回生は合同で、２・３回生では専攻別に行っている。４回生はゼミに配属するが、１研究室最大３人としてマン・ツー・マン教育を徹底する。

□最近の建築系学生についての印象

現実の社会的問題（たとえば震災復興、ホームレス問題など）に関心を向けさせると、半数以上が真面目に考える点は真面目であるが、行動には慎重あるいは臆病である。与えられた課題をこなすだけでなく、自ら課題を発見するように指導しても、やはり受動型である。そのくせ課題が複雑になると途中で放棄する学生がかなりいる。（３回生の演習を選択にしたので「放棄」も可能なので）

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

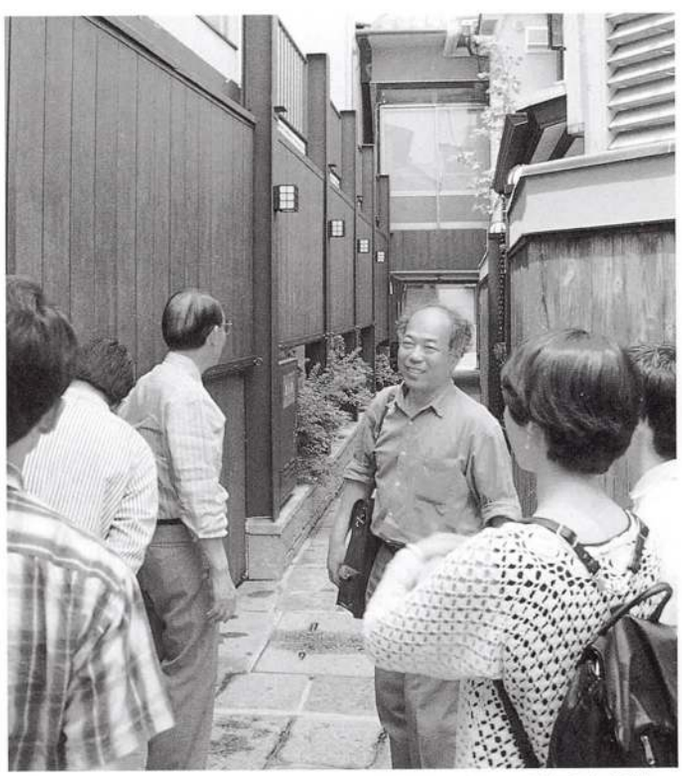
〔女子学生の就職問題〕

本学科は既に女子の方が多数であり、就職問題も深刻である。先に書いたように本学科は建築も含みながら、より広い分野の設計（デザイン）ができる専門家を養成することを目指している。従来の就職先である設計事務所・建築会社・住宅企業・建築関係公務員等の他、より広い分野で設計能力を発揮できるよう職域、職場を研究・開発したいと考えている。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

今後、建築計画・設計は「使い手参加」で行うことが常識になる。その基本的思想と同時に実践方法（の初歩）を大学で教育・研究することが重要である。また、とくに環境問題・まちづくり関係では、課題が与えられてから取り組むのでなく、現実の中から問題を発見し、具体的課題に顕在化するような能力も必要になるので、それに対応する教育・研究が重要であると考える。この点に関しては、「学生にその能力をつけさせる」だけでなく、大学（建築系学科）が日常的に、その地域の（都市的・建築的）課題発見に努める必要もある。

（ほんだ　しょういち／京都府立大学教授）

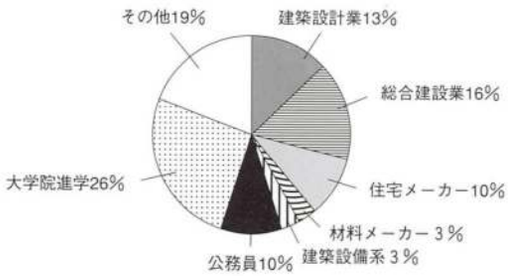


少人数なので街の見学や町家に伺っての授業がしやすい。（京都府立大学）

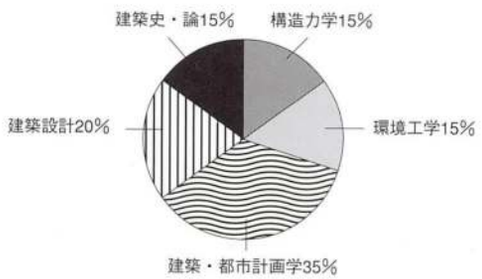
滋賀県立大学環境科学部環境計画学科

内井昭蔵

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

建築工学的視点のみに止まらず広く人間生活及び環境的視点から総合的研究し、生活空間を創造できる人間を育成していくことを考えています。研究に焦点が置かれるのは当然ですが、建築「学」ではなく建築といった総体、実学としての建築研究を目指しています。

私たちの目標は有能な職能人を世に送り出すことであります。特に重要な職能教育及び職能倫理について効果ある教育方法について検討している最中であります。学部共通にフィールドワークを課しています。これは大学周辺地域へ学生を連れだし、現況把握、問題分析、総合提案といった作業を教員と一体となり取り組んでいます。また、設計演習はスタジオ形式実現に向け努力中であります。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

新しい大学教育に対応するため、学部学科間の枠組みをできるだけ解消し、学際的効果を上げたいと考えていますが、効果が上がっているとは思いません。建築コースは環境計画学科に所属していますが、社会計画コースと一つの学科を形成しています。ハードとソフトといった感じですが、それぞれの専門性が優先しがちで共通の作業や教育目標が立てにくいという面もあります。教員相互の協調性が求められると考えています。

また、建築の場合は社会、企業との結びつきが重要ですが、地理的な面からも、また、歴史の浅いというハンディキャップはあると思います。

□最近の建築系学生についての印象

最近の建築学生といっても他の学生と共通すると思いますが、素直でよく勉強するのですが、建築を学ぶものにとって一番大切な好奇心とか想像力の豊かさとか強烈な個性といったものを感じられる人が少なくなっているように思われます。しかし、中にはわずかですが優れた資質をもった人もいるといえます。私達の学生時代を振り返ってみても同様だったのではないかと感じています。

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

〔実務教育に対する考え方〕

実学としても建築を教育するには実務教育が欠かせません。教員の経験不足が問題です。大学という枠内だけで生活してきた教員はどうしても理論や分析力には丈けていますが、建築の動き、時代の流れについていけません。学生には最先端の情報、知識、能力を教育することが大学の務めであると考えます。時代の先端を行く気構えが教員の中になければ学生はついてこないでしょう。アメリカの大学のように企業を引っ張る力が必要と考えます。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

大学はこれまで眠っていたと思います。建築界が現在低調で将来性がないように思われていますが、そんなことはない。あまりにこれまで経済優先しすぎていて、建築本来の使命を忘れてしまったと思います。大学は社会や企業をリードしていく立場になくてはならないのに超然としつづけていました。あまりに時代の変革に対し無頓着すぎたのではないでしょうか。大学に課せられている制度仕組みの保守性は目を覆うばかりです。教育は特殊な聖域ではないはずです。もっと枠をはずし、自由に活動すべきでしょう。大学が社会に対する役割は教育をもっと解放することであり、社会のニーズに応えることでしょう。リーダーシップを取り戻すためには、本当に役立つ教育をすべきではないでしょうか。

（うちい　しょうぞう／滋賀県立大学教授）

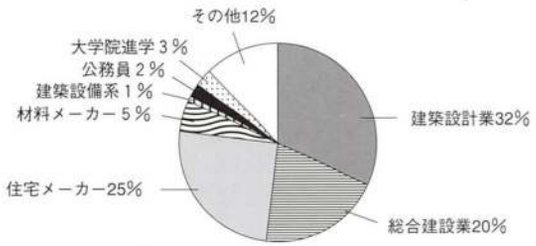


滋賀県立大学でのフィールドワーク

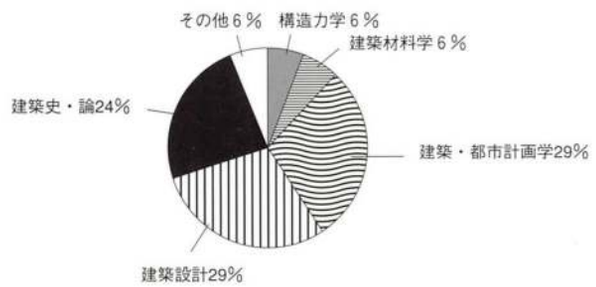
大阪芸術大学芸術学部建築学科

久保清一

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

狭い意味での専門技術者でなく、建築全体を視野におさめた「建築家」の育成を第一の教育目標としている。それには、既成の枠組みにとらわれず常に人間存在の基本問題に立脚した学習が必要となる。芸大建築学科では、他の芸術系13学科と連携しながら、あらゆる角度から人間の営みと空間の関係を探求するための多様なプログラムが用意されている。特に設計実習では、構造や技術、理論に加えて、コンセプトと建築的提案についてエスキースチェックを何度も繰り返しながら建築を立ち上げていく。そういった「考えること」を基本とした指導方針は、卒業生像を必ずしも設計者のみに限定せず、あらゆる建築シーンにおける幅広い分野の人材育成につながると確信している。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

従来よくあるような教育に閉じこもった授業では、新しい設計教育は困難である。社会に開かれたリアリティのある活動を通して建築を体験することが重要と考えている。例えば展覧会活動もその特徴の1つである。毎年開かれるSDレビュー大阪展、三大学合同建築展、建築学科展をはじめ、昨年は学生の協力のもと、ギャラ間展が芸大情報センターで開かれた。

また、年間4回にわたって建築家や評論家を招いて開かれる実習作品の合評会、公開設計競技への参加、更には卒業設計オープンジュリーなどがプログラムとして動いており、刺激的な授業が展開されている。

□最近の建築系学生についての印象

数年前までは建築学生と言えば、何か共通の「翳り」のようなもの、或いはまじめさかもしれないそんな雰囲気があったが、だいぶ変わったように思う。身なりはきれいだし、少し子供っぽいようにも感じる。それは決して悪いとは思わない。作品についても、シャープで美しいものを好み、CAD図面も上達している。しかし内容は空虚な作品が目につく。社会的提案が少ないわけではないが、建築的なツメが甘く、構築性に乏しい。物事に対して正面から取り組むことや、自分の意志を表現することがどうも苦手なようだ。

□建築環境教育を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

今、日本の大学における建築設計教育は、大きな転換の局面を迎えている。それは建築分野に限らず教育制度そのものが危機的状況にあるという日本の特殊事情と、建築設計者の社会的役割を規定する職能と倫理について建築資格制度に関連した諸問題、この二つの制度問題（旧文部省、旧建設省管轄）が複雑に絡み合い設計教育の現場に大きなひずみをもたらしている。ここでは実務教育について触れるが、日本の大学ではUIA/UNESCO建築教育チャーターにみられるようなプロフェッショナル教育はほとんど実施されていない。たとえば、建築家教育の重要項目としてあげられる職能倫理、業務範囲と社会的責任、契約、設計業務に関連する周辺実務、建築経済など、建築行為と社会活動に関連するさまざまな要点が欠落した教育状況を招いている。大学における建築設計教育のリアリティを問うならば、まずこの点について考える必要があると思う。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

建築界において大学はどのような役割を果たすべきか考えるならば、教育の現場では、まず学生に対して、明確に自らが果たすべき社会的役割について指導しなくてはいけない。新しい時代に拡大するさまざまな可能性に向けて発進するモノづくりの精神を持つ人を育てること。それは建築界を超えて、時代が希求する若いエネルギーであり、彼らの役割は、大学にもましてはるかに大きい。

（くぼ　せいいち／大阪芸術大学助教授）

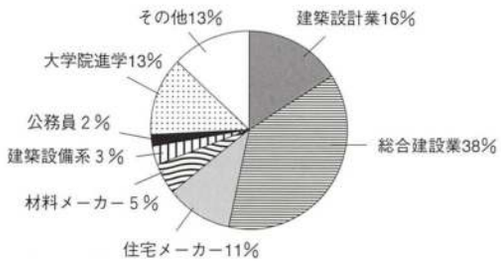


大阪芸術大学での卒業設計オープンジュリーの様子

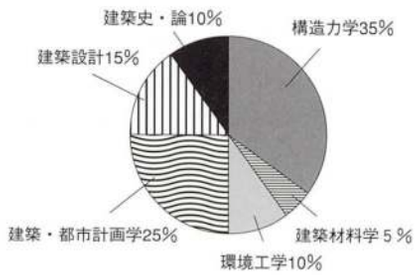
大阪工業大学工学部建築学科

辻　正矩

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

本学科は創設以来、実務者教育を重視しており、その指向は現在の設計教育にも反映されている。したがって、これまでの設計教育の伝統を踏まえつつ、新しい時代の要請に応えるというのが、本学科の設計教育の基本的なスタンスである。具体的には、自営の建築家、設計事務所やゼネコン設計部の設計者など設計に携わる人材の育成と、建設会社やメーカーなどで施工図や仕様書の作成などの業務を遂行できる人材の育成の両方を考慮した設計教育が行われてきた。しかしながら近年、学生のニーズも多様化しており、社会的にも新たなニーズが起こりつつある。それらの要請に応えて、インテリア、工業化住宅、福祉、環境などの分野で活躍できるような人材を育成する教育も今後は必要と考えている。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

上記の目標を達成するために、来年度から新しい設計教育のカリキュラムを実施することにしている。現在は１学年全員を１つのクラスで設計演習の授業を行っているが、来年度からは２クラスに分けて行う。設計演習では２年生までは全員に同一内容の課題を課すが、３年前期では、学生の設計の習熟レベルに応じて到達目標および指導方法を違えた教授方式を採ることにしている。現在、３年後期からは計画系と構造系にコースを分けて指導しているが、再来年度からは計画系の中をさらに、機能が複雑な大規模施設を設計対象とするコースと、住宅、店舗、インテリアなどを対象とするコースとに分けて、学生の志望分野に即した教育を行うことにしている。

□最近の建築系学生についての印象

１年生の設計演習を担当しているが、課題に興味を示さない、あるいは課題が難しいという学生の比率が、最近多くなってきたように感じる。今までと同じ課題を出しても、その到達レベルは以前の学生に比べて低くなっている。図面を引くこと、読むことが苦手の学生が増えているのは、高校以前の教育に問題があるのかもしれない。全体的に、建築に必要な知識を自ら求めて行動するという学生の数が少なくなっている。一方、雑誌や、インターネットなどからの情報収集は得意なようで、案外面白い材料を発掘してくることがある。しかし、それを全体とどう結び付けるかといった発展的な思考が十分でなく、せっかくの材料を生かしきれていない。

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

今後の社会環境の変化は激しいものであろうが、そのような環境下で必要とされる人材の育成を考えたとき、次のようなことが重要になるのではないだろうか。建築界のみならず一般に組織のあり様は、従来のトップダウン型から、トップとラインが直結した双方向型のシステムになるであろうと考える。ラインが情報収集し、トップにリアルタイムでそれを送る。トップはそれを解析し、その判断を直ちにラインに返す、そのような即決型のマネイジメントがこれからは求められる。そのときラインに求められるのは問題提起能力である。したがって大学の教育において大事なことは、ラインにあっては問題提起のできる人材を、トップにあってはその問題を全体の中で大局的に判断できる見識をもった人材を育成することである。そのような感度のよい人材を育てる教育をするためには、現在の大学教育システムの抜本的な改革が必要であろう。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

大学の役割が社会に有用な知の生産と有為な人材の育成にあるということは、今後も変わりがないであろう。前者に関しては、大学の研究者が研究を通して建築界に有用な知識および技術を提案することであるが、技術開発的な研究については今日ではむしろ民間の企業等の方が進んでいるようである。したがって技術全体を見渡して、その変化の方向性を大局的に示すことが大学の重要な役割であると考えている。

（つじ　まさのり
／大阪工業大学教授）

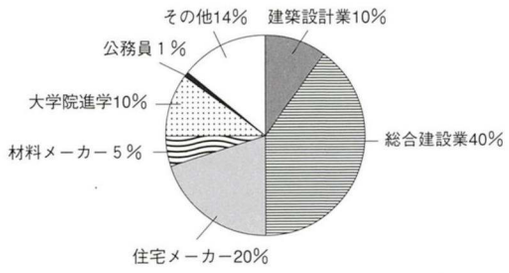


大阪工業大学での教育風景

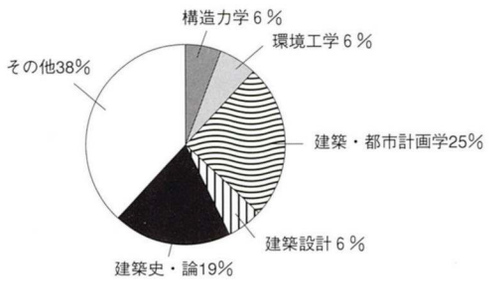
大阪産業大学工学部環境デザイン学科

竹嶋祥夫

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

本学科は環境デザイン学科であり、シビックデザイン、建築・インテリアデザイン、クラフトデザインの３コースから成り立っている。しかし、教育目標・方針としてはそれぞれを独立したコースとして考え、それぞれの専門家を育成するのではなく、各部門の基礎を踏まえ、それぞれを環境デザインとして統合して考えられるような学生を育てようとしている。そのため、実習教育において１・２年次ではコースの区分なく共通的に受講させ、３年次で各コースへ分属させる。また、４年次においては小グループでのスタジオタイプの実習を行っており、コースに関わらず、各教員がそれぞれ呈示する実習課題を各自の関心に応じて選択することができるようにしている。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

各教員それぞれが講義内容を見直し、変容・充実させていることは言うまでもないが、学科としても時宜に応じてカリキュラムや実習内容を見直し、学生の理解の向上を図ると共に、上記教育目標に応じた効果が達成できるように配慮している。また、全学的にではあるが学生による授業評価も行われつつあり、それら評価内容を授業や実習に反映させようとする試みもなされている。

□最近の建築系学生についての印象

本学科の特徴でもあるが、専門分野的に見て比較的幅広い教育内容・教員構成が影響しているのか、職業の専門性に対する態度が淡泊な者が比較的多い様な印象を持っている。就職の場合も、できれば専門性を生かせる職種にと考えてはいるが、学生自身は近年の就職不況をも反映し、それが困難な場合には専門性にこだわらない柔軟性を備えている。また、大企業より中小企業を、ゼネコンより住宅系をという傾向も見られる。

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

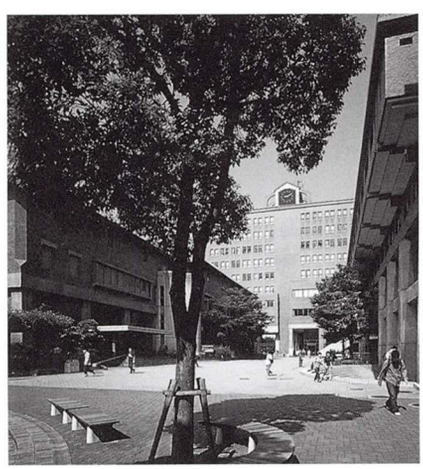
CAD、CGをはじめIT関連教育等は既に行っている内容であるし、国際的に通用する人材育成も総論では賛成であるが本学科の場合どの程度必要かは即断できない。実務教育も大学という教育課程では徹することが困難な内容と考える。いずれにしても挙げられた項目は重要な問題で、教育的に何らかの対応は必要と考えられる。

本学科の場合、従来より女子学生の比率が多く、おおむね30～40%の比率になっている。これら学生は教育研究面では男子学生に比べ何ら遜色なく、どちらかといえば成績の良い者が多い傾向にあるが、男女共同参画社会とは言いながら本来男子学生に比べて門戸が狭い上、不況時にはさらに門戸が閉ざされ、専門性の異なる分野に余儀なく就職するという例も多々見られる。対応策としては大学だけではどうしようもない面もあるが、非常に重要な問題と考えている。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

今後、建築界における大学そのものの役割が変わってくるとは思えないが、学際分野へも広がり、かつ、各分野も多機能化することによって、建築学科学生の建築界における役割には変化が生じる可能性も大きい。また、国公立大学と異なり、私立大学の場合は学生数も多く、就職する分野・方向は非常に多岐にわたる。同時に、建築界の技術的底辺を支えるのは数的にも私立大学の学生であり、建築界全体のレベルアップのためには私立大学における教育の重要性はますます高くなると考えている。

（たけしま　よしお／大阪産業大学教授）

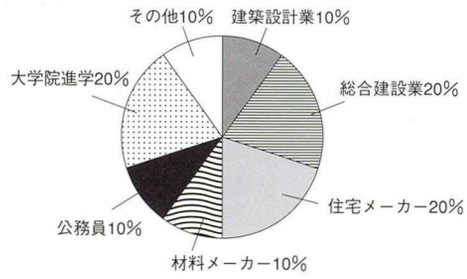


大阪産業大学キャンパス

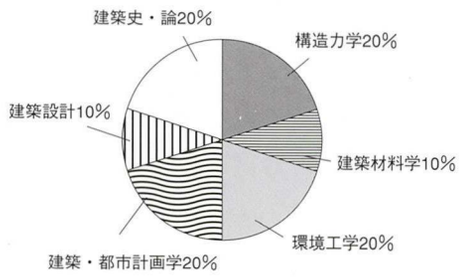
関西大学工学部建築学科

荒木兵一郎

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

関西大学の教育理念は「学の実化」であり、常に「真理とは何か、真実とは何か」を究明し、これを実用に統合することである。最近では「人に優しい建築」「環境に優しい建築」とは何かに重点を置いている。全学を挙げて人権問題に取り組んでおり、いわゆる部落問題、人種民族問題、障害者問題、高齢者問題、女性問題などが多方面から論議され、人に優しい建築の基本事項を解明している。また、地球環境問題を始め、建築公害問題などについても、実務に携わる人たちからの協力も得て、環境に優しくする手法を解明している。したがって、課題設計や卒業設計についても、これらの問題に取り組むものが多いのが特徴である。将来目標としても、すでに述べているように、社会変化のなかの真実を見極め、それに柔軟に対応できる人材の育成である。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

情報技術のコンピュータ・CAD教育については、比較的早期に全学の協力を得て導入したが、共通の機種・機材を利用しているので、建築設計には不都合な部分が多く、多くの学生たちは、いまだに手書きの図面を提出している。これの改革は急務であり、来年度には別途の方式（ノート型パソコンの利用など）を採用するよう検討している。さらに、参考図面や資料などについてもインターネットで検索できるようにホームページの充実を計画している。大きな問題としては、日本技術者教育認定機構（JABEE）や建築学会による建築家資格制度（案）などの基準に適合するように、カリキュラムを再編成することである。とくに、大学院教育の充実を図り、これとの一体化を計画している。

□最近の建築系学生についての印象

キャンパス内に「ジベタリアン」が充満している。路上はもちろん、教室前の廊下にもいる。輪になって弁当も喰っている。最初は面喰らったが、これは携帯電話の普及に連動しており、反動行動であると考えると納得も行く。孤独を嫌い、親密性を重視している。情報伝達が速く、レポートはもちろん、試験答案、図面草案も流れているのは確かである。それも割合にいいものが流れている。底上げには役立つので、今のところは容認している。

□建築教育を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

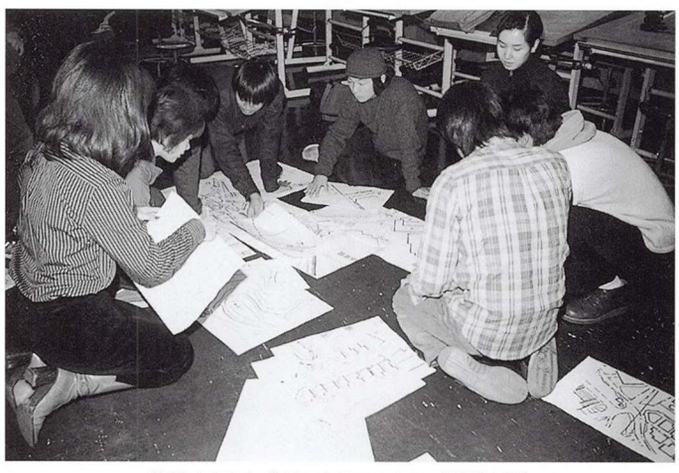
〔増加する女子学生に対する教育、就職問題〕

女子学生は約3割で、漸増している。学習意欲は高く、デザイン・センスにおいても優れている。過半数を占めるのも目前である。教育上はほとんど問題はないが、就職状況は悲惨である。ゼネコンは、いまだに3K職場だという理由で採用は僅少である。公務員に採用されるのが最高であるが、倍率は高い。住宅・設備・材料メーカーを30～40社まわれば、なんとか採用される状況である。彼女たちは大変努力しているので、皆様方の協力を得て、明るい未来を築きたい。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

これまでのような型にはまった教育は無意味となり、際限なく自由化され、個別化されると考える。大学は図書館か、情報センターの役割を担い、教授はアドバイザーの立場で、学生たちと協力して問題解決を図り、これらを資料に蓄積する。それもコンピュータで対応することになろう。なお、学生たちの多くは社会人か、その経験者になるのではなかろうか。

（あらき　ひょういちろう／関西大学教授）

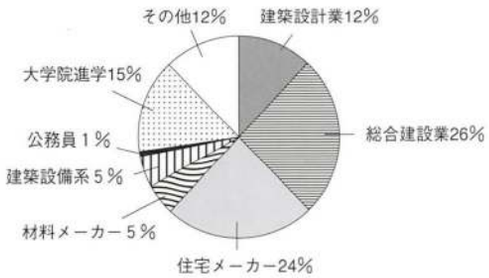


模型づくりも「ジベタリアン」で（関西大学）

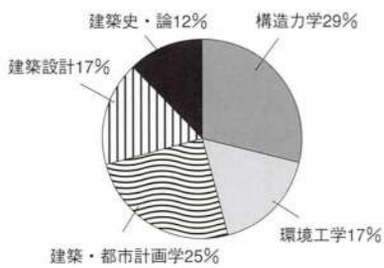
近畿大学理工学部建築学科

小島　孜

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

多様なメニューを用意して学生の要求、資質に対応すべく、従来必修だった設計演習科目を選択必修にして、履修すべき最低単位は示しつつ、複数の課題をこなしたり、CAD演習にウェートを置いた学習が出来るようにしています。また課題内容も、一級建築士試験課題に取り組むコースや、木造住宅設計のコース、学生向けコンペに取り組むコースなどを設け、将来の進路に合わせた選択ができるようにしています。目標とする卒業生像は、社会で通用する人材、社会で伸びていける人材です。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

学部全体としては、日本技術者教育認定制度（JABEE）への対応を積極的に始めていますが、それに関連して学科でも、総合セミナー（１年次に開講、ゼミ形式での創造性開発）や内外セミナー（学外での講演会も含め、在学中に受講した各種セミナーの累積に対する単位認定）、社会奉仕実習（ボランティア活動に対する単位認定）、インターンシップ（企業の協力を得た体験実習に対する単位認定）などの新しい科目を開講し、学生の学ぶ力を高める努力をしています。また学生による授業評価を行い、教員の教育力の向上を図る取り組みも始めています。

□最近の建築系学生についての印象

昨今、学生の理系離れが問題になっていますが、建築学科においても、建築の工学的側面よりも、設計・デザインを志向する傾向が強まっています。それは女子学生の増加、ゼミ配分での設計系・計画系への偏りという現象に現れていますが、そのような学生に、建築という分野の幅の広さを理解させ、構造系、環境系への興味付けをしていくことが、ますます重要になってくると感じています。そこで問題になるのが女子学生の意識です。数年前までの女子学生は、ほとんどが男子に混じって学ぶことに意義を見出すタイプでしたが、昨今は女子学生同士でグループをつくる、女子学生らしい女子学生の比率が高くなっているように思えます。

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

〔デジタルな設計に対する教育方針、問題点〕

設計教育にCADを取り入れることは必要ですが、それを安易に進めることは諫めています。そこで、従来型の図面を描く演習では、設計の基本を２年で、より創造的な建築作品の制作を３年で行っていますが、CAD演習では、２年で３D・CADを、３年で２D・CADを履修する形をとっています。その理由は、デジタル化には人のイメージを拡張し展開するプラスの側面と、便利すぎて人の創造性を損なうマイナスの側面があり、３D・CADを先に学ぶことで、より利点を生かし欠点を抑えることが出来る、と考えるからです。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

現在の大学が、研究面でも教育面でも、必ずしも実社会にとって有効な存在でないことは自覚しています。大学と社会の垣根を低くし相互の交流を活性化することが、少なくとも今の大学にとっては必要なのですが、今後大学が今以上に建築界に貢献出来るかどうか、疑問に思えます。せいぜい社会人の再教育や企業研究のサポートくらいしか思いつきません。デザイン志向に偏りすぎる入学時の学生を、卒業時には社会が求めるバランスに修正し指導していくこと、初志を貫徹するデザイン志向の学生には、幅広い知見を持てるよう指導していくことが、当面の果たすべき役割ではないかと思っています。

（こじま　つとむ／近畿大学教授）

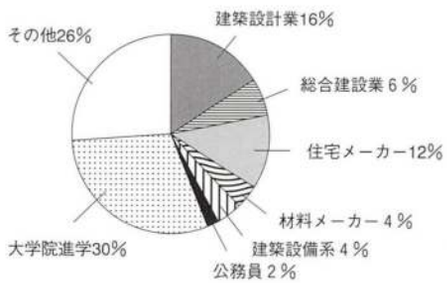


近畿大学での教育風景

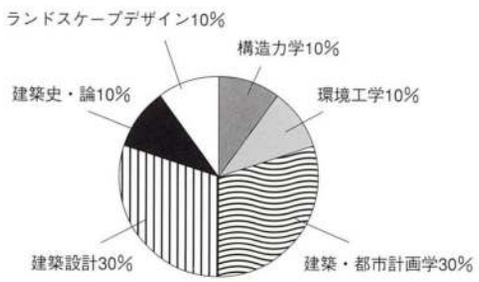
神戸芸術工科大学芸術工学部環境デザイン学科

齊木崇人

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

環境デザイン学科は、人間の「生活の場」について研究し、これを計画する総合的デザイナーを養成を目的にしている。設計教育の対象とする『生活の場』は、小は室内から大は都市：地域：自然に至るまでの広がりを持つ。そして具体的な敷地が与えられる課題は、規模の大小はもとより、公共的な施設と私的な空間、新築の建物と既存建物の改修、ランドスケープデザインなど多岐にわたる。マンツーマンの指導により、各自の能力を多面的に引き出すことが意図されている。設計課題が提示されると、その基本的なねらいの検討から始まり、各自が自分なりにイメージを描き、形を作り、図面、模型、ときには映像で表現する。そして必ず、一人一人の口頭発表と質疑応答、これは緊張の一瞬である。こうしてデザインプロセスの修得を重視し、プレゼンテーション能力を養う。

こうして磨かれた技術と感性のすべてを傾けて取り組むのが卒業研究（卒業論文と制作）である。教員の一対一の指導の下に研究に取り組み、一冊の卒業論文を書き上げ、各自関心を持つテーマにより卒業制作を仕上げる。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

カリキュラムは、『基礎』によって環境デザインのアウトラインを把握することから始まり、ついで『計画』では建築文化の厚みを知り、近代：現代の潮流を学び、社会的生活と環境との関わりや建築や都市をつくる営みにつて幅広く学ぶ。これらの講義は、まさに『体系的知識』修得を目的としている。一方で、本学科が重視しているのが『体験的学習』である。街に出て、人々の生活に触れ、歴史的遺産に学び、近代：現代の建築を見学：調査して、これをレポートにまとめる。あるいは実験：実測によって、現実の空間とその構造を認識する。神戸とその周辺に歴史的遺産や都市開発の事例が豊富に存在し、フィールドワークの対象に恵まれている。

□最近の建築系学生についての印象

学生たちは、いたって真面目で均質になった。特に「環境デザイン実習」では締め切りに遅れて脱落する学生は少なくなった。と同時に、野趣に富んだ学生が少なくなり物足りなさを感じる。しかしながら入学試験で合格する学生の資質は、平均的に上がっている事も事実である。目標を持つ学生の多くは大学院に進学する傾向が高い。

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

環境デザイン学科の目標に社会が呼応してきたように感じる。今、新たに加えるべき教育分野は無いが、CADやCG等を駆使するデジタルデザイン教育の充実は当然の事である。また大学間協定を締結した海外の大学への学生の派遣や受け入れを活性化し、国際的経験の機会を増やしたい。就職問題は社会的不況と連動しており大学独自で対応する特別な工夫はあえてしない。デザイン教育をしっかり行い卒業させる事こそ大切である。これまでの卒業生を受け入れていただいた企業や、卒業生との連携をより密にすべきである。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

建築界は大きく変わりつつある。業務の内容も多様化し、他分野との業間に新しい職域が生まれつつある。環境デザイン学科の教育はそのような動きに対応できる学科と考えている。同時に大学院教育の重要性が認識されつつある。神戸芸術工科大学では当初から、修士・博士課程を準備した。環境デザイン学科の全教員が大学院教育の資格を持ち、学部教育と連動させつつ、社会の先端の動向と呼応した高度の教育を目指し修士号、博士号の取得者を送り出している。

（さいき　たかひと／神戸芸術工科大学教授）

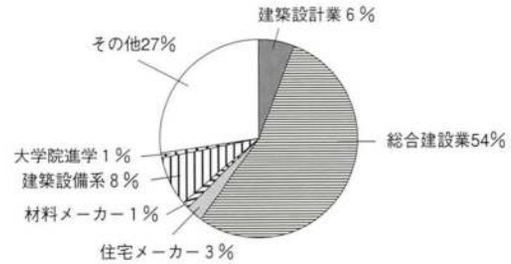


神戸芸術工科大学での環境デザイン実習講評会風景

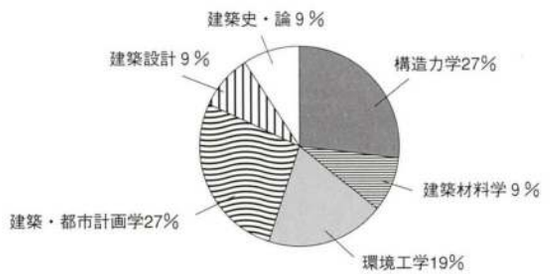
摂南大学工学部建築学科

田中直人

□学科学生の最近の就職先業種構成



□学科に所属する常勤教官（講師以上）の専門分野



□学科の建築設計教育における教育目標と教育方針の特徴、及び卒業生像の目標について

社会の多用なニーズに柔軟に対応する計画とデザイン力を備えるために基本となる知識や技術の習得にポイントを置き、教育を進めている。とりわけ、CAD、CGなどの新しい設計・プレゼンテーションに関する分野に力を置いている。また、意匠デザインに偏重することなく、デザインを支える構造や設備などの工学的技術についても設計教育に絡めて、重要な分野であるとの認識から、多くの専門的領域について学ぶ機会を設けている。

卒業生像としては広く社会のさまざまな建築・デザイン界を担える中堅としての実力と素養を身につけた常識ある社会人をイメージしている。

□新しい大学教育への学科としての取り組み

建築学科のみならず、総合大学としての特徴を生かし、広い視野に立った建築教育を目指している。学科の教育内容としては、絶えず時代のニーズを反映した生きたカリキュラムを実施すべく検討を重ねている。建築分野の近年の多用な広がりや変化に対応するため、３年次よりの建築学演習においては、各自の希望に基づいたゼミ配属を行い、柔軟な姿勢で生きた研究課題を求められるように工夫している。また、設計関係については１年次より設計演習を課し、とくに徹底した少人数グループ単位での教育により、個々の学生の状況に応じた指導を心がけている。また、今日の社会的課題である高齢化や福祉といったテーマに対応すべく、バリアフリーデザインやユニバーサルデザインに関する教育にも力を入れている。

□最近の建築系学生についての印象

昔よりおしゃれになりスマートな学生が多くなったように思うが、骨太で個性のある、野性味のある学生が少なくなってきたのではないかと感じる。グループや団体で行動するのがあまり得意ではなさそうで、あくまで個人や特定の友人の関係性を重視する場合が多いようである。またものごとを自分のオリジナルで進めるのではなく、先例やマニュアルを求めてくる傾向が強いようである。他のみんなと同じであることが落ちつくようである。

□建築環境を取り巻く社会環境の厳しい変化に対して、大学としてどのように対応すべきでしょうか

〔実務教育に対する考え方〕

夏季休みなどを活用したセミナーやオープンデスクなどを活用した実社会での研修を取り入れるなど学外での実習も大切ではないかと思う。また、できるだけ、大学人だけによる教育ではなく、第一線で活躍している講師による教育も必要ではないか。

□今後、建築界において大学の果たすべき役割

建築界そのものもこれからの時代にどのように対応していくかが問われてくる。これまでの箱ものとしての建築やスクラップアンドビルド的再開発や大規模新規開発は難しくなる。環境やエネルギー問題をはじめ、地球規模での人間社会のあり方が問われる。そして、生活の中でいろいろなデザイン領域が豊かな環境を生み出していくことが求められる。従来、あまり意識されなかった分野を含めて、建築界そのものがそのような要請にどう応え、さらに提案できるかが問われる。

大学は単純にそこへ人材を送りこむ教育機関として存在するのではなく、学生に限らず、広く多くの社会の人達と協働する場になろう。研究や開発に限らず、社会へさまざまな情報を発信するコアとしても機能すべきだし、社会の現象や状況を受信し、必要なリアクションを施す機能も必要だろう。少子高齢化という厳しい状況で、経営的感覚だけでは大学は存在しない。大学院教育のような高度化志向と同じに社会の水平方向へのキーステーションとして新たな存在価値を見出す必要がある。

（たなか　なおと／摂南大学教授）



摂南大学正門よりキャンパスをみる

企業アンケートにみる大学の建築設計教育の課題

鈴木克彦

はじめに

建築系学科のある我が国の大学は、長い間それぞれに建築教育の個性を大切にしながら建築界に多くの人材を送りつづけてきた。しかしながら、経済の長期低迷による建築界の閉塞感や少子化による大学の経営難、国立大学の独立行政法人化や建築資格の国際化など、大学を取り巻く社会状況は大きく変化し、体質改善が必要な時期にきている。こうした状況のなか、建築教育の中心を占める設計教育のあり方も、建築界や教育環境の変貌に対応した抜本的な改革の必要に迫られている。

そこで、本特集では大学の建築設計教育に対して社会や企業が望んでいる内容をアンケート調査によって明らかにすることで、21世紀の建築設計教育の未来像を探る手掛かりとした。調査の方法は、関西で主たる活動をしている設計事務所、総合建設業、住宅メーカー等に対してアンケート用紙を配布し、統計的に集計・分析する方法をとった。回収できた回答用紙は35通（配布数：42通）である。

アンケート回答者の業種内訳は、設計事務所：45.7%、総合建設業：34.3%、住宅メーカー：17.1%となり、設計事務所が半数近くを占めた。設計部門の社員数は99人以下：28.6%、100～499人：40.0%、500～999人：17.1%、1000人以上：14.3%となった。平均すると一社あたり386人、関西圏のみの設計部員数は103人となったが、部員数が100人未満の企業は大半が設計事務所である。また、回答者の役職は部長クラスが40.0%と最も多く、その他は代表取締役と取締役が主たるもので、それぞれ14.3%の回答があった。

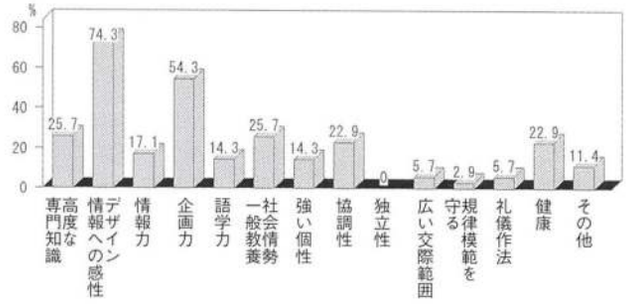


図1　企業が期待する学生の能力

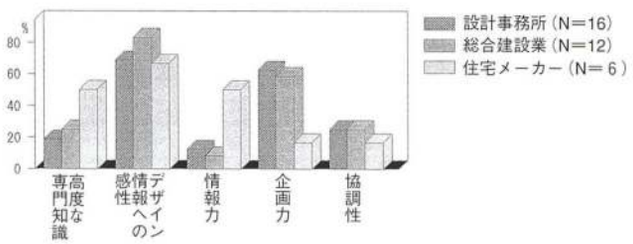


図2　企業が期待する学生の能力（業種別）

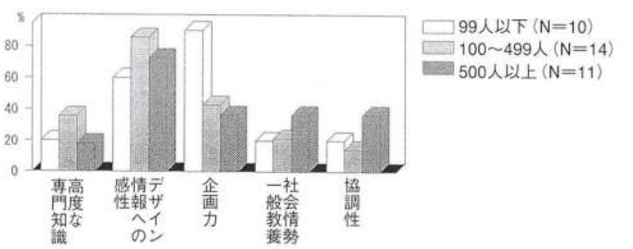


図3　企業が期待する学生の能力（設計部員数別）

1．企業が期待する学生の能力

各業種とも最も期待が多かった学生の能力が「デザイン、情報への感性」で、全体で74.3%あった。次いで「企画力」が54.3%となったが、50%を超えたのはこの両者のみであり、その他の能力に対しては分散化していた。「協調性」を期待する割合は2割程度であるが、設計部員数が500人以上の大規模な企業では期待する率が36.4%と高くなっている。一方、「独立性」を期待する回答者はいなかった。また、「広い交際範囲」や「規律規範を守る」「礼儀作法」などを期待する率もきわめて低いものであった。常識以前の問題ということであろうか。その他で期待するものには「基礎的な専門知識」「豊かな人間性」「建築に対する好奇心」「考える能力」があった。

これらの傾向を業種別に見ると、住宅メーカーは他の業種と比較して「企画力」を期待する率が16.7%と低い反面、「高度な専門知識」や「情報力」は半数が望んでおり、他の業種と異なる特徴を示している。また、大規模な企業では「デザイン、情報への感性」を期待する率が最も高く、基礎的な知識や感性を重視している傾向が見られた。一方、設計事務所など設計部の規模が100人未満の小さい企業では、「企画力」に期待する率が90.0%と顕著に高くなっている。

社会情勢の移り変わりが激しい時代のなか「直面する課題に対する研究心や感性を養うこと」（設計事務所名誉会長）や「幅広い知識と構成力」（設計事務所副所長）、「自らの意思で価値判断のできる能力」（総合建設業管理部長）などが主に、現代の学生には望まれているようである。

2．企業が望む大学の設計教育

設計教育を中心とする教育内容に対して各業種とも最も要望が多かったのが「コンセプト構成力」であり、全体で74.3%を占めていた。次に多かったのが「デザイン力」「プレゼンテーション能力」であり、ほぼ半数弱を占めている。「設計者としての人格教育」も約4割を占めていた。その一方で、「図面の表現力」や「実務知識」を望んでいる割合は皆無に近く、即戦力となる「CAD、CGなどの

知識」や「CM、FMなどのマネージメント知識」も予想外に低くなっている。総合建設業には「実務知識」と「CAD、CGなどの知識」を望む回答者はいなかった。こういった教育内容は学生にとっては興味深いものであるが、企業側はあまり期待していないようである。特に大手企業ほど実務に関する教育には期待していない傾向が見られる。企業が大学の設計教育に期待するものは即戦力ではなく、学生の基礎能力を養うことにあると言えよう。その他で期待する教育には「基礎的な専門知識」「一般教養」「建築への好奇心を養う」があった。

「デザイン力」は設計部員数が多い企業ほど望む率が高くなっているが、逆に「プレゼンテーション能力」は設計部員数が多い企業では望む率が少ない。ただし、住宅メーカーでは「プレゼンテーション能力」を望む率が66.7%と高く、顧客に対して言語での表現力が望まれている。「設計者としての人格教育」や「国際性」も設計部員数が多い企業のほうが望む率が高くなっている。

教育方法の具体的な提案として、「建築設計は基本的には実務を通じて自から学び取るもの」(設計事務所代表取締役)であり、むしろ「個性を引き出す教育」(総合建設業統括部長)や「実務の世界では疎かになりがちな自由な発想を大切にした教育」(設計事務所代表取締役)など、大学でしか習得できない教育が必要との意見が多い。その一方で、「企業での実務研修を単位として受け入れられるカリキュラム」(総合建設業部長)や「研究部門と実務部門との2通りの教育方針」(住宅メーカー部長)など、実務教育を教育カリキュラムに盛り込むことにより学生の好奇心を養うような教育方針も提案されている。

環境問題や高齢者、福祉、サステナビリティなどを重要視する現代社会の動きから、建築のもつ社会性を重要視する傾向が強まってきており、大学教育にも社会への感度を高めたカリキュラム改革が必要になっている。しかしながら、現代の学生は社会に対する関心が低く、アートとしての建築に関心が偏りがちなのが現状である。「設計界の閉塞性を招いたのはデザインに偏重した専門教育と建築ジャーナリズムに負うところが大きい。生活者としての幅広い教育カリキュラムを準備すべき」(総合建設業部長)が代弁するように、学生の人気取りのみに腐心することなく、社会を見据えた普遍的な価値意識を養う大学教育が必要とされていよう。

3．大学に必要と思われる機能

最も多かったのが「民間との共同研究機関」で、全体で69.7%を占めていた。ただし、小規模な設計組織が多い設計事務所では「情報収集、発信機関」が64.3%と最も多く、また「研究機関」として

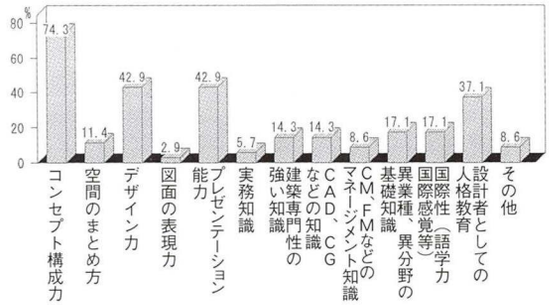


図4　企業が望む大学の設計教育

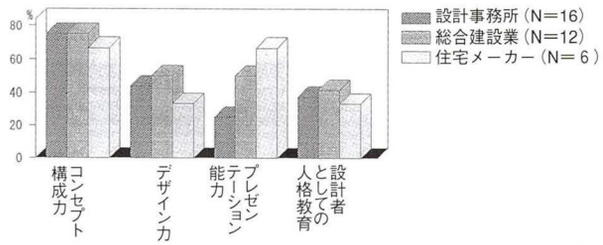


図5　企業が望む大学の設計教育（業種別）

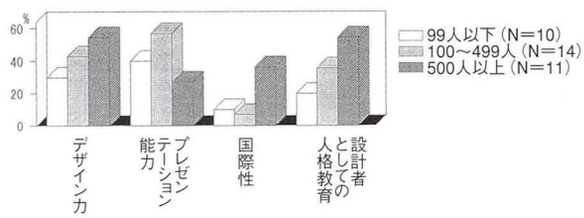


図6　企業が望む大学の設計教育（設計部員数別）

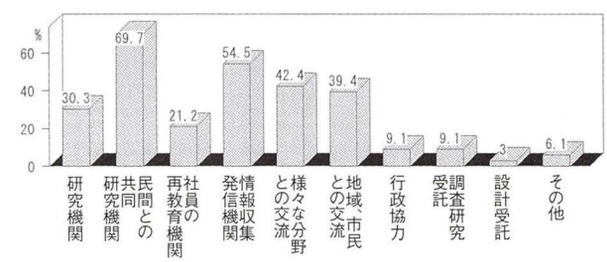


図7　大学に必要と思われる機能

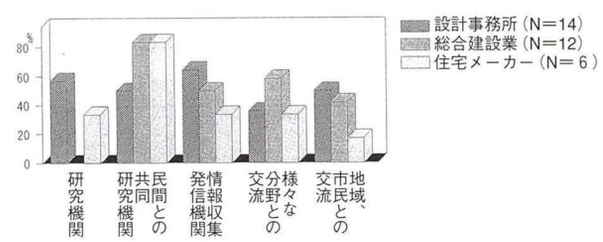


図8　大学に必要と思われる機能（業種別）

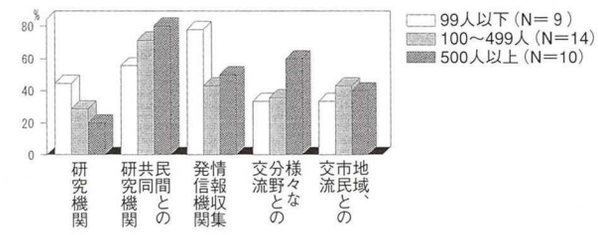


図9　大学に必要と思われる機能（設計部員数別）

の役割も設計事務所が大半を占め、他の業種と違う傾向が見られた。民間企業では取り組みにくい「様々な分野との交流」「地域、市民との交流」は約4割を占めているが、一方で「調査研究受託」や「設計受託」はきわめて少なく、民間企業との明確な役割分担が期待されている。「民間との共同研究機関」や「様々な分野との交流」は、設計部の規模が大きい大企業ほど必要としている傾向にある。「様々な分野との交流」を望む割合は、総合建設業では58.3%と他業種よりも高くなっている。また、「地域、市民との交流」を必要としているのは大半が設計事務所、総合建設業であり、「調査研究受託」を要望するのも総合建設業のみである。

大学の役割に対する具体的な提案として、「利潤追求が避けられない民間企業ではできない基礎的分野の研究、いつ役に立つとも限らぬ研究ができる特権をフルに活用すべき」(設計事務所副所長)、そして研究成果は「民間との共同研究や社会人の受け入れ等を通じて実務への応用を促進」(住宅メーカー課長)し、長期的な視野に立って「科学、精神という今まで相容れなかった領域が一つになって建築の未来を真剣に研究し、全包括的な判断のもと、時代の進むべき道を時々刻々と社会に示唆していく」(総合建設業)ような大学像が期待されている。

おわりに

今回のアンケート調査で示された企業からの声は一部の意見かもしれない。しかし、その内容は設計教育の将来像を考える上で示唆に富むものであった。また、アンケートの質問項目以外にも積極的なご意見を多数いただいた。そのいくつかを紹介させていただく。

大学を巡る社会情勢の緊迫感から、各大学とも真剣に将来像を模索しているであろう。しかし、それは教授陣を中心とした一部の大学スタッフのみの閉ざされた世界の中で議論されているのが現実である。大学のもつ社会的役割を認識するならば、「学内だけでなく広く社会全体をまきこむ形で大学の将来像を議論してほしい」(設計事務所代表取締役)という意見が示しているように、人事抗争や既成の研究分野にとらわれることなく、市民をはじめ様々な立場の人々をとりこんだ社会に広く開かれた大学改革の姿勢こそが、これから押し寄せてくる大学の生き残り戦争に勝ち抜く道ではなかろうか。

大学の設計教育に対する意見

〔設計事務所〕

□実務をある程度こなせるようになるには、卒業後3～5年は必要。大学教育では、実務教育よりも、基礎知識の習得に期待する。(取締役)

□多様化する要素、条件をまとめる力が必要とされて来ると思われる。幅広い知識と構成力のトレーニングが期待される。(副所長)

□21世紀の不透明な時代に向けて、社会について自分なりに考え、悩み、それを建築的に解釈しなおす根本的な訓練が必要。(設計部長)

□卒業年度の休暇を中心に活用して、1～2カ月程度、学生を企業に実習に派遣し(企業の希望をふまえて)、企業側に有望な人材の発掘、学生側に入社希望の有無を探らせる機会をつくる。(名誉会長)

□実務に入ると忘れてしまう可能性のある自由な空想を大切にした教育を期待する。(代表取締役)

□建築は優れて哲学的な行為であり、決していわゆる表面を飾るデュラティブデザインではない。人間が何を目指して空間の中に生きるかを手助けするのが建築である。(取締役副所長)

□建築は人間の生活と文化の器であり、建築の設計には、それらに対する理解と洞察力が必要。よって大学においては、設計業務の基礎となる歴史教育、実地調査等による生活実感をベースとした設計指導に期待。(設計部長)

〔総合建設業〕

□実践で活躍している建築家を教師陣に加えること。4年間の大学生活の中で一度くらい、企業等の中に入り、実務研修を受けられるカリキュラムの採用。(設計部長)

□「建築に対して情熱を持てる」学生を育てる事を大切にしたい。学生時代に学ぶ技術は、企業に入れば数年もしないうちに陳腐になる。長い企業生活でもっとも武器になるものは情熱で、これをいかに持ち続けられるかがポイント。(設計部長)

□今日の設計界の閉塞性を招いたのは、デザイン偏重とそれを受けた専門教育、プラス建築ジャーナリズムに負うところが大。まず生活者としての幅広い教育課程を準備すべき。(設計部長)

□作品性、デザイン、設計の評価等について社会的な位置づけを重要視する傾向が高くなっており、そうした教育を充実させる必要がある。(設計室長)

□顧客が要望している建物イメージから一歩つっこんで、法規制を考慮しつつ、機能面の期待、デザイン、構造面(安全性)の期待を表現するプレゼンテーション能力。(部長)

□専門課程での学生と教員とのテーマを決めてディスカッションを増やし、自己の考えを相手に訴える能力と実践が望まれる。(設計部部長)

〔住宅メーカー〕

□様々な異業種、異分野とのコーディネートのできる建築的視野をもつ人々が必要。とくに医療、社会福祉、環境、気象などの分野の人達と仕事を進める能力を養う。(部長)

□設計に関するスキル向上と共に、表現力、特に言語での表現力向上が望まれる。(部長)

□採用にあたって、大学での住宅建築に対する取り組みを質問してもきちんとした見識を持ち合わせていない。そうした見識の確立、真摯な姿勢を養ってほしい。(技術統括部課長)

□今までの住居論に加え、住宅産業論など住宅に関する、販売から生産・施工・アフターに関する内容を理解させて設計する教育を期待。(常務取締役)

大学の建築界における今後の役割に対する意見

〔設計事務所〕

□時代をリードする人材を育成するためのベースづくりを重要視すべきである。それは時代をこえて、重要な事柄である。生きた研究と情報を絶えず大学は保持すべきであり、その為にも民間との実戦的協力体制が必要。(代表取締役)

□最近とみに建築に求められる要素が環境への配慮等を含めて複雑多岐に拡大している。1級建築士等の従来の資格取得のみで、建築家としての職能を永続的に維持することは困難で、実務者を対象とした再教育を制度とし、大学がその役割を担うことが望ましい。(代表取締役)

□今こそ、大学本来の機能に専念してほしい。大学の機能とは、学内のクローズされた環境下でなく、広く社会全体をまきこんで議論してほしい。(代表取締役)

□大学は教育機関である前に、まず研究機関である。学生達は研究者の価値を本能的に見分けて、納得すれば自発的についてくる。学生をひきつける教育者のカリスマ性、名物教授とはそれであろう。建築の設計は教えられるものでなく、経験を積み重ね、自ら学びとるものである。(大阪事務所長)

□学識経験者としての研究成果見識と強い倫理観・使命感をもっての行動を前提とすれば、どの機能も必要と思われる。(代表取締役)

□民間企業で出来ない部分の研究、情報の収集と、それらの公開の場となる。(設計部長)

□建築にこだわりすぎないこと。社会に人材を送り出す役割と様々な価値観と情熱を持った人々の集う貴重な場であり、その価値を再発見すること。(副代表)

□建築界と教育の場がリンクする必要が求められる。教授が現実にものをつくり、組織事務所やゼネコンの若手と共通な場で、ものをスタディーする場が必要。(主任技師)

□一般社会に対する建築に関する正しい理解が、職業としての建築のみならず建築界にとっても必要な時期にきている。こうした分野での大学の果たす役割。(所長)

〔総合建設業〕

□企業における活動は存続をかけた利潤追求を避けて通ることができない。実践および経済性を優先するがゆえに排除される陽の目をみるチャンスを失っている活動、すなわち学究的アプローチからの追求、また企業間競争を除いた学究的分野のコラボレーション及び客観的立場にたった評価機関。(設計管理部長)

□建築のハード、ソフト両面において、耐久性、安全性、快適性、社会的位置づけ、伝統と保存といったことで、幅広く、国民、市民に知識をもってもらう活動をすべきではないか。(工務課長)

□社会の変革に応じ、教育機関と地域とのつながりが増すと予測され、それらに対応するシステム（ハード、ソフト）の構築が必要となろう。(設計統括部長)

□国内だけでなく、海外に目を向けた「グローバルな視点」に立った人材の教育を望む。(副部長)

□高度専門領域が寄り集まった総合大学が真価を発揮すべき時。科学、精神という今まで相容れなかった領域が一つになって建築の未来を真剣に研究し、時代の進むべき道を社会に示唆していけるのは唯一、大学しかない。(プリンシパル・アーキテクト)

□環境問題を考慮して「建築建材と化学」を関連づけた新建材の研究。(専務取締役)

〔住宅会社〕

□企業の技術者の研究の場として国内留学の受け入れを積極的に行う。実社会に出て、目的意識が高まり、その後もう一度、研究に取り組むことを制度化できれば素晴らしい。(取締役)

(すずき　かつひこ／京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科助教授・工博・編集委員)

反省・感想・期待

市嶋久嗣
（大阪大学工学部構築工学科1966年卒業）

□学生生活の中で、設計教育に関係する思い出として最も印象に残っていること。

傷だらけの大型製図板、ガタガタのスチールパイプの机。卒業設計の時は昼夜問わない生活の場と化した我々の学舎は、旧く汚く又臭く雑然以上の世界だったものです。

青焼きの手作りの製本だった恩師A教授の教材「設計入門」の文章を紹介してみますと『建築家は正しい生活の知恵が不可欠。生活という複雑な諸現象を誤りなく判断するには40歳の生活体験が必要。多くの経験が頭脳の新しい反応力を生み、やがて自分なりの独自の反応の仕方を持つようになる。』とあります。

今、自分独自の反応の仕方を保持できているのか我が身を問うています。

□大学で学んだことの中で、社会に出てから最も役にたった、或いは最も記憶に残っていること。

『才能より興味だ、興味を持ち好きになることによって進んで人より多くの努力をし、人に先んじることができる。』これも恩師A教授の言葉です。我々の時代、構築工学科という名称のもと、建築と土木がある時期までは同じ教室で学びました。異業種を志す者同士、興味を披露しあうという得難い経験は、異なった視点の存在の認識と仲間としての結束を生みました。これは我々の仲間の財産となり、社会へ出てからもいまだ連帯感を深めており、当時のシステムに感謝している次第です。

□これからの建築界を担う後輩を育てるため、出身大学に期待すること。

要求の合理と不合理、経済行為と建築行為の矛盾の中で良好な社会ストックの形成に向けてどれだけ理想を持って生きていけるか。

この使命感を建築に従事する者の基本として教えて欲しいと思っています。

それにしても電子情報を駆使しての設計作業は情報の多さ、正確さの保証はありますが、狭い画面の中の思考の危うさと思想の存在の希薄さを懸念しています。

フリーハンドの図面で意志をコミュニケートできる場の大切さも忘れないで欲しいものです。

（いちしま　ひさつぐ／大林組開発企画部企画部長）

フリーな発想をもつ人材育成

歌　一洋
（近畿大学理工学部建築学科1970年卒業）

□学生生活の中で、設計教育に関係する思い出として最も印象に残っていること。

建築家になるという希望も意志も持たない、内的航海の学生生活を送り、今までに過ぎた時間と空間の中で最もグレーだった。

設計など、たまにケント紙の白に向き合うと、殺伐とした気分になり、無機的で想像性のない線をやむなく引いていた印象しかありません。

□大学で学んだことの中で、社会に出てから最も役にたった、或いは最も記憶に残っていること。

大学で学ぶことにあまり興味がなかったので、役に立ったということは残念ながらほとんどありません。あえて言えば卒業後３年目に形骸化した一級建築士免許を１ヶ月ほどの真面目な勉強？に依って与えられたこと。

記憶に残っているのは卒業設計、論文が「カンゴクって独りじゃないんでしょう」というある孤独な若者の言葉から始まり、結文の「人間が自然を100%コントロールできない限り（不可能な妄想）現状のような自然破壊は人類を滅亡へと導くであろう」。そして、酷暑の中をタオルを頭からかぶり、下駄で歩き回ったことぐらいです。

□これからの建築界を担う後輩を育てるため、出身大学に期待すること。

社会システムや価値観が大転換しようとしている状況にあり、あらゆる教育の内容、制度に問題が噴出している中、一元的な設計教育の周知の事実。生き生きと建築を語ること。創る感動を伝えること。机上の設計から少しは離れること。そして、ペダントリーを持たない教師が多いほど、共感と想像性が高まるのではと考えています。

現在、建築でない学科で教える立場にあり、社会通念や価値観、カタチに囚われない発想、創造性のあるファンタジーを持つことのできる人材を育てるべく、身体感覚も重視した新たなカリキュラムを模索、試みつつあります。

（うた　いちよう／歌一洋建築研究所）

人とは何、地球とは何

岡田聿之
（大阪市立大学工学部建築学科1961年卒業）

□学生生活の中で、設計教育に関係する思い出として最も印象に残っていること。

東大吉武研の流れを汲む事例調査型建築計画学講座。建築設計は一歩一歩実地検証を重ねたうえに成り立つこと。夏休み調査実習に加わり、汗とほこりにまみれたフィールドワークがいつかは強い味方になることを学ぶ。

その一方で、森田慶一京大名誉教授（当時）が来校され、自ら訳された「ヴィトルヴィウス建築書」や、P・ヴァレリー「建築家エウパリノス」の講義を聴く。何の素養もない二十歳の学生には、難解どころか口あんぐりであったが、痩身の先生が淡々と語られるアカデミックな雰囲気に、これぞ憧れの象牙の塔！と妙に感激納得。

□大学で学んだことの中で、社会に出てから最も役にたった、或いは最も記憶に残っていること。

教養課程講座の数々。講師は、法学者で芥川龍之介をして天才と言わしめた恒藤学長、以下お名前を省いて、憲法学者で後の大阪府知事、探検家として知られていた後の国立民博館長、世紀末英文学の権威、KJ法を編み出した地理学者、化石植物メタセコイアの発見者、色気を学問に昇華させたと評判の性物学者、数学者で新進気鋭の作曲家、等々。思い出すと限りがないが、それぞれ自らの学問の道を確立した、あるいは切り開きつつある人たちの講義は、一芸に秀でたものだけが持つオーラを放ち学生を惹きつける。

建築学とは直接関係無く、40年を経て、何を教わったかも忘れてしまったはずのものが、仕事の中で、ふと脈絡もなく浮かんできて、建築は建築学のみに非ずと宣ふのである。

□これからの建築界を担う後輩を育てるため、出身大学に期待すること。

建築の思考、創造過程は、雑学の集積の中から多くの選択肢を見出し、インスピレーションを得て、徐々に一点に収斂して行くものであるが、それには、建築学を学ぶことに加えて、広い視野と何事にも興味を持つ人物を必要とする。今世紀は、経済繁栄、物質的豊かさを物差しとする今までの視点から離れて、建築の思考の原点である「人とは何、地球とは何」を改めて考え直す時である。それに関わる教育の一環として教養課程において、文系、理系を問わず他の分野を広く包含する文字通り教養の充実を期待する。

建築の設計は所詮教えられるものでなく、上記の創造過程を幾度となく実践し、経験を積み重ね、自ら学び取るものであろう。企業にとって即戦力になる人材は有り難いが、教えられた専門知識の他は何もない視野の狭い特化型人間は望まない。

（おかだ　のぶゆき／東畑建築事務所常務取締役大阪事務所長）

日本建築の奥深さを知る

岡本弘之
（京都工芸繊維大学大学院工芸学研究科建築工芸学専攻1968年修了）

□学生生活の中で、設計教育に関係する思い出として最も印象に残っていること。

永い歴史と伝統のある落ち着いた情緒豊かな町・京都が好きで、そこに下宿生活し、しかも洛北の静かなキャンパスにおいて、同窓に恵まれた楽しい思い出多き学生生活を送った。人間味溢れるユニークな多くの教授陣にも出会った。非常勤講師の実際的かつ新鮮な講義に触れ、建築設計の面白さと魅力を認識した。通常は見学できない伝統的日本建築を教授と共に見学させてもらい肌で空間を実体験し、日本建築の奥深さにも触れ、建築の永続性、文化性そして風土に密着することの重要性を認識した。

教育を受けたというよりは、学生生活全体を通して常に建築設計に係わっていた印象です。そこでの人間関係および体験が、その後の実務の基礎と成っているように思う。

□大学で学んだことの中で、社会に出てから最も役にたった、或いは最も記憶に残っていること。

直ぐに役に立ったことは、曲がりなりにも実施設計図面らしきものが描けたことです。大学１年からの建築専門教育と共に多くの設計課題等により図面およびスケッチを描かされた事が役立ったと思います。しかし、極めて自由気ままな学生生活において、ほとんど勉強もせずに学友と遊び廻ったりスポーツ活動に没頭したりし、そこで自己形成が図られ人間関係の大切さを学んだ。

大学で学んだ基礎的な知識に加え、大学院時代における教育、指導そして活動を通じて、建築設計の基本となる計画論および総合化などのプロセスを自分なりに修得出来たことが、その後の建築設計および複雑な複合プロジェクトの総合化に於いて大いに役立っていると思う。

□これからの建築界を担う後輩を育てるため、出身大学に期待すること。

建築は人間の生活や意識全体を規定する総合的な力をもっています。建築設計とは人間の為に秩序だった空間を創り出すことです。設計者はこのことを正しく知り、その面白さをより深く愛し、そして誠実に創らなければ成りません。複合化、多様化が進み社会の変化スピードが早まっている時代においては、より多くの人々の関係において建築・都市が創られ、建築家は総合的能力、マネージメント力と共に協調性が問われます。建築設計を目指す学生たちへの教育としては、各学生自身の想像力、発想力が豊かであることが前提となりますが、自覚、意識を誘導する教育および訓練、ロマン豊かで夢多き人に育てる指導が必要ではないでしょうか。

（おかもと　ひろゆき／安井建築設計事務所専務取締役大阪事務所長）

心身一如設計の勧め

柏木浩一
（神戸大学工学部建築学科1968年卒業）

□学生生活の中で、設計教育に関係する思い出として最も印象に残っていること。

社内アンケートで卒業設計のテーマを聞いてきた。卒業後20年もたってからである。さて、困った。どうしても思い出せない。建築学科卒とは名ばかりの、体育会系クラブにうつつを抜かした「てんぷら学生」だったのである。そんな私にも設計教育に関わる仄かな思い出がある。例の卒業設計である。ゼミにもろくろく出ず、計画的に作業を進めなかった報い。最後の２ヶ月は製図室での泊まり込みである。飢えと睡魔にさいなまれながら同じ境遇の仲間と語り合い、プレゼンテーションのテクニックも互いに盗み合った。なんとか提出。えもいわれぬ充足感……。仲間との切瑳琢磨が究極の建築教育になるというのは、先生方に失礼だろうか。

□大学で学んだことの中で、社会に出てから最も役にたった、或いは最も記憶に残っていること。

思考の中心に、ぽっかりと穴が空いていた。今にして思えば、それは設計に苦悩したときに帰るべきところ、言い方を変えると、依って立つ確たる世界観が当時の私には欠落していたのであろう。大学卒業当時の万博景気に沸く日本の社会にあって、物質のもつ力は絶大であり、ある種の宗教に近かった。先輩に挑んだ議論に「空間の神聖？そんなもの、しょせん床・壁・天井をどう作るかだけじゃないか！」と切りかえされ、それ以上反論できなかった。精神世界の浅はかな知識など通用しない。それから私の勉強が始まった。人間の器として建築はどうあるべきか、そもそも人間とは……。気がつくと、なんと、教養課程で学んだものが在るではないか！

□これからの建築界を担う後輩を育てるため、出身大学に期待すること。

建築が他の創造領域にない大切なことを持っているとしたら、それは「リアル」の濃密さであろう。生活に日常的に関わる。人の行動を誘引する大きなスケールをもつ。五感覚に直接迫ってくる。どれをとっても、身体と密着したリアルの問題抜きには語れないのが建築である。ところが絵画に代表される視覚芸術は、すでにリアルからヴァーチャルに価値の重心を移行させ、いまや人間のコミュニケーションすら、これに追従しようとする勢いである。

21世紀は「心の時代」といわれながら、このまま身体を伴わない心の働きが云々されるのは、何とも恐ろしい。いま建築設計教育で求められるのは、このリアルという人間存在に関わる価値を、どう教えるかに尽きるのではなかろうか。

（かしわぎ　こういち／竹中工務店大阪本店設計部プリンシパル・アーキテクト）

歴史なるもの、根元的なるもの

川村眞次
（大阪工業大学工学部建築学科1968年卒業）

□学生生活の中で、設計教育に関係する思い出として最も印象に残っていること。

製図課題の提出回数は他大学と比べて回数が多く、またワン・デェーという朝から課題説明を受けて一日で仕上げる授業が何回もあり、更に簡単なコンペにも応募していたことから、年中図面を描いていたような思い出を有する。先生方には結構ご指導頂いたが、影響を受けたのは優秀な同窓生やアメリカ文化センターの図書、イギリスから配送してもらっていた雑誌「アーキテクチャルデザイン」や大学にあったカサベラ等の洋書に掲載された海外の作品、それに共同でコンペ作品を作成しながら交わした大議論や実作品の見学等からで、設計教育で学ぶべき感性や方法論は授業に増して課外授業で自主的に得た感じがする。

□大学で学んだことの中で、社会に出てからもっとも役にたった、或いはもっとも記憶に残っていること。

卒業して住宅公団に入社、約10年間は東京支社、本社で、高層高密大規模団地の設計、標準設計、将来型住宅KEPの提案等に携わった。この間を顧みれば、大学で学んだことが直接、役立ったということはなく、授業で受けた建築教育の「基礎的知識」と「自ら培った感性や方法論、技術、テクニック、積極性」が徐々に相乗効果を発揮、何れの場面でも役に立った。また、学生時代に読んだS・ギーディオンやケヴン・リンチ、和辻哲郎、等々は、理解できて即役立ったのでは無く、経験を積むことにより、理解が深まり、醸成し、自らの考え方、方法論の構築に役立っている訳で、街創り・建物創り設計に従事する者にとっては基礎的知識は当然として「歴史的なるもの、根元的なるもの」の教えが後々役に立っている。

□これからの建築界を担う後輩を育てるため、出身大学に期待すること。

街創り・建物創りの設計は社会形成にとっては最も重要事項。それらに従事する者を育てる教育機関の責務はより重要で、次の事項は、全大学機関に対する期待でもある。

１．社会的責務を有する業務に従事する人材としての倫理学や街や建物に関わる社会学を教える。２．新しい、理想の建設界の姿、システムを教える。３．「人間らしい生活とは何か、どう地球を救うのか」といった根元から街創り・建物創りに関わる設計を教える。４．建築ジャーナリズムに媚びない建築教育を目指す。５．独りよがりの街創り・建物創りに関わる設計でなく周辺との調和や場所性、歴史性を見据えた設計論を教える。６．教育方針にマッチし、かつ実際に活躍している人材や優れた作品に、直に触れてその真髄を学べるカリキュラムを数多く設ける。

（かわむら　しんじ／関西都市整備センター取締役設計本部長）

製図板に向かう建築家に感動

遠松展弘

（京都大学大学院工学研究科建築学専攻1971年修了）

□学生生活の中で、設計教育に関係する思い出として最も印象に残っていること。

「ディテール」の講義を受けたが、まったく理解できず困っていた。その時、浦辺建築事務所を退職し、助手をされていた方から、「ディテール」が素材の持つ特性や施工手順、更には工事製作上の許容誤差等により決まってくるものだということを実に分かり易く、親切な解説をして頂き、目からうろこといった思いがした。

建築への更なる興味を持たせていただいたことに、今も感謝している。

□大学で学んだことの中で、社会に出てから最も役にたった、或いは最も記憶に残っていること。

大学の講義で学んだことが即、社会で役立つということは、大学と社会のレベルが近かった当時でもまずなかったと思う。

その一方で、研究室で深夜になっても製図板に向かって、スケッチをし続ける川崎清先生の後姿で教えられたことが大きい。常に自分自身を鼓舞しながら、全力で立ち向かうことは建築家たらんとする人にとって、あたりまえのことと、身をもって教えられた。

□これからの建築界を担う後輩を育てるため、出身大学に期待すること。

建築設計を取り巻く社会環境はますます多様化、複雑化しており、新たな技術分野（環境、施設の保全、運営、経営工学）に取り組む必要がでている。これら新たな分野での大学に期待することは大きい。

（とおまつ　のぶひろ／日建設計取締役大阪本社副代表）

産業界におけるデザイナーづくり

増地秀夫

（大阪芸術大学芸術学部デザイン学科インテリアデザイン専攻1971年卒業）

□学生生活の中で、設計教育に関係する思い出として最も印象に残っていること。

創立間も無い大学で、且つ私の在籍したインテリア専攻は2年目という状態のため、思い起こしてみても何もかもが手探りであったようです。産業界のデザイナーを育てる目的で設立されたとおり、授業は課題作成中心でワークを数多くこなすことによる能力向上を図っていたように思われます。デザイン・設計の担当教授・講師は、事務所の主宰や企業に於いて活躍している人たちが大半で、その時その時の第一線でテーマとなっていることや企業に於ける必要レベルが、私たち学生にストレートにぶつけられ要求されていたことが思い出されます。

□大学で学んだことの中で、社会に出てから最も役にたった、或いは最も記憶に残っていること。

上にも記しましたが、課題中心の授業は1課題2～3週で提出となり、2～3課題が平行して動いていたと記憶しています。それを如何にしてこなしていくかに能力を集中していたため、要求内容と完成時間のマネージメント能力や初歩のテクニカルスキルを身に付けられたことが、社会に出て大いに役立ったと思えます。ただ私の場合、建築知識やフィロソフィーに於いて役立ったことを思い出せないのが残念です。

しかし、社会に出てからはテクニカルスキルがそこそこ身に付いていたことが幸いし、余裕を持って不足する知的能力向上に集中出来たことが、今を作っていると思っております。

□これからの建築界を担う後輩を育てるため、出身大学に期待すること。

出身校だけでなく建築関連大学全体に極論を言うことをお許し頂きます。まだまだ大学だけが建築界の教育機関だと思われているのではないでしょうか。昔と違い、今の大学は建築関連においての初等教育機関にしかなり得ていないと思われます。昨今「大学院大学」「社会人大学」の動きが活発ですが、経営学で言うところの「MBA（Master of Bussiness Administration）」に相当する建築家版や、社会人が必要としたとき必要な内容を学べる等、産学を一体とした総合的な教育体系への取り組みが必要ではないでしょうか。そのためにも各々の大学が持つ思想や建築史観、カリキュラム等が異なる必要があります。それを踏まえ出身校には是非とも、設立の主旨である「産業界に於けるデザイナー作り」というスタンスを忘れて欲しくないと思っております。

（ますじ　ひでお／積水ハウス㈱内装システム開発部長）

詳細図が建築の見方を深める

吉羽裕子
（京都府立大学家政学部住居学科1975年卒業）

□学生生活の中で、設計教育に関係する思い出として最も印象に残っていること。

当時学科の教育方針が、設計より研究に重きをおいていて、都市計画も含め、計画論に大きく時間をとっていた。

また住居系であったこともあり、設計の時間も少なく課題も多くはなかったが、一部詳細図まで画くことを要求され、これは建築の見方を深めるのに良かったと思う。何故こういう設計になるかという基本についてはきちんとおさえられていたと思う。

□大学で学んだことの中で、社会に出てから最も役にたった、或いは最も記憶に残っていること。

大学が京都にあることもあり、古い本造建築を多く見たことが印象深い。

年月を経た建築には、その年月に耐えるだけの設計手法が蓄積されており、詳細に見るべきものが多い。また、特に京都の古い建物は、建築とその外部空間とのかかわりについて密度の高いものが多く、学ぶべきことも多い。

□これからの建築界を担う後輩を育てるため、出身大学に期待すること。

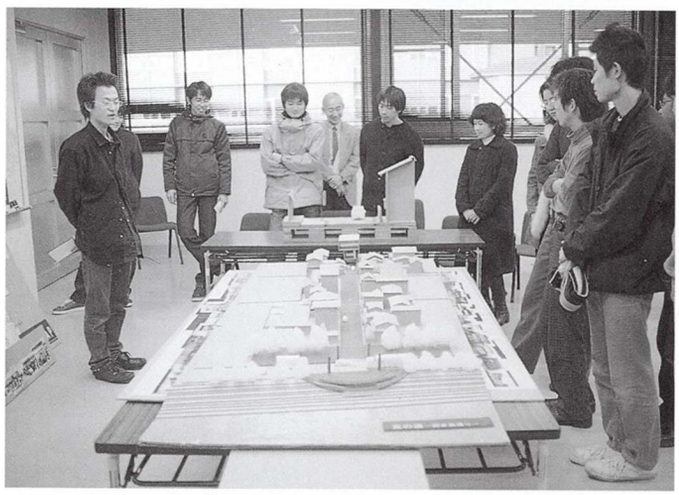
建築は社会性を伴うものであることが基本的にあり、単なる立体造形でもなく、単なる技術教育でもなく、両方を修得させることが、重要である。

そのためには、大学教育全般のこととして、大学入試の欠陥による大学以前の基礎知識、思考力の低さが改善されないと大学だけでは間に合わない。

その他、根本的なことを言えば、近年、学科名が何を教えているのかあいまいなところが増えていて、（建築系にかかわらず）もう少し明確にすべきと感じている。

（よしば　ゆうこ／アイ・エフ建築設計研究所）







REPORT

モロッコでの協力隊活動－フェズは美しい－

槙村吉高
造園技師

私の協力隊活動は西のはてモロッコ王国で、モロッコの造園技師とともに2年間、公園や緑地帯の計画・設計を行った。

配属先は首都ラバトから200kmほど離れた所で、世界遺産である世界最大のメディナがある街、フェズである。そのフェズ州全域の都市計画、保存事業等を行っているフェズ都市計画保存事業団という役所が私の配属先であった。

ムスタファ・ラザールとの仕事

ここの役人は各都市から集まってきたエリートのエンジニアばかりでプライドが高く、他の役所のエンジニア以上に高い技術をもった人々ばかりである。その中の一人である造園技師ムスタファ・ラザールと一緒に2年間行動、仕事を共にした。

最初は日本の設計事務所で仕事をしていた以上、私もなめられまいと自分の考え方、知識が正しいと言わんばかりにコミュニケーションもとらずに仕事を行っていたが、徐々にプライドの高いムスタファとの距離は離れていく一方で、仕事の方もうまくいかなかった。

こんな状況が3ヵ月も続き、これではダメだと思い、必死でモロッコの言葉、アラビア語、フランス語を勉強し、ささいなことでもなるべく話をするようにし、コミュニケーションをはかるようにした。また、どんなことでもムスタファの意見をまず聞いて、頭ごなしにダメだと言わず「そういうやり方もいいけど、こんなやり方、考え方もあるよ」という方法で仕事を進めるようにした。

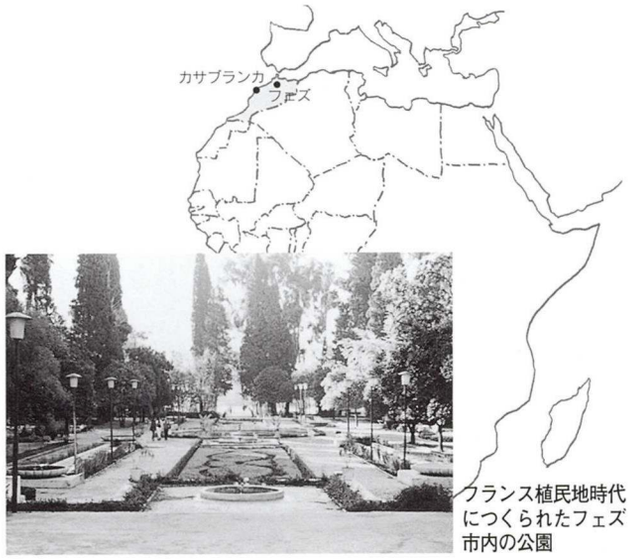
それからは自然と何もかもがうまく運べるようになり、2年後にはムスタファと何でも話せる大親友となることが出来た。

誰のための図面？

私のいたフェズという街は緑豊かな美しい街で、最初赴任してきた時には、りっぱな公園もあるし、造園隊員なんかいらないんじゃないかと思ったりした。しかし役所でムスタファや建築技師と仕事を進めていくうちに、あまりにも公園等をつくるのに必要な資料がないこと、仕事の進め方を知らないということに気がついた。公園一つを計画・設計することにしても、ただ単に木を植えるのではなく、どのような公園が周辺から望まれ、どのような利用者が考えられるのか等、いろんな要素があってゾーニング化され、報告書・図面が出来上がるという考え方が、ムスタファの頭の中にはなかった。ただ単に見栄えのよい図面を描いて依頼のあった町役場に渡すことが大切で、たいへん出世欲が強く、わが役所のディレクターが気に入りそうな図面ばかり描いていた。いったい誰のために図面を描いているのかとよく討論した。



フェズの造園技師たちの会議にて



フランス植民地時代につくられたフェズ市内の公園

自分の描いた公園は実現しなかったが……

モロッコの植生は内陸部ではユーカリの木（フランス植民地時代に植樹された。燃えやすく、燃料や建築材料としてよく利用されている）、シラガヤシ、プラタナス、アカシア、ジャカランダ（6月ごろきれいな紫色の花を見ることができる）、ブーゲンビリア、ハイビスカス（年中咲いている）、オリーブ。山岳部ではアカマツ（マツタケもとれる！）、ポプラ、スギ、サハラ地方ではサボテン（夏にはサボテンの実が町で売り出されるが、なかなか甘くて美味しい）、アルガンツリー（モロッコにしかない乾燥にたいへん強い木で、油がとれる）、ナツメヤシなどが見られる。

いろんな植生が分布しているモロッコは、アフリカの中では緑豊かな国ではあるが、緑に対するモロッコ人の意識はたいへん低く、役所の造園技師でさえも、管理が面倒であるとの理由で、ある日、高さ5m弱の街路樹をバッサリ葉も残さず、来年どう見ても芽がふかないくらい切ってしまった。私は相当のショックを受け、このままではいけないと思い、少しでも緑の大切さや役割を知ってもらおうと、地元の小学生を役所に招き、講演・展示会を行った。また、学校へ行き、みんなで苗木を植えたり、ごみそうじをしたりした。

2年間の活動の中で、土地利用図や緑地帯、公園の現況報告書、身障者のためのやさしい街づくり等、これから公園を計画していく上で資料となりそうなものを作成したり、公園の実施設計図を描いたりしたが、役所にお金がなく、自分の描いた公園を実際につくることはできなかった。

しかしこれから少しでも私のまとめた2年間の資料が役に立ってくれることを願い、またあの時、緑の公園・展示会に来てくれた小学生が少しずつ緑の大切さを広めてくれればと、日本に帰ってきて2年たった今、そう夢みているのである。　（まきむら　よしたか）

槙村吉高プロフィール
・大阪出身
・昭和47年2月7日生
・造園設計事務所㈱空間創研勤務の後、1997.4～1999.4の2年間、モロッコ王国にて青年海外協力隊員として活動。
・現在、㈱荒木造園設計勤務。将来、日本とモロッコのかけ橋となるような事業を行いたいと思っている。

可能態という問題群

末包伸吾
神戸大学工学部建設学科助教授

2000年11月10日から20日にかけて、ハービス大阪リビングミュージアム4階および5階の中央広場において、竹中工務店設計部に所属する30代の建築家が出展する「建築の可能態　TAKENAKA30代展」が開催された。

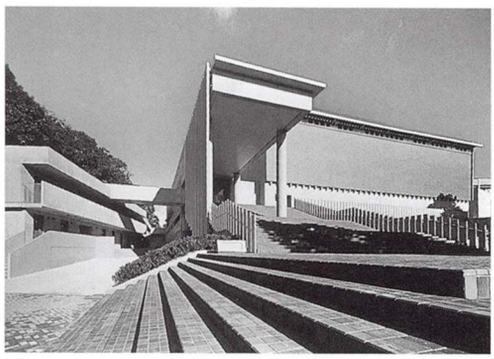
彼らは、もはや現代において一つの「大きな物語」を描き得ないという認識のもと、モダニズムが捨て去ったもの、置き忘れたもの、そして積み残したものの批評的回収とともに、例えばモダニズムのアイデアや概念を反復し拡張することなどが、多様な可能性を示唆する（可能態）と、この展覧会の主旨を示している。

プレゼンテーションは、一人につき2～3点の作品を、幅2m高さ3mの布のスクリーン、ビデオ、そしてスライドショーにまとめたものからなる。プレゼンテーションの中で最も特徴的であったのは、スクリーンの大きさを利用してディテールを中心に構成されていたことである。写真や一般図は、あくまで部分が全体とどの様に関係するのかという観点から補足的に扱われている。

いずれの作品も「目配りの行きとどいた端正」なものであった。設計者による差異はある。しかし、幾何学に重きを置きながら、面や線による微細な構成をはかり、また壁を透明から不透明までのグラデーションとして把握し、そこにFRPグレーチング等のルーバーや触覚感のある素材などで、内外のあるいは内部の領域をつくり出している点では共通点も多い。1986年に出版された『竹中工務店設計部』では、竹中のデザインを、ファサードの自律、ポツ窓、曲面、屋根、内外の反転、装飾的細部、ピクチュアレスクという7つのアイテムに整理している。15年を経、今回出展された作品を見る限り、ポツ窓や装飾的細部は透明度のレンジへ、屋根は突き出たスラブへ、またピクチャレスクはシークエンシャルへと、おのおの変化している。そこには時代との共鳴への積極的で真面目な姿勢がみてとれる。しかし、あるいはそれが故に類型的にみえてしまうことにとまどいを覚えた。

こうしたことも影響してか、10日に行われたフォーラムでは、モダニズムの批評的回収というアプローチそのものや、各出展者が提示した回路が、果たして新たな可能性として「開かれた」回路たりえているのかという疑問が提示され、ついには建築の定義を問うという総括がなされることになる。

では、彼らが提示した回路とはどの様なものであったのか。モダニズム建築は完成した瞬間が美しさの頂点であることを「ツルツル」とし、「ザラザラ感覚」を提唱して美の頂点の概念的・時間的移送を試みる大平氏。「領域」や「場所と時間」、近代的な視覚重視に対し「身体性」を付置する須田氏、永岡氏、増田氏。商業建築に携わる経験から、コマーシャリズムがもたらす「欲望」への対応が、建築の時空間を変容し都市空間へと開放するとする原田氏や、ハングライダーのように、発想こそテクノロジカルでありながら、シン



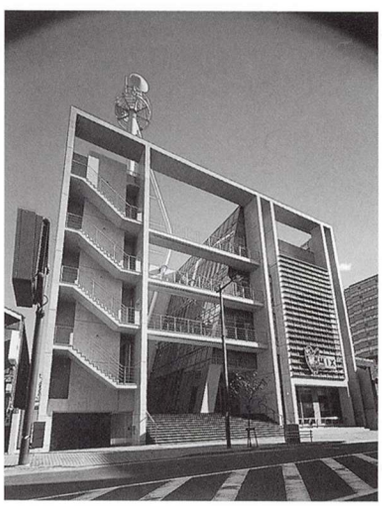
大平　滋彦　　関西大学第一高等学校・第一中学校秀麗館

1965　奈良県生まれ
1988　京都工芸繊維大学卒業
主な作品　「新日本海フェリー敦賀ターミナル」「関西大学第一中学校校舎3号館」「関西大学第一高等学校・第一中学校秀麗館」等



須田　修司　　オムロン岡山食堂棟

1960　島根県生まれ
1983　広島大学卒業
主な作品　「広島学院体育館」「山陽女学園医学技術専門学校」「盈進中学校」「オムロン岡山食堂棟」「O社大山保養所」等

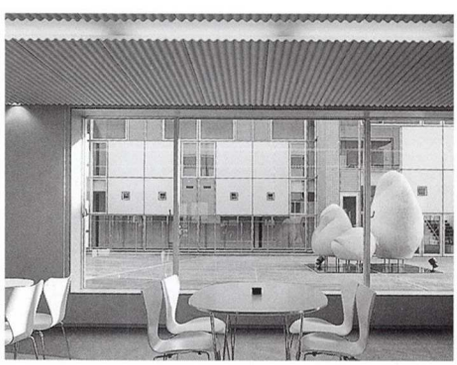


河辺　晴重

1965　富山県生まれ
1991　福井大学大学院修士課程修了

主な作品
「豊田自動織機組合会館」
「豊田自動織機蓼科保養所」
「K・MIX本社ビル」等

K・MIX本社ビル



永岡　久　　瀬戸竹親寮

1966　神奈川県生まれ
1991　法政大学大学院修士課程修了
主な作品　「竹中土木瀬戸竹親寮」「竹中工務店八事家族寮・竹友寮」「安城オートギャラリー」等

プルな「システム」のアウトプットを企図する本井氏。こうした主張のいずれにおいてもモダニズムの批評的回収という意味では、それも「小さな物語」を「可能態」として提出すればよいとする主旨に照らせば異をはさむことは困難である。また、彼らは現代の閉塞感を逃れるために独我論的なスタンスをとるほど幼くもない。さらに、「目配りの行きとどいた端正」な実作による社会への十分すぎる貢献、組織や世代ギャップなどアポリアに陥りかねない議論も慎重に回避するなど、あらゆる側面に現実に生きる建築家としての「正しさ」が通底している。ここにこそ「可能態という問題群」をめぐる困難がある。

そうした中で、やや異なったアプローチをとっているのが森田氏と河辺氏であった。森田氏は、ユングが提出した世界像の解釈の援用を試みる。ユングは個人的経験を越えた人類に普遍的な無意識、つまり集合的無意識を元型（アーキタイプ）とした。彼はこの集合的無意識の上に子供の頃の原風景を重ねる。記憶の底に眠る原風景は、脱色できない異界である。彼はこの心象風景を創作と知覚との回路として提示する。その結果、光や闇、素材をはじめ、ルーバー一つをとっても過剰さが強調された空間が創出される。もちろん、異界への移送が私的な記憶に基づくものである限り、そこから普遍性への回路をどの様に切り開くのか、すなわち記憶そのものをいかに相対化しうるかが、一つの分かれ目となる様に思う。しかし、少なくとも森田氏は、「正しさ」を迂回する回路を手にしているのである。

また、河辺氏は、おのおののプロジェクトが必然的に内包する多様性をふまえながら、その具現化に対してシナリオを用意する。ここでのシナリオとは、プロジェクトをとりまとめていくイメージや秩序であり、これを彼は「幻想」として定位する。あくまで「幻想」でしかないイメージや秩序。「幻想」であるが故に、常にそれへの信頼と疑いが交差せざるを得ない。つまりこの「幻想」は、普遍性と個別性の共振する地平にあるがゆえに、普遍性への疑義、個別性への疑義により「正しさ」から逃れうるという回路を用意しているように思われる。

「回路」は小さなものでもよい。しかし、その「回路」が批評として成立し、他者との交通を可能にするには、連綿と形成されてきた「正しさ」が集積した世界――しかしこれは自らが紡ぎだしているものでもある――を揺り動かさねば「開かれた」ものとはなりえない。つまり、彼らが「大きな物語」として切り捨てた普遍性を疑いつつそれと共振することにより「正しさ」から脱することこそ必要ではないか。これこそ「可能態という問題群」が逆説的に示した可能性ではないだろうか。

（すえかね　しんご）



原田　哲夫　　HEP FIVE（撮影：東出清彦）

1961　大阪府生まれ
1986　京都大学大学院修士課程修了
主な作品　「アプローズタワー〔梅田コマ劇場・シアタードラマシティ〕」「阪急ファイブ1000Day Shop」「生田神社震災復興」「HEP FIVE」等



甲南大学18号館
カウンセリングセンター

増田　俊哉

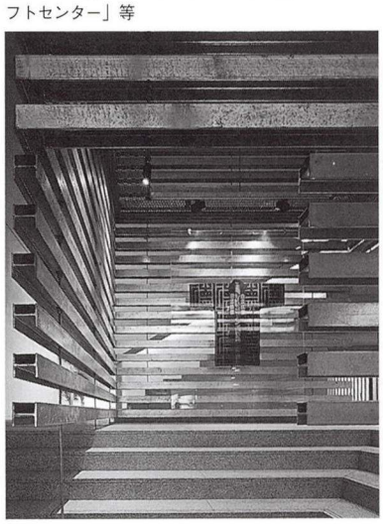
1960　京都府生まれ
1984　大阪大学大学院前期課程修了

主な作品
「東京ブラウス大阪店」
「ヴィラ・ラ・メール」
「甲南大学18号館・カウンセリングセンター」等



本井　和彦　　セイコーエプソン札幌ソフトセンター

1964　北海道生まれ
1988　北海道大学大学院修士課程修了
主な作品　「信廣寺本堂」「新日本海フェリー小樽研修所」「三星本社工場」「オーセントホテル小樽」「セイコーエプソン札幌ソフトセンター」等



三輪運輸本社ビル

森田　昌宏

1963　奈良県生まれ
1989　京都大学大学院修士課程修了

主な作品
「白洋ビル四条大宮」
「M邸」
「ユヴァスキュラM＆Aセンター」
「三輪運輸本社ビル」
「K邸」等

鉄 IRON

Morita Takashi
森田 隆 竹中工務店

機械

可能性としての「機械」

鉄は建築の分野において、長年使われ続けている馴染みの深い素材のひとつである。言い換えればその使われかたはある意味で画一化され、これ以上の新たな展開を望みにくいものであるかのように見える。しかし建築を離れて、その扱われかたを「機械」の分野を通して見てみると、まだまだわれわれが知らない鉄の魅力が数多く存在していることに気がつく。

このたび、大阪・梅田のHEP FIVEが施設の老朽化のため新しく建替えられた。この建物実現の過程で、私は動かないものが建築であるといった概念から離れることにより、鉄のあらたな魅力をいくつか目にすることができた。

大観覧車は1893年のシカゴ万博において、パリ万博のエッフェル塔をしのぐ見世物として、J.フェリスにより実現されたものであるが、今回のように都市空間の真っ只中に、建物に組み込まれた形で出現するのははじめてである。

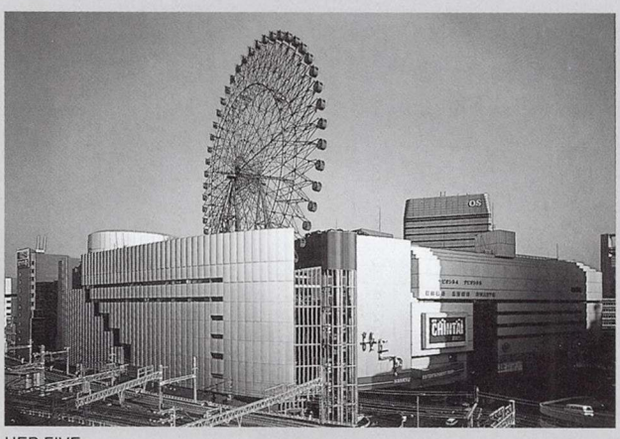
建物と一体化された観覧車は地上に建つものと比べるとその安全性の目標は高く、外力も大きくなるため、その構成部材の外形寸法は大きくなってしまう。このことは美観上の問題のみならず、かえって受風面の増大を招くこととなり構造上も好ましくない。ここでは建築の分野において通常使われることはないが、「機械」の分野では使われている板厚、あるいは鋼材を採用し、その接合には造船分野での溶接技術を採用することにより、部材の外形寸法を通常のものとかえることなく、この問題を解決している。

またコンピューターによる地震時の応答解析の結果、観覧車の乗籠が局所的に激しい揺れとなることが予想された。乗客が幅広い年齢層を対象としていることを考慮し、今回すべての乗籠の天井に地震時のエネルギーを吸収する制振装置を組み込んでいる。この「機械」装置により、地震のエネルギーを約半分に減らすことが可能である。「機械」という動くものの世界は建築にとっても実に興味深い、将来の可能性を持ったパートナーであるといえる。

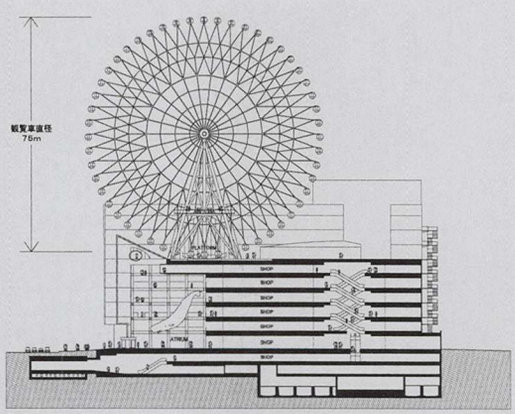


建築からの逸脱

今回の計画は、形の差異がひしめきあう都市空間の建築に観覧車という巨大な鉄の「機械」を強引に挿入するという強烈かつ単純きわまりない方法によって、建築は自己の存在を強くアピールし、従来の建築に対して圧倒的な差異をもたらすとともに、近年その速度を加速しつつある、商業建築の形の差異という概念からの脱却をめざすことを意図したものである。21世紀の建築は、過去において一線を画した「機械」とのクロスオーバーにより現代のわれわれの予想をはるか超えたところへ進んでいくのかも知れない。



HEP FIVE



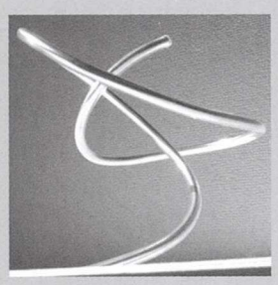
断面図

古の昔から、鉄は様々な場面で用いられてきた。今回、鉄の新たな可能性を探る上で、異なる要素の導入を図る。閉塞感すらある建築鉄骨から、何を見いだすことができるかを考えてみたい。

（素材と技術が生み出すdesign幹事会）

わざ

デザイン・構造研究所　Ouji Masashi 大氏 正嗣



可能性としての「わざ」

世の中には鉄を用いた数多くの建築や構造物が存在する。高価な鉄であったからこそ、その経済的合理性の追求は他の素材以上に深化した。しかし、こうして積み上げられてきた技術が、時として目に見えない足枷となる。

鉄は高強度の材料であるが故に、最大の応力を負担するように用いられる。あるいは、負担すべき応力の応じた断面が選択される。すなわち、重力と地震という不可避条件に対して最も合理的な解答を得る。しかし、それが鉄を使う全ての方法ではない。

N-projectは小さな水門の操作室上屋である。単純な曲率を持つ4枚の鉄板により、構造体を構成している。同時に、構造体は建築そのものでもある。この外壁兼構造体である鉄板を曲げることで、平板や軸鉄骨とは全く異なる性能を有した建築に変容する。

しかし、曲げる、しかも3次元曲げではない。ただそれだけのことが、通常の建築鉄骨を扱う鉄工所では困難となる。溶接に関して言えば、外壁として使用する鉄板の溶接部分が雨水を侵入させないことすらも保証できるとは限らない。

ところが造船所では、こうした加工が特殊な作業ではない。同じように鉄を扱う両者の間には、単純ではあるが決定的な違いがあるようだ。「わざ」の有無が。もちろん、その差は社会的必要性の有無によるのであろう。ただ、その「わざ」が私たちに何かを見せてくれるのではないかと期待させる。

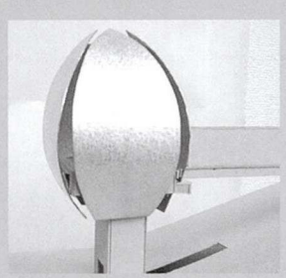
詳しくは触れないが、I-project、I_2-projectは彫刻である。それを実現するにも、数多くの「わざ」が必要とされる。

技能と創造

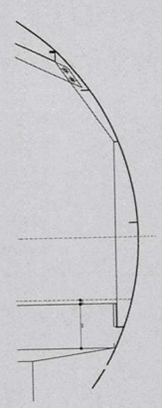
新たな創作には、技術だけではなく「わざ」が必要とされる。曲げる、加工する、組み合わせる。その他、数多くの分野にわたる様々な「わざ」。文献を読んで身に付くものではない。「わざ」は技能と読み替えることができる。

例えば、高度な解析技術はこれまで成し得なかった建築を成立させた…かのように私たちは感じている。それなしには、認識の困難な構造形態があるのは事実である。ただ、解析技術は構造体を成立させるための主たる条件ではない。設計は、解析装置を的確に操作判断する能力があってこそ成立する。その能力は設計者の技能に違いない。

造形物を創作するのが個人としての人間である限り、そこには誰にも伝えきれない技能が存在する。そして、あらゆる分野の技能を組み合わせていくことで、新たな創作が演出できるのかも知れない。

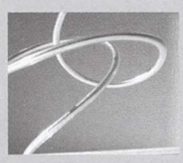


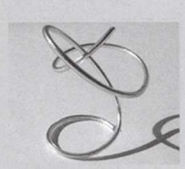
N-project





I-project





I_2-project

交通バリアフリー法

木村満治
大阪府建築都市部建築指導課福祉タウン推進グループ統括主査

わが国においては、諸外国に例を見ないほど急速に高齢化が進展しており、2015年には国民の４人に１人が65歳以上の高齢者となる本格的な高齢社会を迎える。

また、近年、「ノーマライゼーション」の理念の社会への浸透が進み、高齢者、障害者等の自立した日常生活及び社会生活の確保の必要性が増大してきており、高齢者、障害者等の公共交通機関を利用した移動の利便性及び安全性の向上が急務となっている。

このような現状に対し、運輸省・建設省、国家公安委員会及び自治省は、「高齢者、身体障害者等の公共交通機関を利用した移動の円滑化の促進に関する法律（交通バリアフリー法）」を第147回国会に提出し、平成12年５月10日に成立、同月17日公布し、また、平成12年11月15日から施行された。

交通バリアフリー法の概要

１．趣旨

高齢者、身体障害者等の公共交通機関を利用した移動の利便性及び安全性の向上を促進するため、

１）駅、バスターミナル、旅客船ターミナル、航空旅客ターミナル、あるいは鉄道車両、バス、旅客船、航空機などのバリアフリー化を推進する。

２）駅などの旅客施設を中心とした一定の地区において、市町村が作成する基本構想に基づいて、旅客施設、周辺の道路、駅前広場、信号機のバリアフリー化を重点的かつ一体的に推進する。

２．基本的な仕組み（図参照）

基本方針

１．バリアフリー化の意義

- 高齢者、身体障害者等が自立した日常生活、社会生活を営むことができる社会を実現する。
- すべての利用者に利用しやすい施設・設備の整備の推進。
- 移動円滑化を進めるに当たっては、高齢者、身体障害者等の意見の反映が重要。

２．バリアフリー化の目標

■旅客施設

2010年までに、１日当たりの平均的な利用者の数が5,000人以上の鉄軌道駅、バスターミナル、旅客船ターミナル及び航空旅客ターミナルについて、①段差の解消②視覚障害者誘導用ブロックの整備③身体障害者用のトイレの設置、等のバリアフリー化を実施する。

■車両等

2010年までに車両のバリアフリー化を達成する。（バリアフリー化される車両等の数については省略）

■一般交通用施設

重点整備地区の主要な特定経路を構成する道路、駅前広場、通路等について、原則として2010年までにバリアフリー化を実施する。

■信号機等

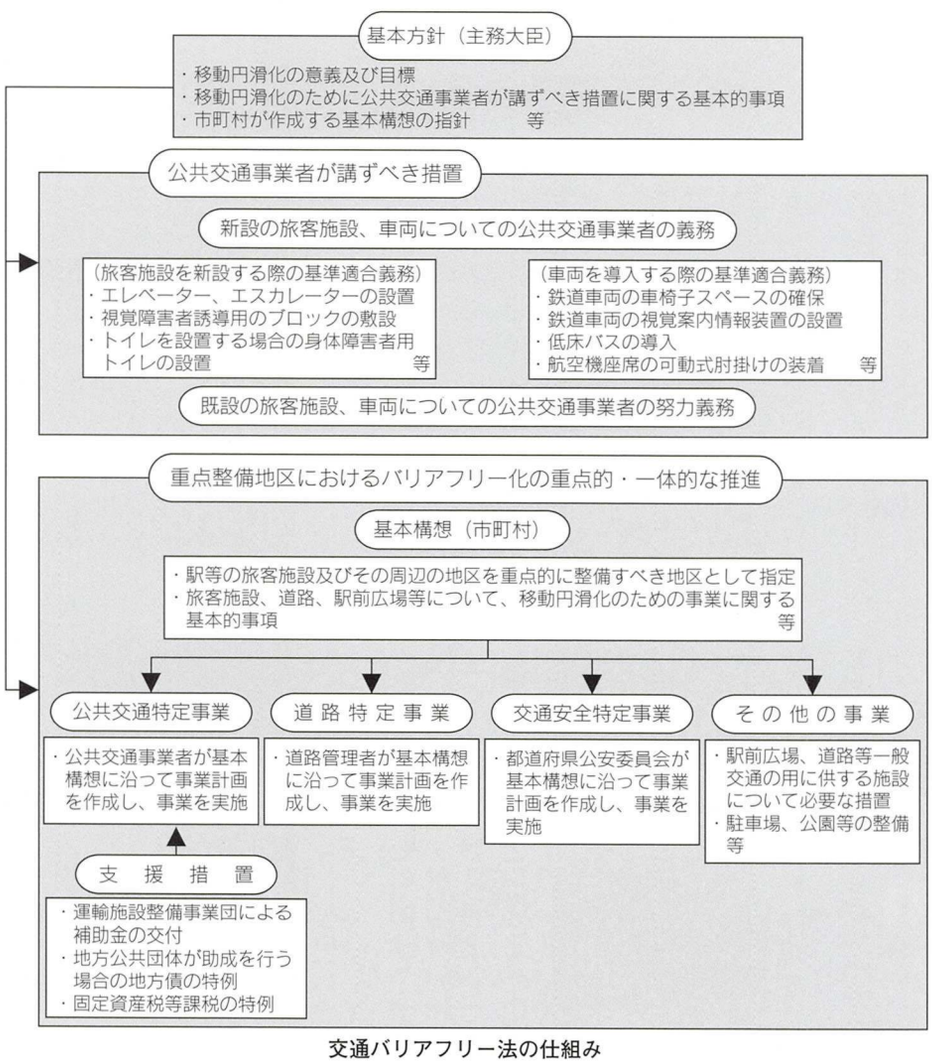
2010年までに、音響信号機、高齢者等感応信号機等の信号機の設置、歩行者用道路であることを表示する道路標識の設置、横断標示の設置等のバリアフリー化を原則としてすべての特定経路を構成する道路において実施する。

３．道路事業者等が講ずべき措置

- 旅客施設のバリアフリー化（出入り口からすべての乗降場に至るまでの移動円滑化された経路を確保することが重要）。
- 案内情報の適切な提供（視覚情報、聴覚情報により情報を分かりやすく適切に提供することが重要）。
- 職員に対する教育訓練（研修、マニュアルの整備等による職員教育の一層の充実が重要）。

４．基本構想の指針

- 重点整備地区におけるバリアフリー化事業の重点的・一体的な推進の重要性及び地区の設定要件。
- 市町村が主体の基本構想作成に関係



交通バリアフリー法の仕組み

者が積極的に協力することによる事業の効果的推進。
• 高齢者・身体障害者等の参画による意見の反映。
• 目標の明確化、事業の連携と集中実施、既存計画等との調和の必要性。
• 基本構想に記載する特定事業に関する事項。

5．バリアフリー化のための国及び地方公共団体が講ずべき措置

• 設備投資等に対する支援、調査及び研究開発の促進。
• 移動円滑化の状況に関する情報を利用しやすい形で提供。
• 心のバリアフリーの重要性から、国民の理解を深めるための啓発、教育活動。

6．バリアフリー化のための国民の協力

• 高齢者・身体障害者等に対する理解を深めるとともに、手助け等積極的な協力。

移動円滑化基準の概要

1．公共交通機関

公共交通事業者が駅などの旅客施設を新設・大改造する際や車両を新たに導入する際に適合を義務付ける基準である。また、既存の旅客施設や車両等についても移動円滑化基準への適合について努力義務が課せられる。

■旅客施設

1）鉄軌道駅

① 駅の出入り口からプラットホームへ通ずる経路について、エレベーター及びスロープにより高低差を解消する。

② 車いすが通るための幅を確保する。

• 1以上の出入り口の幅は、80cm以上。ただし、公共通路へ直接通ずる出入り口の幅は、90cm以上。

• 1以上の通路幅は車いすが回転できる140cmとする。

③ プラットホームと鉄軌道車両とは、できる限り平らにする。また、プラットホームと鉄軌道車両の床面との間隔はできる限り小さくする。隙間や段差により車いす使用者の円滑な乗降に支障がある時は、乗降設備を1以上備える。

④ プラットホームにホームドア、可動式ホームさく、点状ブロックその他視覚障害者の転落防止の設備を設ける。

⑤ エレベーター、エスカレーター、トイレ、券売機等は高齢者、身体障害者等の円滑な利用に適した構造とする。

• エレベーターは140×135cm以上の大きさとする。

• エレベーターの昇降方向、到着階及び出入り口の閉鎖について音声で案内する。

⑥ 視覚情報及び聴覚情報を提供する設備を備える。

• 出入り口からプラットホームまでの誘導用ブロックや階段、スロープ、エレベーターの上下に点状ブロックを敷設する。

• トイレの男女の別と内部の構造を点字で示す。

⑦ 階段の両側に手すりを設置する。

2）バスターミナル等についても鉄軌道駅に準ずる基準。

■車両等(省略)

2．道路

道路管理者が歩道、道路用エレベーター等の設置、歩道の段差・傾斜・勾配の改善等の移動円滑化のために必要な事業を実施する際に適合を義務付ける基準である。

1）高齢者、身体障害者等が通常利用する経路を構成する道路には、歩道を設置し、自動車と分離した歩行空間を確保する。

2）歩道

① 車いす使用者のすれ違いを可能にするため、2m以上の幅員を連続して確保する。

② 車両を乗り入れさせるために歩道を切り下げる場合であっても、幅員2m以上の平坦部を連続して確保する。

③ 視覚障害者の安全な通行を確保するため、高さ15cmを標準とする縁石により区画する。

④ 歩道面の高さは5cmを標準とし、必要に応じて植樹帯、並木またはさくを設置する。

⑤ 舗装は、原則として、透水性舗装とする。

⑥ 勾配は、原則として、縦断方向について5%以下、横断方向について1%以下とする。

⑦ 歩道が横断歩道に接続する歩車道境界部の段差は、2cmを標準とする。

3）案内施設

① 主要な交差点等は、病院等の主要施設、エレベーター等の移動支援施設等を標識や視覚障害者誘導ブロックで案内する。

② 上記の案内には、必要に応じて点字または音声等により案内する設備を設ける。

4）立体横断施設

① 垂直方向の移動のため、立体横断施設の設置に配慮する。

② 経路上の立体横断施設には、原則として道路用エレベーターを設置する。

5）その他

① バス停、路面電車停車所、自動車駐車場等は、移動円滑化に必要な構造とする。

3．信号機等

都道府県公安委員会が必要な信号機、道路標識等の交通安全特定事業を実施する際に適合を義務付けられる基準である。

① 信号機は、音響機能や歩行者用青時間延長機能を整備する等により道路の横断の安全を確保するための措置を講ずる。

② 道路標識、道路表示は見やすく分かりやすいものとする。

大阪府の取り組み

大阪府では、交通バリアフリー法に基づき府内の鉄道駅及び重点整備地区などにおける福祉整備を図るため、庁内関係課による「大阪府福祉のまちづくり重点整備地区推進連絡会議」を設置し、市町村の重点整備地区における取り組みについての支援・助言を行っていくとともに、高齢者、身体障害者等の意見を反映しながら福祉のまちづくりの進捗を図っていきたい。

（きむら　みつじ）

ユニバーサル・スタジオ・ジャパン™の構造エンジニアリング

村上陸太
㈱竹中工務店大阪本店設計部

「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン™」は、アメリカのハリウッドとフロリダにある映画を題材にした体験型テーマパーク「ユニバーサル・スタジオ®」を、大阪市此花区の臨海地域に実現するものである。パーク内には、それぞれのテーマに基づいた18のアトラクション施設と多くの物販・飲食施設があり、本場アメリカでのスケールそのままに、また、日本にしかないアトラクションを加えて、2001年春のオープンを予定している。

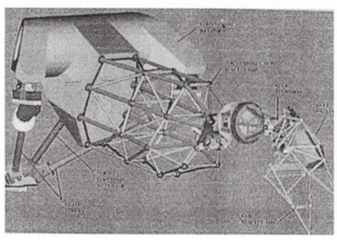
USIの概念設計とGCの実施設計

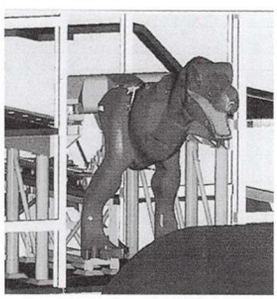
本パークの概念設計（企画・コンセプト・アート・運営ノウハウ等）は、アメリカのユニバーサル・スタジオ社（以下USI）により提供され、日本のゼネコンチーム（以下GC）で、そのコンセプト・機能を満足させながら日本法規に適合させ、生産性・耐久性・メンテナンス性をバランスよく設計・施工することを要求され受注した。GCは、全38社で構成され、大きく第１工区（大林G13社）、第２工区（鹿島G12社）、私の所属する第３工区（竹中G13社）に分かれている。

具体的には、パーク内の建築物をUSIのコンセプトに合わせて実施設計を行うとともに、USIからGCに供給されるテーマパーク独特の特殊な動きを伴うライド（ゲストが乗って楽しむ構造物）やフィギュア（サメや恐竜などの動く人形）などの構造物本体を日本法規に適合させるとともに、安全な支持構造物を設計すること、USIから供給されない巨大なサメ・恐竜の骨・大看板のような特殊工作物、あるいは、テーマ性を持つ擬岩や人工池のような特殊土木構造物を設計すること、これらがGC設計チームの業務となった。

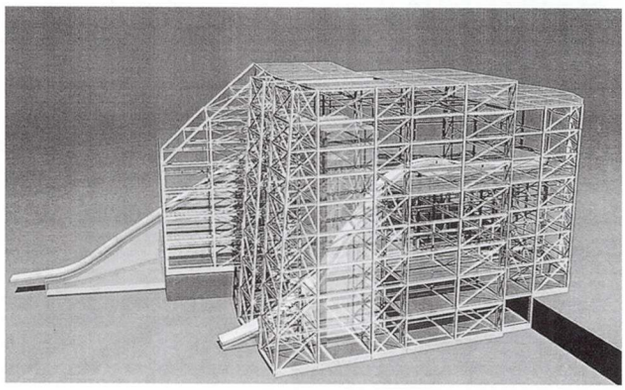
この設計対応のため、1997年の夏から秋にかけてGC設計チームはアメリカに滞在し、USIから概念設計の説明を受けるとともに、ハリウッドやフロリダにある本場のユニバーサル・スタジオを体感し、自分たちの設計するパークの設計条件の確認を行った。

JURASSIC PARK-THE RIDE™





T-REX IN SUPPORT TOWER



この確認作業により、日本国内にあるような遊園地の大規模なものを建設するくらいに考えていたGC設計チームは、自分たちの考えの甘さを痛感させられた。

第一に、ライドやフィギュア等の動きがリアルで激しく、その設計荷重条件や要求される構造体が複雑で、USI－GCの打ち合わせ確認を行う必要があること、第二に、建築物や特殊工作物の設計に際しても、アメリカ映画の世界を体験するというコンセプトを実現し、かつ機能的にも強度的にも安全に建設するためには、使用材料や構造法の選択が難しく、USIのデザイナーと、図面やサンプル・試験施工での確認を行う必要があること、が判明した。

そして、1997年秋以降、GC設計チームが帰国、今度はUSI担当者が来日し、前述のようなUSI－GCの設計確認作業を毎日のように行い設計を進めていくことになった。この作業は、設計期間だけでなく、1998年10月工事着工してから現在までも継続して行いつづけている。

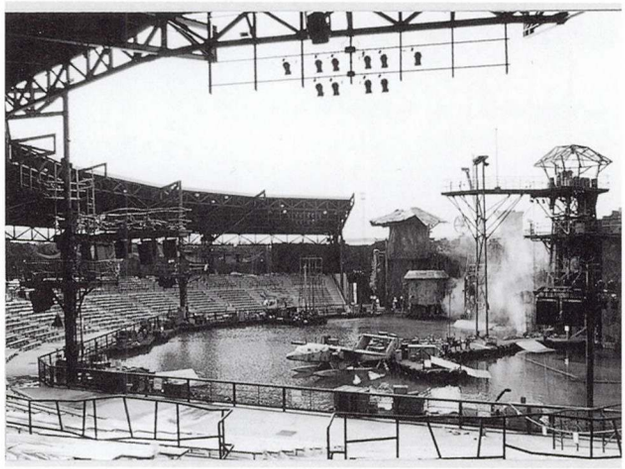
構造エンジニアリング対応

以下に、第３工区のいくつかのアトラクションを紹介しながら、そこでの構造対応（苦闘？）を、具体例で示していきたいと思う。

● JURASSIC PARK－THE RIDE™：襲い掛かるT-REXの構造設計

JURASSIC PARK－THE RIDEは、日本でも公開された人気映画の恐竜の世界を体験し、最後にウォーターシュートで急角度で落下するというアトラクションである。詳細な内容はオープン後体験していただく方がいいと思うが、構造設計上は、ライドの急激な落下に対する安全性確保という重要な課題と並んで、最後にゲストに襲い掛かるT－REX（恐竜のフィギュアの一種、体重約10 t）の激しい動きを解析し、建物や支持構造物の設計に反映することが難題であった。このT－REX本体はUSIから提供され、本体の設計と支持構造物の設計を並行して行う必要があった。構造設計上、荷重条件の設定

WATER WORLD™





及びアメリカから支給される部分と日本側で供給する部分をどうするかが重要な課題となった。荷重条件としては、通常運転時・機器暴走時を想定し、USIの仕様書・本体の設計値・日本の類似例等を参考に、暴走時荷重を3.0Gと設定することとした。取合部分は、T−REX搬入後施工できるように構造計画し、本体の設計に柔軟に対応できるようにした。

●WATER WORLD™：荒廃した近未来の世界の実現

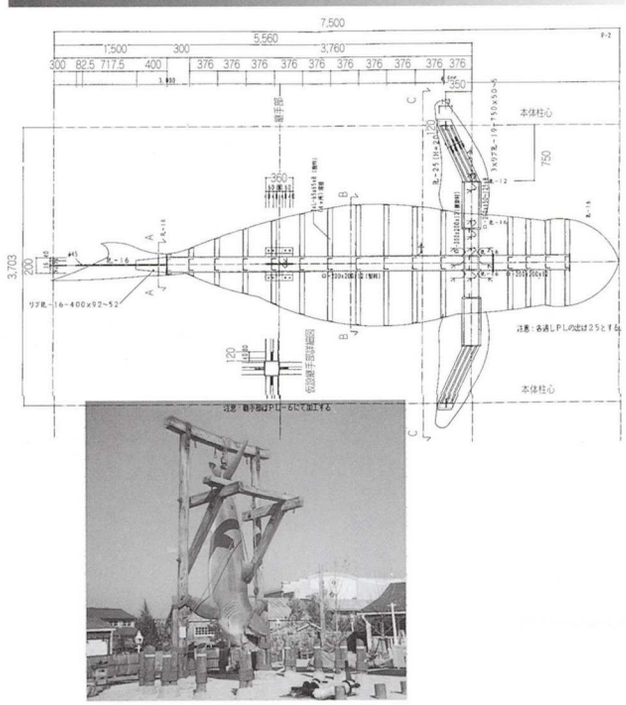
WATER WORLDは、核戦争後に全世界が水没した後の時代を想定したアクションショーを楽しむアトラクションである。その世界での構造物は、海底から拾ってきたようなクズ鉄等を材料とし、さびだらけで今にも壊れそうに構築しなければならなかったが、激しいアクションを行うため、大きな外力が加わる構造物が多く、強度的な要求条件が厳しかった。このため、耐火被覆をなくす＝FR鋼、ゲストの目線の柱を細く＝鋼管コンクリート構造、ショーセットの吊り材を細く＝高張力鋼、というように、要求条件に合わせた構造材料を採用し、荒廃した近未来の世界を実現させた。

●JAWS™：つり下げられた人食いザメの構造設計

JAWSも人気映画の一つであり、船に乗って人食いザメに襲われつづけるというアトラクションである。このアトラクションにも前述のT−REXのような激しい動きをする人食いザメのフィギュア類が多く存在し、その構造設計対応もT−REX同様難題であったが、このJAWSで構造設計上最も苦心したのが、捕獲されてつり下げられたサメの構造設計であった。

フロリダの写真等のUSIから供給されたコンセプトをもとに、構造チーム内で、構造形式・サメの骨組の材料・支持方法、安全率等ディスカッションした。そして、サメをつり下げる丸太フレームを含め鉄骨で骨組を構成、サメ本体は3点で支持し、安全率については、ゲストがサメの口に頭を突っ込むことを考慮して10倍確保する設計とした。

JAWS™





●特殊な土木構造物：擬岩（ロックワーク）の構造設計

パーク内には、ほかにも多くのアトラクションがあり、それぞれ特殊な設計対応が必要であったが、これらの対応だけではなく、エリアのコンセプト実現のために配置される岩山や池あるいは、木造・石造のような建物、これらの特殊な工作物についても多くの設計要求が存在した。

これらを、デザイン・機能・安全上満足させるよう設計するため、本物の岩・石・丸太を使用せず、鉄骨、鉄筋、モルタル（コンクリート）等の材料を使用し、その上に特殊仕上げを施すこととした。その中でも擬岩（ロックワーク）は、規模も大きく、スピーカーや照明あるいは人工滝のシステムを内蔵させる必要があったため、設計及びUSIとの確認に多くの時間を必要とした。そこで、リアルにUSIの要求する擬岩を構築するため、最初にUSIのコンセプト模型の三次元スキャンニングを実施し、そのデータを使って構造計画・設計、施工図作成を進めていくとともに、柔軟な造形対応のための二次ロックワークフレーム構法や、防水部分や上げ裏部分の落下防止のために特殊引張筋構法、等を提案実施し、造形上・機能上の要求を満足させることができた。

春のオープンを前に

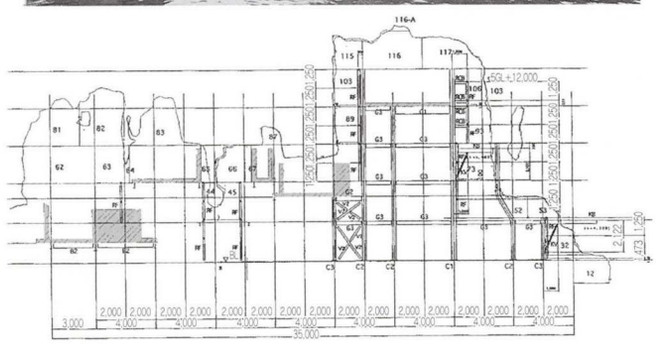
現在、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンは、その外観を着々と完成させ、ライドやフィギュア等の検査も順調に消化してきている。前述の対応により完成したパーク内構造物は、USIに十分満足していただいていると思う。

われわれGC設計チームは当プロジェクトに参加できたことを誇りに思うとともに、アメリカ＝USIのコンセプトを、日本のエンジニアリング力で実現させた本パークを訪れるゲストが、必ずやアメリカ映画の世界を満喫し、各アトラクションの大迫力を体感し、満足していただけると確信している。

（むらかみ　りくた）

擬岩（ロックワーク）





大便器のバリアフリー化への対応

太田吉喜
東陶機器㈱衛陶機器開発部

「大便器自動洗浄システム」とは、排便時に使用者を検知し、使用者が立ち去った後自動的に汚物を洗浄する大便器システムのことである（図1）。近年、大便器自動洗浄システムを採用いただくケースが増えている（図2）。主として近年の高齢化や身体的な障害者に対するバリアフリー化が背景となり、老人保健施設，病院、商業施設など様々な公共施設で採用されている。新築のみならず、改修で採用されるケースも多く、バリアフリー化に対する配慮が着実に進んでいることがうかがえる。



図1　従来の大便器自動洗浄システム

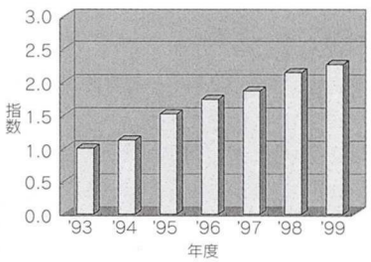


図2　大便器自動洗浄システムの出荷推移（'93年度を1とする）

一方、老人保健施設などでは設備、構造などハード面のみならず、例えば、療養室の床にもフローリングを使用する、居室やロビーの壁などに従来のような無機色ではなく暖かみのある色調や素材を使用するというソフト面の配慮がされてきている。

この状況下、より使用者や介護者の立場に立って、大便器自動洗浄システム仕様再検討を行うことにした。なお、このシステムは、パブリックトイレ（学校、オフィス、商業施設の一般トイレ）に採用されていることもあり、併せて仕様検討を行った。検討するにあたって老人保健施設、特別養護老人ホーム、病院などのケアマネジャーや施設長の意見及び商業施設（デパート等）の管理者に意見をうかがうことにより改善点を見出し、またトイレ空間の中の一設備である大便器がどうあるべきかデザインを含めて見直すこととした。

老人保健施設などへのヒヤリングによると、大便器自動洗浄システム採用のメリットは、やはり「流し忘れがない」「操作ボタンが大きく、操作力も軽い」という使い勝手の面であった。また、求められる大まかなキーワードは介護者まで含めた使い勝手、視認性、けが防止、静音、トイレ全体としての雰囲気及び節水である。

結果として、信号装置、洗浄弁、大便器とばらばらであった自動洗浄システムを便器と一体にした「自動洗浄大便器」の開発に至った（図3、4）。



図3　自動洗浄大便器外観



図4　自動洗浄大便器内部構造

ハード面の対応

(1) 使い勝手の向上

①人体を検知すると洗浄操作ボタンが点灯し、目の不自由な方にも配慮した（図5）。通常は自動洗浄であるが、意思を持って洗浄したいという方も多い。その場合でも人体検知した時点（便器に接近した時点）で洗浄ボタン外周部が緑色点灯するようにした。なお、洗浄操作力はマウス感覚の軽いレベルとした。

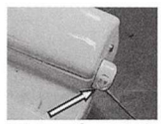


図5　光る洗浄ボタン

②手かざし式（触れても洗浄可能）とすることで、手先の震える方も操作ができるようにし、表示も大きくし、視認性に配慮した（図6）。また、介護者が洗浄操作をしやすく、使用者の使いやすい位置に設置できるよう、リモコンは2個接続可能とした。（トイレの外からの洗浄も可能となる）



図6　リモコン

③老人保健施設などの痴呆棟では、おむつパッドなどを流し、便器詰まりを起こすことが少なくない。このような場所では自動洗浄は通常「OFF」の方が良く、その要望が多かった。

④老人などは排便中に上体がぶれることが多く、その場合、従来は人体センサーが壁に設置してあるため、検知が外れ誤洗浄することがあり、不安感につながることも考えられる。また、便器側面に手すりが設置されることが多く、その場合人体センサーの設置位置の設定が面倒という難点もあった。したがって、センサー部を便器の適切な場所に設置することで、それらの解消を図った。

(2) 静音化　フラッシュバルブ式便器を使いたいが、洗浄音が大きいため、ロータンク式を採用するという意見があった。本システムでは、従来のフラッシュバルブに対して大幅に瞬間流量を低減（約100 *l*/min→20 *l*/min）したことによって、洗浄音をロータンク式大便器並み（68dB）にした。

(3) 節水化　当社の代表的なフラッシュバルブ式便器（C48）と比較して、洗浄水量は半減する。自動的に大小洗浄判別を行い、大洗浄約8 *l*，小洗浄約6 *l*の水量である。

ソフト面の対応

(1) デザイン・外観面　人体センサー、駆動部など従来は壁に露出していた部分を便器に内蔵あるいは付属させることにより、トイレブース内をシンプルにまとめられるようにした。また、従来、便器外周部は凸凹していたが、便器はかま部を全周に回し、便器自体のスッキリ感及び柔らかいイメージを出した。

(2) 配管・電気配線の隠蔽　上記に加えて、従来便器側面や上面から張り出していた給水管・止水栓、また電気駆動部から露出していた電気配線を便器の背面や内部に隠蔽することにより、身体的に不自由な方のけが防止や安心感向上、およびスッキリ感を出した。

試作品でデータを取る

2000年6月から、試作品を老人保健施設ほかに約10台設置している。使用する中で「節水になる」「外観がすっきりして安心感がある」など、狙いの仕様どおりの意見をいただいている。逐次、オフィスなどにも設置しており、節水効果、使い勝手などの定量的データを蓄積し、今後の更なる商品改良の糧としていく予定である。

なお、本題とは関係ないが、信号装置・洗浄弁などを大便器と一体にしたことで、施工性の向上も特徴の一つとして挙げられる。

（おおた　よしき）

屋外・屋内仕様レーザー墨出し器

尾崎浩雅
大昭和精機㈱ＦＡ事業部

はじめに

今日、建築現場での内装、電設、空調等の作業において墨出し作業にレーザー墨出し器が利用されるようになってきた。それにともない、レーザー光の放射パターンの多機能化・操作方法の簡素化・低価格化と多種多様のレーザー墨出し器が製造・販売されてきている。しかし大半のレーザー墨出し器が屋内仕様と限定されており、屋外においても墨出し作業が、誰でも簡単に敏速かつ正確に行われるように当社にて屋内・屋外兼用のレーザー墨出し器の展開を図ってきた。それにより開発された屋外・屋内兼用レーザー墨出し器『LMX−300／400』（**写真１**）を紹介する。

LMX−300／400の基本性能

通常のレーザー光（**図１**）は一定の連続した電流により安定した強さの光が照射され、屋内では明るくはっきり見えるが、屋外では太陽光の影響によりレーザー光はほとんど見えない。そこで屋外仕様の場合レーザー光に変調した電流を流す事により連続しないパルス状のレーザー光（**図２**）となり、このパルス状のレーザー光は屋外や明るい場所では見えないために専用のレーザーレシーバー：LR−201（**写真２**）で受光を行う。

レーザーレシーバーには２ヶ所の受光素子が設けられており、受光位置はパルス状のレーザー光が２ヶ所の受光素子を跨ぐ位置であり、受光時はブザーとランプの点灯により確認する事ができる。また当社のレーザーレシーバーは墨出し位置のマーキング位置と受光面が同一面であるために受光角度が多少ずれた場合（±５°以下）でも、墨出し位置を正確にマーキングする事ができる。（**図３・図４**）また１台のレーザーレシーバーでたちライン・水平（ろく）ラインが受光する事ができ、受光距離は最大20ｍまで可能である。屋外・屋内の仕様切替えは、本体底部のIN DOOR／OUT DOORの切替えスイッチ（**写真３**）により瞬時に行う事ができる。

レーザー光の放射パターンとしておおがね・両ヅラ・天井一面ライン・床墨・通り芯・地墨・水平ラインの全て（**図５・図６**）を凝縮し地墨点には、レーザー光を採用し屋外でも地墨点を確実に確認する事ができる。

LMX−300／400の数々の機能

①ジャイロ機構によりレーザー光の照射部分のユニット部を常に垂直に保ち地墨点における鉛直点や水平（ろく）ラインやたちラインを高精度に維持する。

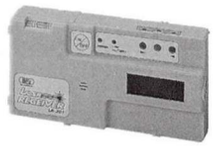
②レーザー墨出し器を床に置いた場合や三脚に取付けた場合に、レーザー照射部が360°回転するために足場の悪い場所でもレーザー光を必要な方向に向ける事ができ、特に水平（ろく）ラインの使用時に有効である。

③レーザー墨出し器どの位置でも回転のロック機構無しで微調整（±１°）を行う事でき、特にたちラインの使用時に本体を回転させ目的位置に照射し最終位置を微調整する際に便利である。

④ジャイロ機構で垂直に維持されない範囲まで傾いた場合に、正確にレーザー照射がされない事を防止するために傾きが範囲外の場合にレーザーが点滅し警告する。



写真１　LMX-400


写真２　LR-201

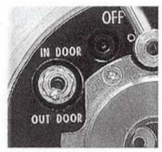


写真３　屋内・屋外切替えスイッチ

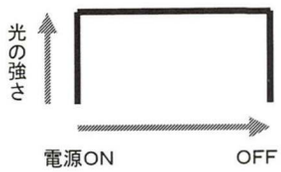


図１　通常のレーザー光

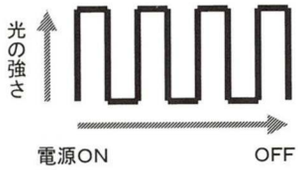


図２　パルス状のレーザー光

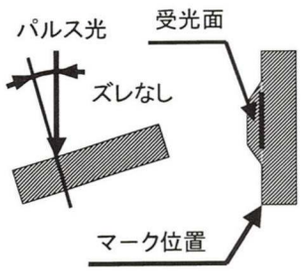


図３　当社のレーザーレシーバー

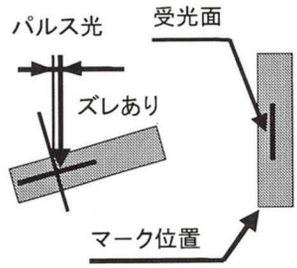


図４　既存のレーザーレシーバー

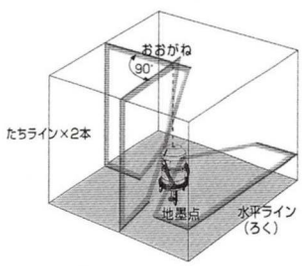


図５　LMX-300のレーザー光の放射

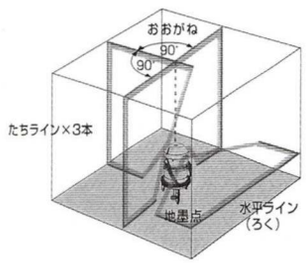


図６　LMX-400のレーザー光の放射

一般的な使用例

地墨点と天井十字点：柱の芯出しとしてよく使われる。基準となる地墨点にレーザー墨出し器の地墨ポイントを合わせる事により自動的に地墨点に対し天井十字点が照射される。

水平ライン使用時：スタッフやバカ棒に専用のレーザーレシーバーホルダ（LH−20）を介してレーザーレシーバーを取付け工事現場の水平レベル出し・床張り・天井レベル出し・窓枠取付け・腰墨（三脚使用時）等の墨出しに有効である。

おおがね使用時：部屋の間仕切り・柱の芯出し・窓枠取付け・タイル張り・照明器具等の墨出しに有効である。

（おざき　ひろつね）

大阪市の「建築物に付属する緑化施設表彰」「大阪市都市環境アメニティ表彰」

▶「建築物に付属する緑化施設表彰」

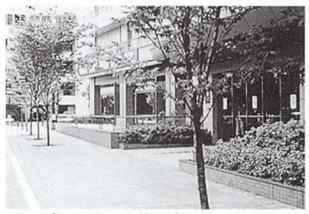
昭和45年度の新大ビル、関電病院、関電三国営業所、関電あび子営業所の表彰からスタートした。

表彰対象は、最近５ヵ年以内に大阪市内に設置され、設置後１年以上を経過した建築物に付属する緑化施設である。

個人の庭園、公共施設に付属するもの、利用が有料であるもの、一時的な設置は対象から外し、大阪市が選定した緑化施設、建築団体から推せんのあった緑化施設を、規模、公開性、調和、維持管理、効果を審査基準に審査委員会で数点選考し、大阪市長が緑化施設の所有者または管理者及び設計者を表彰する。

平成13年度も、建築団体等に２月上旬までに推せん依頼をし、３月下旬に推せん締切、審査委員会を５月下旬～６月上旬、表彰式を６月下旬～７月上旬に予定。

平成12年度第31回表彰の緑化施設を右に掲げる。



ガーデンシティ西梅田（ハートンホテル）
北区梅田３－３－55



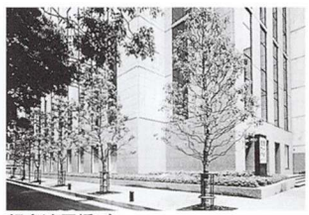
ガーデンシティ西梅田（大和ハウス大阪ビル）
北区梅田３－３－５



ガーデンシティ西梅田（大阪モード学園・コンピュータ総合学園HAL）
北区梅田３－３－１外



プラネスーペリア与力町
北区与力町３－１



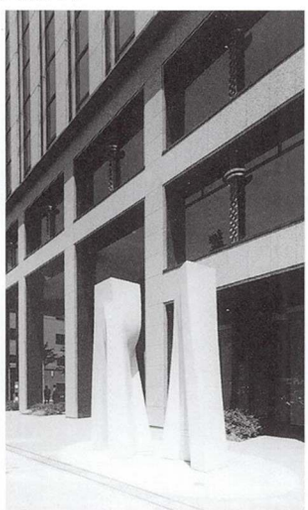
銀泉淀屋橋ビル
中央区今橋４－５－15



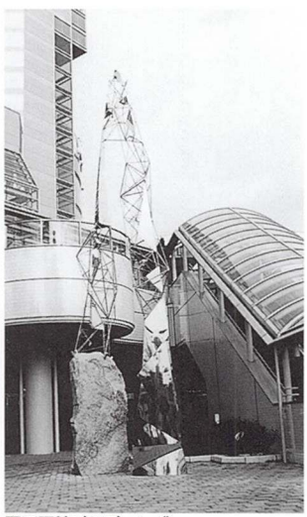
安田生命大阪アカデミア
住之江区南港北１－３－５



新阪神ビルディング・西阪神ビルディング解体工事
北区梅田２－２－25他



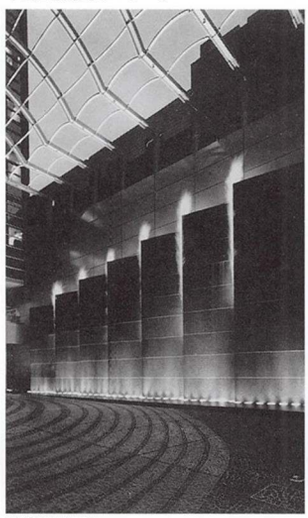
NMプラザ御堂筋
中央区淡路町３－６－３



野田阪神ビルディング
福島区海老江１－１－23



HEP FIVE
北区角田町５－15



YES NAMBA
中央区難波千日前12－７



阪神野田センタービルディング
福島区海老江１－１－31

◀「大阪市都市環境アメニティ表彰」

平成２年度から始まった大阪市の表彰で、モニュメント表彰と工事用仮設塀絵画等表彰の２部門がある。

①大阪市内に最近10年以内に設置され設置後１年以上を経過したもののうち、主として屋外に設置され、市民が容易に観賞できる作品を対象とするモニュメント部門、②大阪市内の公共施設工事外の工事用仮設塀に描かれた絵画等で、表彰当日に現存する作品を対象とする部門の、平成12年度表彰作品を左に掲げる。

平成13年度は９月中旬に推せんを締め切り、11月下旬～12月上旬に表彰する予定。



ラグザ大阪（阪神杉村ビルディング、ラグザ大阪・レジデンス）
福島区福島５－６－16他



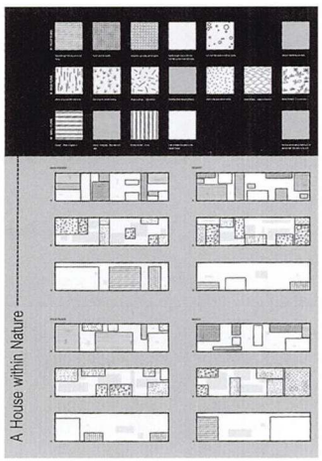
ベイシティ大阪
港区池島３－５－１



ラグザ大阪（阪神杉村ビルディング、ラグザ大阪・レジデンス）
福島区福島５－６－16他

タキロン国際デザインコンペ入賞

12回目の「タキロン・国際デザインコンペティション」（主催：タキロン㈱）は、審査員に隈研吾氏（建築家）を迎えて課題【自然のなかの家】のもとに実施された。応募作品数は696点（海外91点）にのぼり、審査を昨年12月４日に実施。入賞作品17点が決定した。



1等入賞作／Nantapon Junngurn氏(タイ)

なお、入賞作品の展示会は、２月26日～３月３日に日本建築学会建築会館展示コーナー（東京都港区芝５-26-20）で行われる予定。

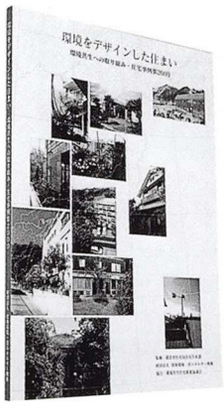
• １等（１点／賞金100万円）
Nantapon Junngurn（A.Dusitnanond Architect & Associates co., Ltd.）

• ２等（１点／賞金50万円）
八木崇（早稲田大学大学院）浦俊弥（工学院大学大学院）加古藤郁（東京理科大学大学院）飯島郭義（早稲田大学大学院）中楯哲史（法政大学大学院）

環境共生住宅10周年を記念して

㈶建築環境・省エネルギー機構は、環境共生住宅の研究が始まってこの10年間に建設された、北海道から沖縄まで異なる地域性を生かし環境共生に取り組んだ住宅で、特徴的、代表的な69事例を集め、戸建て、団地等に分類し、まとめた。（A４判、144頁）

それぞれ代表的な環境技術は図面や写真により解説され、団地については、案内図や配置図が掲載され、現地見学に便利である。購読申込は、㈶建築環境・省エネルギー機構広報・業務部（TEL 03-3222-6687）へ。



定価／2500円（消費税含む）

本文内容
- 環境共生住宅市街地モデル事業17例
- 都市基盤整備公団の取り組み13例
- その両方に該当する事例６例
- 環境共生住宅認定制度による団地認定２例　ほか

堀口捨己展－ギャルリー・タイセイでー

建築家・堀口捨己（1895～1984）の業績を、初公開の資料を多数含めて、図面、写真、著書、模型、書簡などで展観しようとする展覧会が、２月13日から始まる。

堀口捨己は、1920年代に分離派の建築家、オランダの現代建築の紹介者としてスタートを切り、西欧近代建築を吸収し、モダニズムの建築家として活躍した。

1930年代以降、堀口は日本建築、茶室を深く理解した研究者として多くの論文を書く一方で、その成果を建築作品に反映させていく。第二次大戦後も日本建築の普遍性を取り入れた幅広い作品を作り続けたが、その丹精な作品は西欧近代と日本の伝統的建築表現を見事につなぐもので、多くの建築家に影響を与えている。

会期　2001年 2 月13日（火）～ 6 月15日（金）
第一部／２月13日～４月６日
第二部／４月16日～６月15日
10：00～17：00　土日祝日は休み　入場無料

会場　ギャルリー・タイセイ　TEL 03-5381-5510
東京都新宿区西新宿１　新宿センタービル17F

内容　• 第一部「堀口捨己の世界」
強い表現／色彩へのこだわり／環境工学的配慮、機能性／日本的なものの提唱／古典研究／茶の湯／文化人との交わり／著書の装幀／和歌。
作品ー平和博動力館、分離派建築会作品集、紫烟荘、徳川邸、岡田邸、大島測候所（写真と図面）、双鐘居内部写真、八勝館、美似居、常滑陶芸研究所、明治大学生田校舎など
• 第二部「堀口捨己の設計手法」
作品ー吉川邸、若狭邸、八勝館御幸の間（「堀口好み」、およびその形成の過程）、明治大学駿河台・和泉・生田校舎、かん居など

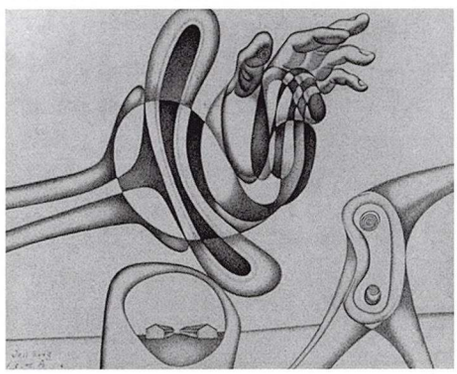
会場には、堀口設計の椅子やテーブルを展示し、肉声テープも流れる。

４カ月間の会期中、監修に当たった藤岡洋保氏（東京工業大学教授）のレクチャー、また複数の建築家・研究者によるミニシンポジウムを開催する予定。

阿部展也展～シュルレアリスムから幾何学的抽象へ～

JR東京駅舎内にある東京ステーションギャラリーでは、前衛芸術家として活躍した洋画家・阿部展也（のぶや）（1913～1971）の展覧会が開催される。

中学を中退後、独学で絵画を学んだ阿部展也は、1930年代には前衛美術グループに加わり、第二次世界大戦下、フィリピンの収容所で描いたデッサン《Jail Song》（1945年）で、焦燥しきった内面世界を幻想的に描き注目された。


《Jail Song》1945年　鉛筆・紙、18.0×23.0㎝、個人蔵

1950年代、インドや東欧の地で異文化に触れた阿部は、エンコースティック（蜜蝋画）の技法を用いたアンフォルメルな世界へと大きく作風を変え、1962年にローマへ移住後、《R》シリーズに代表される色彩も形態も明快な幾何学的抽象作品を精力的に発表した。

阿部展也の芸術の変遷を、油彩、エンコースティック、アクリル画、デッサン、版画、挿絵、写真など約180点でたどる。

会　期　2001年 2 月24日（土）～ 3 月25日（日）
毎週月曜日休館
平日10：00～19：00／土日10：00～18：00

会　場　東京ステーションギャラリー
（JR東京駅・赤煉瓦駅舎内）

入場料　一般800円、大高生600円、小中生400円

出品作　《Jail Song》《ADAM AND EVE No. 2》《花子》《作品O-ROMA》《R-30 1970-ROMA》など約180点

“ミュージアムグッズ人気コンテスト”

企業が開設しているミュージアムや公立博物館に関する情報を一元的に収集し、多くの人々にその情報を提供することを通じて、文化の振興、社会教育の推進、子供の健全育成を図ろうとNPO法人企業ミュージアムの協会（亀田訓生理事長）が設立されて２年目を迎えるに当たり、ミュージアムグッズベスト10のコンテストが実施される。応募は2001年４月15日まで。

Ⓐ企業ミュージアムショップの売れ行きなどから、企業館側が自薦する人気グッズ

Ⓑ企業ミュージアム訪問者推薦の話題のグッズ

方法　応募用紙・枚数・様式は自由。応募用紙に①応募者の住所・TEL・名前・年齢・職業②推薦するミュージアムのグッズの名称と販売価格③当該ミュージアムの名称④推薦理由⑤できればグッズ現品を添え、郵送or宅配便で下記へ。

〒565-0855　吹田市佐竹台3-8-3
特定非営利活動法人「企業ミュージアムの協会」
TEL・FAX 06-6872-0969（問い合わせ先）

日本建築協会

月間の動き

【平成12年12月分】

理事会

第１回臨時理事会
14日　４時30分～５時30分・於太閤園　オパールルーム
出席者　市川会長ほか47名（内委任状22名）
議　事（1）入退会者承認の件
（2）後援・協賛名義使用承認の件
（3）報告事項
（4）その他ー追加議案として「文化遺産としてのモダニズム建築」関西展の後援名義使用と実行委員会事務局設置の件ー
第２回総務担当理事会
４日　10時30分～11時45分・於本会会議室
出席者　市川会長ほか５名
議　事　変更定款の施行に伴う総会、理事会等の開催方法について

協会21世紀を考える委員会

第６回協会21世紀を考える委員会
13日　３時～４時45分・於本会会議室
出席者　金多委員長ほか５名
議　事　答申書の作成について

編集委員会

第９回編集委員会
６日　６時～７時30分・於本会会議室
出席者　宮田委員長ほか５名
議　事（1）１月号「エヌ・ティ・ティファシリティーズ」特集経過報告
（2）２月号「21世紀の建築設計教育」特集・「九州作品」経過報告
（3）３月号「東海支部」特集経過報告
（4）４月号「IT社会におけるきずな」特集報告
（5）会員企画小委員会関係報告
（6）１月号～12月号表紙改訂について
（7）収支状況報告
第９回広告企画小委員会
６日　５時～６時・於本会会議室
出席者　宮田委員長ほか７名
議　事（1）１月号「エヌ・ティ・ティファシリティーズ」特集広告経過報告
（2）２月号「21世紀の建築設計教育」特集・「九州作品」広告経過報告
（3）３月号「東海／岐阜・大垣一地方におけるIT産業振興の狙いと試み」特集広告経過報告
（4）作品作風関係報告
（5）独自特集企画
（6）収支状況報告
第８回法令分科会
12日　２時～５時15分・於本会会議室
出席者　椎名幹事ほか３名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）６月号法令特集の企画
第９回設備分科会
12日　６時30分～９時・於本会会議室
出席者　近藤幹事ほか３名
議　事（1）設備特集の企画
（2）新シリーズの企画
第９回作品作風小委員会
12日　７時～８時15分・於本会会議室
出席者　赤木副委員長ほか５名
議　事（1）作品の選定について
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定
（4）「Sketch Book」の掲載予定
第７回施工材料分科会
14日　５時～８時・於本会会議室
出席者　植田幹事ほか６名
議　事　特集「天然素材・自然素材」（５月号予定）企画

事業委員会

第６回若い会員の集い小委員会
６日　７時～８時30分・於本会会議室
出席者　杉本副委員長ほか１名
議　事　実施報告と今後の企画について

出版委員会

第８回出版委員会
21日　６時～６時30分・於大巳会議室
出席者　山田委員長ほか10名
議　事（1）〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
（2）今後のテーマと執筆者選定
（3）第24回〈プロのノウハウ〉講座の企画
第６回建築工事と式典小委員会
７日　６時～７時45分・於本会会議室
出席者　仲本小委員長ほか７名
議　事（1）建築工事と式典に関して
（2）今後の作業予定等について

教育委員会

第１回講習会小委員会
１日　６時～７時・於本会会議室
出席者　藤井副委員長ほか８名
議　事　本年度建築工事実務講習会の開催について
第２回工高生教育小委員会
15日　６時～７時・於本会会議室
出席者　和田副委員長ほか９名
議　事（1）本年度第46回工高生デザインコンクール実施報告
（2）次年度第47回工高生デザインコンクール募集規定の件ほか

見学会

第11回近代建築見学会
大阪市立愛珠幼稚園を訪ねる
15日　３時～４時30分・参加者25名

建築クラブ

第344回朝食会
12日　８時30分～10時・大阪全日空ホテル
演　題　「風土に生きる金沢の工芸」
講　師　小松暁一氏（金沢美術工芸大学名誉教授）
参加者　36名
建築関係団体合同忘年懇親会
14日　６時～７時30分・於太閤園　参加者　306名

入会者（敬称略）

［団体会員１社］　サンガレン㈱

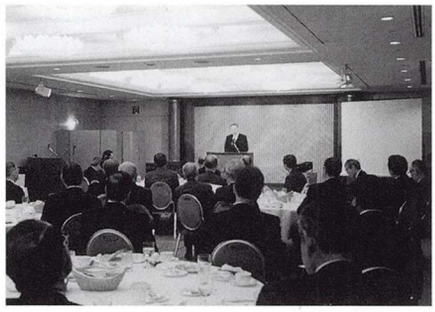
◀会員の訃報
名誉会員　和田　眞一氏（東和組）
逝去日は平成11年11月９日

「建築クラブ」ご入会のおすすめ

昭和47年６月に発足した「建築クラブ」（日本建築協会会員有志の集まり・現在会員数約100名）は、毎月１回大阪全日空ホテルにおいて学者やジャーナリストをはじめ政財界・文芸界・スポーツ・芸能界など幅広い分野から講師をお招きして、講演を聞く朝食会を開催しております。

会員の皆様の情報交換・ご懇談・親睦の場として、誠に有意義なクラブでございます。21世紀スタートのこの機会に、会員の皆様の是非ともご入会をお願いいたします。また、ビジターとしての参加もできますので、お気軽にご参加されますようお待ちしております。

■会　　費　　48,000円／年
■ビジター参加料　　4,500円／１回
■２月・３月例会（予定）
＊第346回例会　平成13年２月13日（火）am８：30～
講師／林　　章氏（㈱大林組東京本社広報室部長）
演題／よみがえる空中神殿＝古代出雲大社
＊第347回例会　平成13年３月13日（火）am８：30～
講師／室　孝幸氏（イソライト工業㈱専務取締役）
演題／全国の小中高等学校の校庭芝生化宣言を



■お問い合わせ及びお申込先
「建築クラブ」事務局　日本建築協会総務課
06-6348-0635

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。

熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03—3344—1851(大代)　大阪本社☎06—6448—3603(代)
大阪支社　☎06—6448—5851(代)　名古屋支店　☎052—211—1535(代)　中国支店　☎082—247—5541
九州支店　☎092—431—2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

空気調和　搬送機設備
給排水衛生　設計施工
人に優しい環境づくり

第一工業株式会社

大阪支店　〒530-0047 大阪市北区西天満3丁目6番14号
電話 06-6364-6661（代表）
本　　社　〒100-0005 東京都千代田区丸の内3丁目3番1号
電話 03-3311-8511（代表）

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　大島　剛
取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市中央区北浜2—2—21　電話 06(6202)7554
本　　社　東京都千代田区有楽町1—4—1　電話 03(3502)6103
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

より快適な水環境をめざして
給排水衛生設備，冷暖房設備，消火設備の設計，施工

株式会社西原衛生工業所 大阪本店

大阪本店　〒531-0071 大阪市北区中津六丁目8番4号
TEL 06-6458-3628(代表)
本　　社　〒108-0023 東京都港区芝浦三丁目6番18号
TEL 03-3452-7441(代)
支　　店　札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋・九州

空気調和設備
衛生設備　設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話(6352)1131(代)
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2—22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」

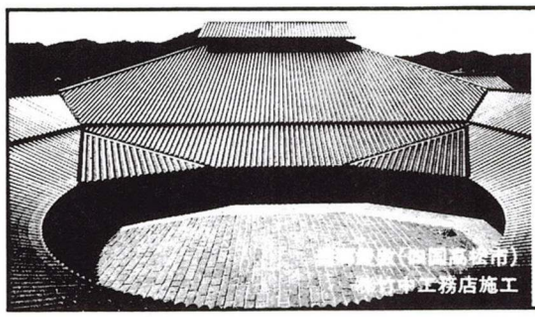
内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312—4131　FAX(06)6312—7998
東京・九州・横浜・名古屋・南九州・京都

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社三晃空調

本　　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡



〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎　六五六一〜七四五四
ファックス　六五六一〜七四一六
ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪（06）6768—5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768—1651代表
東京支社　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
〒112-0002　電話（03）5689—2351代表

夢×技=∞ 無限大
何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラの技術



電気・計装・空調・土木
K 栗原工業株式会社
本社/〒530-0017大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル)
TEL06(6313)1101
創業1919

人と都市の快適な環境をつくります

営業種目 設計・施工・監理
● 電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
● 空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
● プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
● 情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
● 電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電

まちと暮らしにあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。
住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06)6537-3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

電気設備設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長 上田正雄
本社 大阪市中央区北浜3−6−13（日土地淀屋橋ビル）
電話 06（6205）3671（代）
支店 東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電話 03（3666）1478（代）
営業所 堺・泉州・泉南・滋賀

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役 山本貴士
本社 〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代) FAX 06(6385)1050

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工
SANPO
三宝電機株式会社
取締役社長 嘉納秀一
本社 〒530-0047 大阪市北区西天満2-6-8(堂ビル) TEL06(6364)1471・FAX06(6364)5533
東京支社 〒105-0003 東京都港区西新橋3-8-3ランディック第2ビル TEL03(5472)3311・FAX03(5472)0085
名古屋支店 〒462-0847 名古屋市北区金城3-12-14 TEL052(991)5131・FAX052(914)7535
神戸支店 〒657-0035 神戸市灘区友田町3-6-11K・Tビル TEL078(842)6411・FAX078(842)6416
堺研究所 〒590-0906 大阪府堺市三宝町七丁369 TEL0722(27)8408・FAX0722(27)1424

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
取締役支社長 伊藤義信
大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号 電話大阪(6202)0325〜9番
本社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支社 北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒板・掲示板・家具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3—4—5
TEL06(6792)5858 FAX06(6792)2810

Construction chemistry for the future.
コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材
Master Builders Technologies
株式会社 エヌエムビー
株式会社 ポゾリス物産
本社：東京都港区六本木3−16−26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-6202-3294

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06−6532−0641(代表)
FAX.06−6535−5181
天理営業所 天理市丹波市新町49

●情報処理●企画・制作●編集●画像処理●印刷・製本
人と技術をクリエイティヴで結びます
日本データネット株式会社
本社 〒530-0043 大阪市北区天満1-1-10 TEL.06-6352-7502 FAX.06-6355-2714
制作部 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19 TEL.06-6352-0943 FAX.06-6355-5533
印刷工場 〒530-0043 大阪市北区天満2-5-15 TEL./FAX.06-6352-1551

パブリックトイレに求められるのは「清掃性」「節水」「清潔」です。

セフィオンテクトの自動洗浄大便器が、パブリックトイレの「ラクしてキレイ」を実現します。



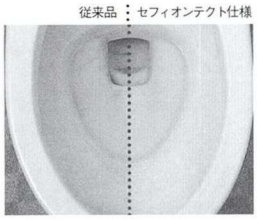
生活環境企業へ
TOTO

ウォシュレット付
自動洗浄大便器
CFS800+TCF561WS2
¥320,500（税別）

CeFiONtect

セフィオンテクト仕様大便器

セフィオンテクト技術だから、汚れが付きにくく、落ちやすい。掃除もラクラクです。

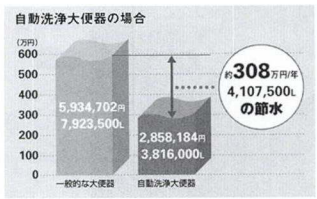


4人家族で2ヶ月間通常使用した後、やわらかいスポンジと洗剤で清掃した時の当社比較。（汚れをわかりやすくするために、薬品を塗布）

新開発の釉薬が生み出すイオンパワーとミクロレベルをはるかに超えたナノテクノロジー（超表面平滑）が、今までにない清潔でお手入れのラクな便器を実現しました。しかもこの効果は通常のお手入れでも半永久的に持続します。また、便器はかまを全周に回した、掃除のしやすいすっきりデザインも採用しています。

節水機能と自動洗浄で、高い節水効果とともに、ノンタッチ式の清潔さも実現しています。

使用者の多いパブリックトイレだけに、もっとも気になるのは水の量。自動洗浄大便器はシーケンシャルバルブ方式の採用で、大洗浄8ℓ、小洗浄6ℓを実現。従来形FV便器に比べ、約52%もの大節水が可能です（当社従来形C48比）。さらに、センサーの感知時間で大小を判断、自動的に適切な水量で洗浄するので、レバーに触れずにすむうえ流し忘れの心配もありません。清掃性、節水、清潔のご要望に応える商品は、大便器のほか小便器・洗面器までラインアップしています。



500人規模（男女比6：4、大便器数50台）のオフィスビルを想定したシミュレーションでは、従来形の便器に比べ、年間の節水量は約411万リットル、水道料金に換算して約308万円の節水効果が得られることになります。



車椅子対応ユニバーサルデザインの品揃え。
車椅子での使用も考慮しています。車椅子の高さ450mmと同一レベルになるように便座を高くした、車椅子対応タイプも用意しています。TOTOのセフィオンテクト商品は使う人も、管理する人にとっても、「ラクしてキレイ」で、省エネ性まで加えたパブリックトイレを、トータルに実現します。

商品の技術的なお問い合わせは、技術相談室へ
ナビダイヤル　FAX 0570-01-2111　TEL 0570-01-1010
受付時間／9：00～18：00（土・日・祝日を除く）
受信地：神奈川県茅ヶ崎市・福岡県北九州市

カタログのご請求は、☎ 0120-70-5717
カタログ番号「1582」24時間音声自動受付（年中無休）
さらに詳しい内容については、ホームページ「設計者コーナー」をご覧ください。
http://www.com-et.com/index.htm

きれいに生きる。人も、地球もTOTO クリーンタウン計画　進行中

建物の汚れ
トラブル事例と解決策

「建物の汚れ」編集委員会・編著

〈建築技術選書・特装版〉

企画・(社)日本建築協会

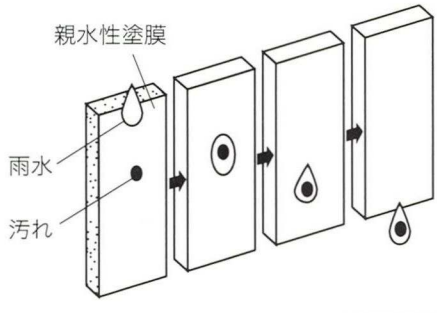
ISBN4-7615-3086-3
B5判・二色刷・168頁
定価　本体3500円＋税

学芸出版社

京都市下京区
木津屋橋通
西洞院東入
〒600-8216

tel 075-343-0811
fax 075-343-0810

建物を美しく保つにはそれなりのコツがある



本書59頁より

汚れにくい設計、効果的なメンテナンスのために
トラブルにつながる要因を事例別に整理——
ゼネコン技術者による再発防止策のノウハウを伝授する

模型とCGが創る世界。

MODEL COMPUTER PRESENTATION

あらゆる分野の模型企画・制作をはじめ、
模型、3DCG、実写の様々な組合わせで、
高精度のプレゼンテーションツールを提供します。

■ **先端ハードが生み出す高精度模型**
CADデータを利用したNCマシン(自動彫刻機)やレーザーマシンによる模型制作

■ **3次元モデリング**
3次元CADを使用して2次元データから3次元モデルデータを制作

■ **合成シミュレーション**
模型・3DCG・実写の組合わせによるCGパース、CGシミュレーションの制作

■ **CGアニメーション**
CGパース等で制作したデータを利用しアニメーションを制作

■ **ビデオパッケージ**
模型とCGを活用した映像の企画・制作
ノンリニア編集システムによる映像制作
建築コンペ、施設説明、展示映像などの各種プレゼンテーション映像制作
DVCAM,マイクロカメラによる各種ビデオ撮影

■ **インタラクティブコンテンツ**
映像、音声、テキストなどを複合したインタラクティブ(対話型)装置の企画制作



模型？それともCG？

MODEL&TOTAL DISPLAY YAMANE

産業模型のコンサルタント
株式会社 ヤマネ

〒561-0832 大阪府豊中市庄内西町4-3-11
TEL(06)6332-0157 FAX(06)6332-7086
E-mail：yyamane@osk2.3web.ne.jp
ＵＲＬ：http//www2.osk.3web.ne.jp/~yyamane

MODEL
建築・土木・橋梁・社寺佛閣・城郭・古建築・模造品・複製品
機械装置・単体機器・工場全景・製造工程計画模型・完成船舶
機関室・ポンプ室・電飾パネル・インタラクティブ装置

DIGITAL VIDEO
模型・ＣＧＶＰ企画制作
合成シミュレーション(MCP)
2D・3DCGアニメーション

雑誌 03379-2

定価1,200円●本体1,143円●消費税57円●送料共）正会員の購読料は会費に含めて徴収